仙台市文化財調査報告書168集

大蓮寺窯跡

——第2・3次発掘調査報告書——

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書168集

大蓮寺窯跡

――第２・３次発掘調査報告書――

１９９３年３月

仙台市教育委員会

1．2号窯跡

2．5号窯跡

3．単弁八葉蓮華文軒丸瓦

4．5号窯跡出土須恵器

序　　文

日頃、仙台市教育委員会の文化財保護行政に対しまして多大なご協力をいただき、感謝にたえません。

仙台市は、平成元年4月に政令指定都市に移行してから5年目を迎え、東北の中核都市としてますます発展をとげております。近年都市化の進展につれ、一方では各種の開発に伴う遺跡の発掘調査が頻繁となり、その結果、さまざまな先人の文化が解明されてきております。その反面、貴重な文化財がしだいに失われつつあることも否めないところであります。

さて、本書は曹洞宗大蓮寺の本堂新築に伴って実施した大蓮寺窯跡の発掘調査の報告書であります。この調査では7世紀の終りから8世紀の初めころの窯跡3基と多量の瓦などが発見され、当地方の多賀城創建以前の歴史を解明するうえで欠くことのできない大きな成果が得られました。これらの調査成果が今後の研究の一助となれば幸いです。

本市には、このような貴重な文化遺産が多数発見されております。私たちの祖先が残してきた文化遺産を市民の宝とし、永く後世に継承し、活用していくことは、現在の私たちに課せられた重要な責務であります。また、これらを「新しいまちづくり」に積極的に生かしていくこともきわめて大切なことであると考えておりますので、今後とも市民の皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げる次第であります。

最後になりましたが、発掘調査と整理に参加いただいた皆様と、報告書作成にあたりご指導とご助言を下さいました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒英

例　　言

1．本書は、大蓮寺本堂改築・擁壁工事に伴う大蓮寺窯跡の第２・３次発掘調査報告書であり、すでに公表された記者発表等に優先するものである。

2．本文の執筆、編集は篠原信彦が行ない、調査担当の田中則和、佐藤甲二と協議を経て記載した。

3．発掘調査、報告書作成にあたり次の方々の御指導、御助言、御協力を賜わった。（敬称略・順不同）

曹洞宗大蓮寺　宮城県多賀城跡調査研究所　東北大学文学部考古学研究室
仙台市博物館　古窯跡研究会
五十嵐保裕　須藤　隆　進藤秋輝　高野芳宏　丹羽　茂　木本元治
渡辺泰伸　辻　秀人　戸田有二　藤原二郎　佐々木政雄

凡　　例

1．本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）を使用した。

2．本書の第１図の地形図は、昭和60年測量の仙台市都市計画図（１／2500）「31－４」よりトレースして1/3縮小したものである。

3．本書の第２図の地形図は、国土地理院発行の１：50,000「仙台」の一部を縮小して使用した。

4．本書使用の図中・本文の方位は真北で統一している。

5．本書中のスクリーントーンは以下のとおり表している。

▒ 熱変化による還元・酸化焔の範囲　　□ 灰原の範囲

6．本書中の遺構略号は以下のとおりである。

ＳＤ：溝　跡　　ＳＫ：土　坑　　ＳＯ：窯　跡

7．本書中の遺物略号は以下のとおりである。

Ｅ　：須恵器　　Ｆａ：軒丸瓦　　Ｆｂ：丸　瓦
Ｇａ：軒平瓦　　Ｇｂ：平　瓦　　Ｇｃ：隅切り瓦
Ｇｄ：熨斗瓦　　Ｈ　：塼

8．多量の瓦類が出土したため、分類された瓦は代表的なものを掲載した。

9．本調査に係わる実測図・写真・出土遺物等は仙台市教育委員会が一括して保管している。

目　　次

巻頭カラー
序　文
例言・凡例
調査要項
Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．地形と環境……1
　1．位置と地形……1
　2．歴史的環境……1
Ⅲ．調査経過……3
Ⅳ．発見された遺構と遺物……7
　1．窯　跡……7
　2．灰　原……40
　3．溝　跡……42
　4．その他の遺構……59
Ⅴ．出土遺物について……61
　1．瓦 塼 類……61
　2．須 恵 器……77
Ⅵ．遺構について……82
Ⅶ．ま と め……86

調 査 要 項

遺 跡 名	大蓮寺窯跡（C－415）
所 在 地	仙台市宮城野区東仙台６丁目13－26ほか
調査期間	第２次調査　平成２年８月６日～９月14日
	第３次調査　平成３年４月22日～５月18日
対象面積	約750㎡
調査面積	約520㎡
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会社会教育部文化財課
調査職員	田中則和第二係長　佐藤好一　木村浩二　篠原信彦　太田昭夫　金森安孝　佐藤甲二　渡部弘美　工藤哲司　斎野裕彦　長島栄一　工藤信一郎　荒井　格　五十嵐康洋
調査補助員	森　剛男　前田裕志
調査参加者	相沢美佐子　阿部美代寿　石井多賀子　伊勢みつ　伊藤貞子　井田千賀　上原若子　大友節子　小野寺貴子　小嶋登喜子　片根義幸　加藤　久　菊池佳子　菊地つね子　熊谷友治　小池房子　後藤幸子　斎藤慶子　佐々木匡　佐藤和夫　佐藤　剛　在川宏志　七宮　清　須佐文恵　平　照子　高橋ヨシ子　千田あや子　早坂みつえ　洞口れい子　谷津妙子　横田正治
整理参加者	相沢せい子　砂金よしえ　石井多賀子　井田千賀　臼井美津子　大平いちみ　小野妙子　加藤若子　金沢君代　後藤幸子　斎藤珠美　佐藤啓子　須佐文恵　杉船比佐子　関内久子　平　照子　高橋朝子　千葉きよ子　中島いく子　細谷広枝　湯浅ます枝　吉川陽子

Ⅰ．調査に至る経過

大蓮寺窯跡は仙台市街地の北部を東西に走る台ノ原・小田原丘陵の東端部に位置している。この丘陵一帯は、台ノ原・小田原窯跡群と呼ばれる古代の窯業地帯で、多賀城跡や陸奥国分寺跡・同国分尼寺跡などに供給した瓦を大量に生産した場所として古くから知られている。

大蓮寺窯跡はこの台ノ原・小田原窯跡群の東端に位置しており、1975年の調査で5世紀代の須恵器を焼いた窯跡が発見され、全国的にも有名となっている。(註1) 近年、この丘陵地帯も急速に宅地化が進み遺跡が減少しつつある。

今回の調査は、曹洞宗大蓮寺の本堂解体新築、擁壁工事に伴う遺跡の発掘調査である。この地点は大蓮寺窯跡の範囲内に位置し、以前にも内藤政恒氏によって窯の存在や採集された瓦が紹介されている所として知られ、(註2) さらに5世紀代の須恵器窯も発見されていることから十分に窯跡の存在が考えられた。そのため、工事に先立って事前調査を実施することで協議を進め、平成2年8月3日の擁壁工事に伴う試掘調査で多量の瓦が発見され、灰原と確認されたため8月6日より本格的な発掘調査へと移行した。

Ⅱ．地 形 と 環 境

1．位置と地形

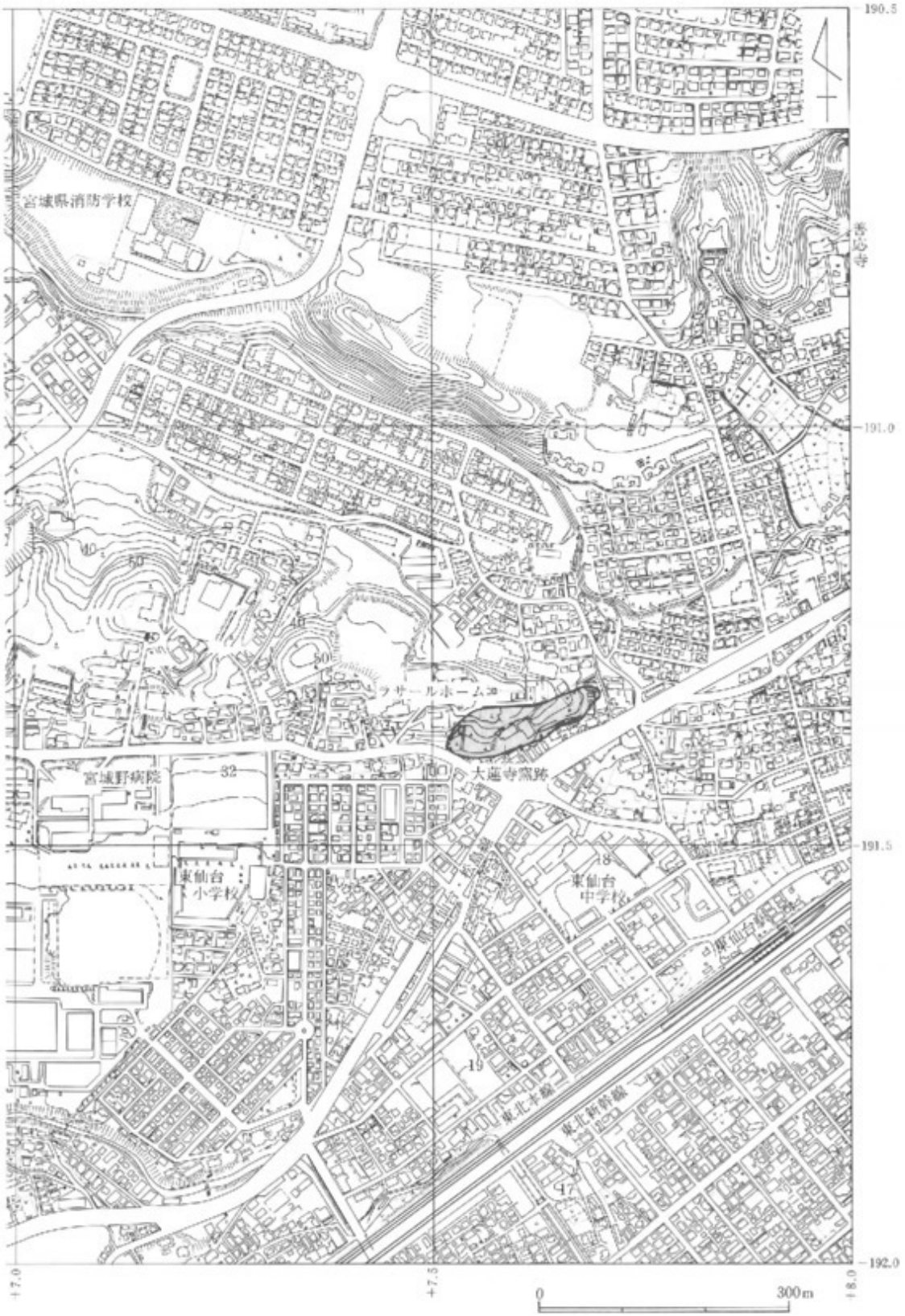
大蓮寺窯跡は仙台市北東部、ＪＲ東北本線東仙台駅の北西約400mの仙台市宮城野区東仙台6丁目13－26ほかに所在する遺跡で、仙台市街地北部を東西に長く延びる丘陵の東端部南側斜面に位置している。

この丘陵は奥羽山脈より派生して太平洋側に延びる七北田丘陵で、北側を七北田川、南側を広瀬川によって浸蝕された丘陵の東端部で、通常台ノ原・小田原丘陵と呼称されている。この丘陵を構成する地層は第三紀鮮新世の亀岡層、竜の口層などからなり、丘陵南側は河岸段丘の発達が著しく、4つの段丘のうち最も高位の台ノ原段丘にあたる。

本窯跡はこの台ノ原・小田原丘陵の東端部で舌状に張り出した標高27～40m程の南側斜面に立地している。この周辺は、仙台市中央部の北側に近接し、近年宅地化が急速に進み変貌の一途をたどっており、北側には鶴ケ谷団地などの大きな団地が連なっている。

2．歴史的環境

大蓮寺窯跡の立地する台ノ原・小田原丘陵は、古代の窯業地帯として古くから知られており、多数の窯跡群が発見され、総称して台ノ原・小田原窯跡群と呼ばれている。



190.5
191.0
191.5
192.0
+7.0
+7.5
+8.0
宮城県消防学校
善応寺
ラサールホーム
大蓮寺窯跡
宮城野病院
東仙台
小学校
東仙台
中学校
東北本線
東北新幹線
0
300m

第1図　遺跡位置図

本窯跡は台ノ原・小田原窯跡群の東端部に位置し、５世紀代の須恵器を生産した窯跡として全国的にも著名な遺跡である。さらに西側の堤町にかけては、安養寺下窯跡(4)、安養寺中囲窯跡(5)、神明社窯跡(6)、蟹沢中窯跡、枡江遺跡(7)、与兵衛沼窯跡(8)、庚申前窯跡(9)などの瓦窯跡・須恵器窯跡群が多く点在している。堤町では近世から現代まで堤焼の窯があり、古来より窯業に適した地であったことがうかがわれる。

生産遺跡のほかにも丘陵及び平野部では多くの遺跡が分布している。縄文時代から弥生時代にかけては遺物が少量出土する遺跡が知られている程度であり、現在のところ遺構は確認されておらず詳細は不明である。古墳時代以降の遺跡については多数の遺跡が発見されている。

本遺跡の北東約1.8kmの所には、古くから布目瓦が出土して寺院又は官衙の存在が考えられてきた蒜沢遺跡(3)があり(註3)、古墳時代の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構や縄文土器、土師器、須恵器、単弁蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などの遺物が出土している他、一般の集落ではあまり見られない漆紙文書が出土している(註4)。また、同700mの所には善応寺横穴群(2)が位置し、約20基が調査されている。推定でも50基以上あると考えられており、７世紀後半から８世紀初めにかけての遺物が出土している(註5)。

一方、本遺跡の南側の遺跡としては、南南西約３kmの所に奈良時代後半に建立された陸奥国分寺跡(11)・同国分尼寺跡(12)がある。南約4.5kmの所には弥生時代から平安時代の集落跡である南小泉遺跡(13)があり、その中心部には東北地方第３位で全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳(14)が位置している。さらに南約７kmの所には７世紀後半から８世紀初頭の官衙遺跡である郡山遺跡(15)が位置している。

東北東約７kmの丘陵上には、陸奥国府・多賀城跡(20)や多賀城廃寺が位置しており、七北田川・砂押川流域の自然堤防上には古墳時代から中世にかけての鴻ノ巣遺跡(17)や新田遺跡(18)、山王遺跡(19)など多くの遺跡が分布している。また、七北田川左岸の丘陵上には国指定史跡である岩切城跡(16)が位置している。

以上のように、大蓮寺窯跡周辺には古墳時代から中世にかけて連綿と続く多くの遺跡が存在している。

III. 調 査 経 過

今回の調査は２年次にまたがる調査であり、第２次調査は本堂南側斜面に建設の擁壁工事に伴う調査、第３次調査は本堂改築に伴う調査である。便宜上、第２次調査区をＡ区、第３次調査区をＢ区とする。

第２次調査（Ａ区）

No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	大蓮寺窯跡	丘陵斜面	古墳（6C前）～奈良	11	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良・平安
2	善応寺横穴群	丘陵斜面	古墳～平安	12	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安
3	燕沢遺跡	丘	縄文～平安	13	東小泉遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
4	安養寺下窯跡	丘陵斜面	奈良	14	法見坂古墳	自然堤防	古墳
5	安養寺中窯跡	丘陵斜面	平安	15	郡山遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文（後）・弥生・古墳・奈良・平安
6	神明社窯跡	丘陵斜面	平安	16	岩切城跡	丘陵	中世
7	折江遺跡	丘陵斜面	奈良・平安	17	鴻ノ巣遺跡	自然堤防	古墳・平安・中世
9	与兵衛沼窯跡	丘陵斜面	平安	18	新田遺跡	自然堤防	古墳～中世
9	鹿串窯窯跡	丘陵斜面	奈良	19	山王遺跡	自然堤防	古墳～近世
10	千人塚古墳	丘陵	古墳	20	多賀城跡	丘陵	奈良～中世

第２図　大蓮寺窯跡と周辺遺跡

平成２年８月３日、本堂に通じる階段の西側で試掘調査を実施し、多量の瓦を発見したため本調査へ移行した。８月６日、重機により表土を排除した。調査区東側で１号灰原、１号溝跡、２号溝跡などが検出され、１号灰原・１号溝跡で多量の瓦や須恵器が出土している。調査区西端では断面に３号溝跡が検出されただけである。窯跡については、焼土の範囲が確認された１号窯跡だけであり、窯跡の残存が極めて悪い状況のものであった。８月21日になって傾斜面の最下部にも遺物が出土し、遺構の発見も予想されることから重点的に精査した。その結果、２号窯跡の前庭部が検出され、地下式の窯跡であることが判明した。さらに１号窯跡と２号窯跡の間にある大きな木の切株下から半地下式の３号窯跡が検出された。９月１日、２号窯跡燃焼部の北側を重機にて拡張して調査し、焼成部は階段状の施設の床面で11段が確認された。階段の上には、平坦面の奥行に合わせて平瓦、丸瓦を分割して数段に重ねられており、焼台と考えられた。９月14日、２号窯跡の調査を最後に第２次調査を終了した。

第３次調査（Ｂ区）

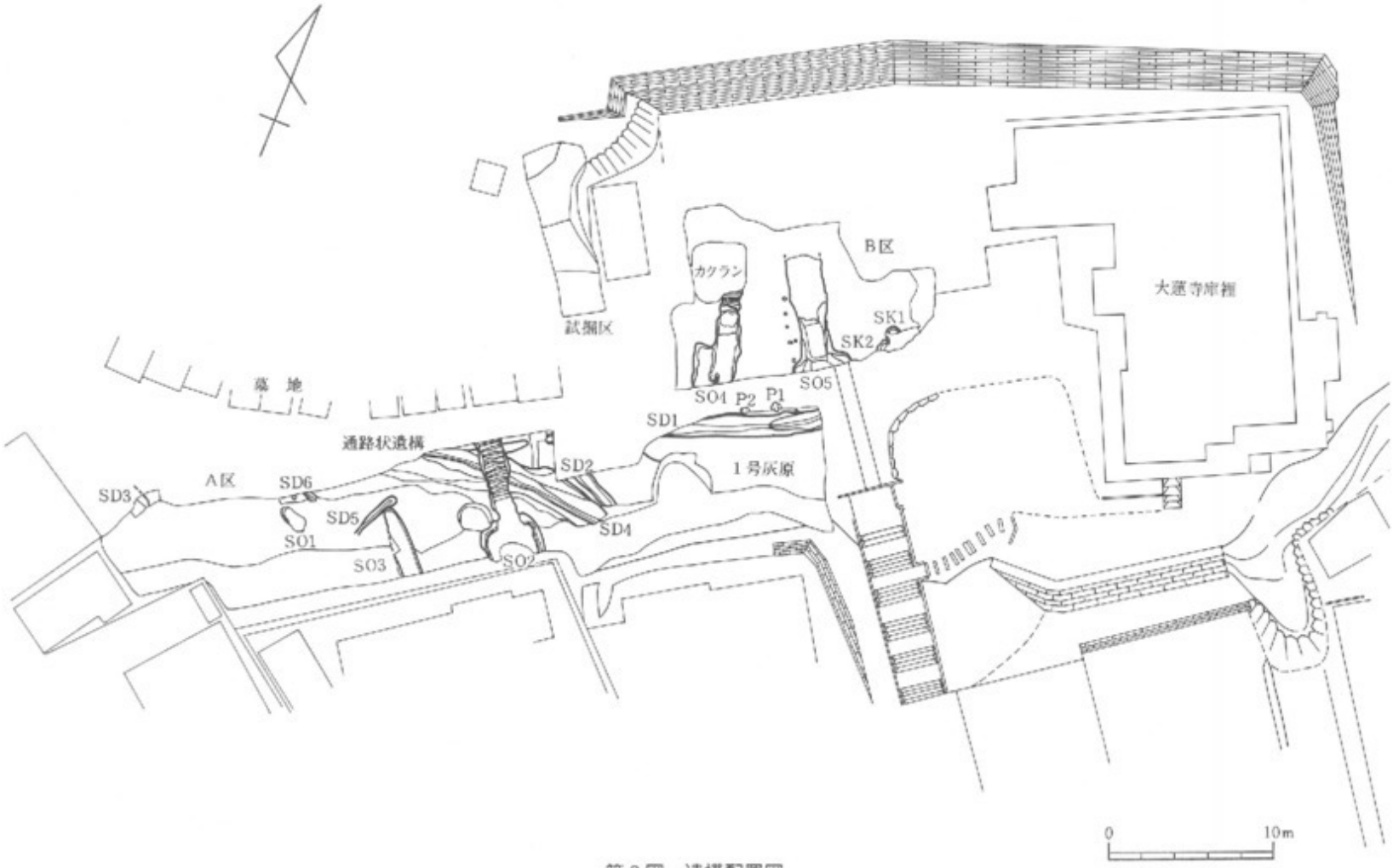
試掘調査により本堂解体新築予定部分に窯跡が確認されており、本堂の解体を待って平成３年４月22日より調査を開始した。今回の調査区は第２次調査区北側にほぼ接するように位置している。すでに南東斜面を大きく削平し、平坦に整地して大蓮寺の本堂が建てられていたため、その北側は調査対象から除外して土置き場として利用し、南側を重点的に調査するために20×６ｍの調査区を基本とした。本堂解体後の基礎がまだ残っているため重機にて排除したが、地山の砂岩まで撹乱が及んでいる部分が多かった。調査区中央付近にて窯跡が検出され、さらに北側まで延びていたため不整形の調査区となった。

調査区より２基の窯跡等が検出され、西端のものを４号窯跡（ＳＯ４）、中央のものを５号窯跡（ＳＯ５）とした。さらに東端で焼土混入の落ち込みを検出して１号土坑（旧名称　ＳＯ６窯跡）、２号土坑として調査した。４・５号窯跡は地下式の窯跡であるが、すでに窯体の上部は削平を受け、天井部及び窯壁の上部は失われて下半部が検出されたに過ぎない。

４号窯跡は大きな隅丸方形状の撹乱により焼成部のほとんどと煙道部が壊され、焼成部の一部から前庭部にかけて検出されている。焼成部は２号窯跡と同様に階段状の床面で、焼成部から燃焼部にかけて多量の平瓦片が出土している。

５号窯跡は焼成部から前庭部まで検出され、焼成部の一部と煙道部は削平のため壊されている。焼成部の床面は２・４号窯跡の階段状の床面ではなく無段のもので、両側の側壁際に排水の溝が付いている。遺物は比較的須恵器が多く出土し、その他単弁蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土している。

４・５号窯跡は床面や壁を立ち割り、床面の枚数や窯跡のつくり替えなどの調査を最後に５月18日、第３次調査を終了した。


試掘区
カクラン
B区
大蓮寺庫裡
SK1
SK2
SO5
SO4
P2
P1
SD1
墓地
通路状遺構
SD2
1号灰原
A区
SD6
SD3
SD5
SO1
SO3
SO2
SD4
0
10m

第3図　遺構配置図

Ⅳ．発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、窯跡５基、灰原１カ所、溝跡６条、通路状遺構１カ所、土坑２基であり、そのうち窯跡は地下式３基、半地下式２基である。

１．窯　　跡

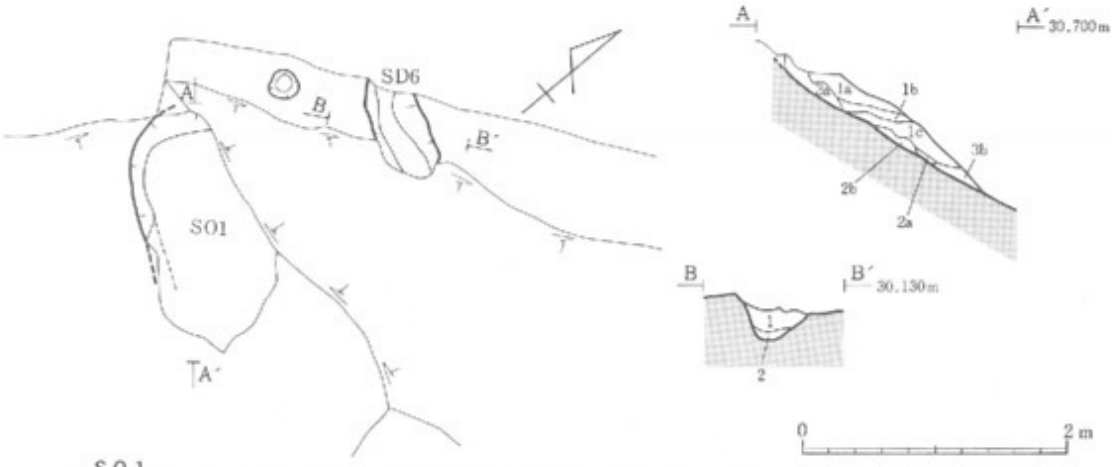
１号窯跡（ＳＯ１）（第４図）

〔遺構の確認〕　Ａ区西側の標高29.4～30.4mの白色粘土層で検出された窯跡で、東側６mには３号窯跡が位置している。

〔構造・規模〕　焼成部から奥壁にかけて部分的に検出され、窯跡の大部分はすでに壊されている。半地下式の害窯と考えられ、残存長1.8mを測る。

〔堆積土〕　３層に分けられるがほとんど失われており、堆積土は約30cmの厚さである。１層はにぶい黄褐色シルトであり、２層は床面に堆積する黄褐色シルト、３層も床面を覆う焼土を含むにぶい黄橙色シルトである。

〔焼成部〕　焼成部の奥壁の床面部分が検出されただけでほとんど壊されている。残存長1.8m、残存幅１mを測る。壁も西側の壁から奥壁にかけて残存する程度で、床面より約30cm立ち上がる。床面の傾斜角度は約28°である。遺物は出土していない。



ＳＯ１

層位	土　　色	土　性	備　　考
1a	10YR6/4にぶい黄橙色	シ ル ト	
1b	10YR4/4褐　　色	シ ル ト	
1c	10YR5/4にぶい黄褐色	シ ル ト	
2a	10YR5/8黄　褐　色	シ ル ト	
2b	10YR5/6黄　褐　色	シ ル ト	
3a	10YR5/4にぶい黄褐色	シ ル ト	
3b	10YR6/4にぶい黄橙色	シ ル ト	焼土を含む

ＳＤ６

層位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR4/4褐　　色	シ ル ト	小礫を少量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色のもろい小礫を多量に含む

第４図　１号窯跡・６号溝跡

2号窯跡（ＳＯ２）（第５～14図）

〔遺構の確認〕　調査区Ａ区の中央部付近の最も低い部分で検出された窯跡であり、西側約６mには３号窯跡が位置している。標高は前庭部床面で26.8m、焼成部床面最上部で29.2mである。

〔重複〕　窯跡の上部中央を斜方向に走る通路状遺構と１・４号溝跡があるが、直接の重複関係はない。前庭部の南側は撹乱穴により一部壊されている。

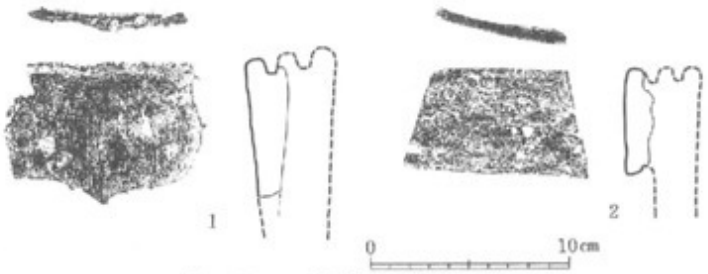
〔構造・規模〕　地山を刳り抜いて構築された地下式有段の窖窯で、調査区内での規模は、約7.5mを測る。焼成部・燃焼部・前庭部が検出され、焼成部の一部から煙道部にかけては調査区外へ延びている。窯体の主軸方向はＮ－36°－Ｗである。

〔堆積土〕　堆積土は16層に大別されるが大部分崩壊土、流入土であり、すでに天井部は崩壊している。１層は黒色・黒褐色シルトの流入土である。３・５層は灰白色・にぶい黄橙色のシルトや粘土、砂質シルトが薄く交互に堆積している流入土である。４・６～10層は天井部崩壊土や地山の砂岩、粗砂、粘土などが多く混入する層で、厚く堆積している。13層は焼成部から前庭部にかけて分布し、焼成部の床面を覆っている層で、天井部や窯壁の崩壊土、焼土、炭化物が混じり合い10～50cmと厚く堆積している。この層中には多量の平瓦が含まれ、焼成部から前庭部にかけて一面に出土している。14層は燃焼部から前庭部にかけて分布する炭化物の層である。15層は前庭部に分布する砂質シルトと粘土層の層で、焼土のブロックと明黄褐色の粘土ブロックが壁際に部分的に堆積している。

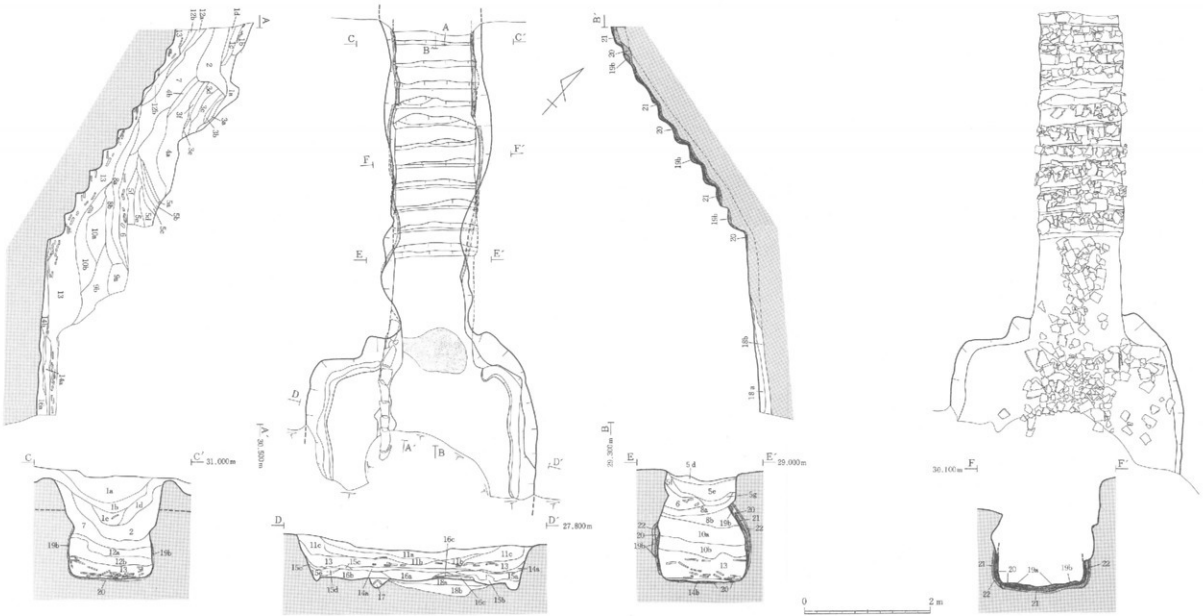
〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

焼成部　焼成部は階段状の床面であり、燃焼部と明瞭に分けられる。階段状の床面は調査区内で11段が検出され、その規模は長さ約3.6m、最大幅約1.4mを測る。標高は燃焼部奥の床面で27.1m、焼成部奥の床面で29.2mであり、焼成部の比高差は2.1mである。床面の傾斜角度は約33°とかなりの急角度である。階段は奥行約20～30cm、高さ約20～30cmを測り、７・８段目の床は天井部崩壊のためか一部壊れている。この階段上には、平坦面の奥行に合わせて丸瓦、平瓦を分割して数段に重ねており、焼台と考えられる。側壁は燃焼部との境で約1.2m、奥で約60～70cmの高さまで残存し、天井部はすでに崩壊しているが、側壁より推定して床面から天井部の高さは約1.4m前後と考えられる。床面及び壁は還元焔のためオリーブ黒色・黒褐色に変色し、非常に硬くなっている。

燃焼部　前庭部との境で長軸約１m、短軸約70cmの楕円形に焼けた部分が焚口と考えられ、床面での幅約1.5mを測る。燃焼部は焚口より長さ約1.7m、中央幅



第５図　２号窯跡出土遺物（１）



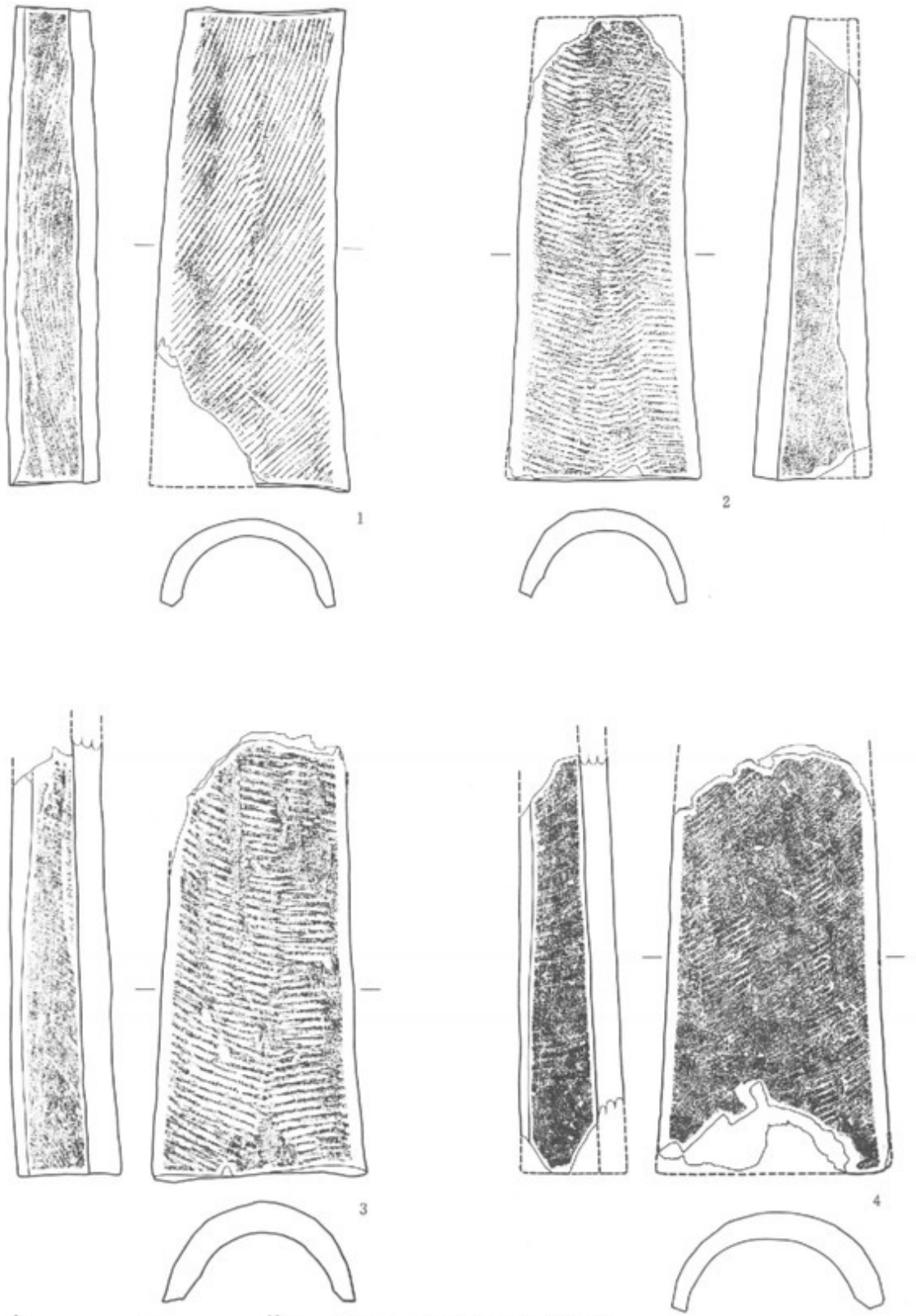
層位	土色	土性	備考
1a	10Y R2/3黒 褐色	シルト	表化物と若干の礫を含む
1b	10Y R4/4褐 色	シルト	表化物と少量の小礫を含む
1c	10Y R3/3暗 褐 色	シルト	1cm程度の小礫を含み、表化物を含む
1d	10Y R4/6にぶい黄褐色	シルト	表化角を含む、1cm以下の小礫を疎らに含む
2	10Y R4/4褐 色	砂質シルト	表化角を含む、5cm以下の砂礫の礫を全面に多く含む
3a	5Y7/2 灰 白 色	シルト	白色の砂礫小粒を含む
3b	10Y 2/6にぶい黄橙色	粘 土	シルト、層状ブロックを含む
3c	5Y7/2 灰 白 色	シルト	白色の砂小粒を含む
3d	10Y 2/6にぶい黄橙色	粗 土	シルト、層状ブロックを含む
3e	10Y R7/4にぶい黄橙色	礫	砂
3f	5Y7/2 灰 白 色	シルト	白色の礫小粒を含む
4a	10Y 2/6にぶい黄橙色	粘	少
4b	5Y7/2 灰 白 色	シルト	白色の礫小粒を含む

層位	土色	土性	備考
4c	10Y R4/6にぶい赤褐色	砂質シルト	大井遺跡群の大きなブロック、焼砂、表化物、層状ガラックを含む
5a	10Y R7/2にぶい黄橙色	粘 土	表化物と少量の礫砂を含む
5b	10Y R7/3にぶい黄橙色	粘 土	
5c	10Y R7/3にぶい黄橙色	砂質シルト	
5d	10Y R6/4にぶい黄橙色	粘土質シルト	層状遺物、にぶい黄褐色の粘土を含む
5e	10Y R5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	層状遺物、焼焦礫が砂質シルト、小礫を含む
5f	10Y R4/3にぶい黄色	粘 砂	褐褐土
5g	10Y R5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
6	10Y R5/4にぶい黄褐色	粗 砂	5cm程度の小片を多く含む、五が多く占める層
7	10Y R5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	
8a	10Y R4/6褐 色	粘 砂	安地のブロックを含む、層状粘を多量に含む
8b	10Y R4/3にぶい黄褐色	粗 砂	第6号窯等を含む、焼礫に、にぶい黄橙色の粘土をブロック状に含む
9a	10Y R7/2にぶい黄橙色	粘 土	

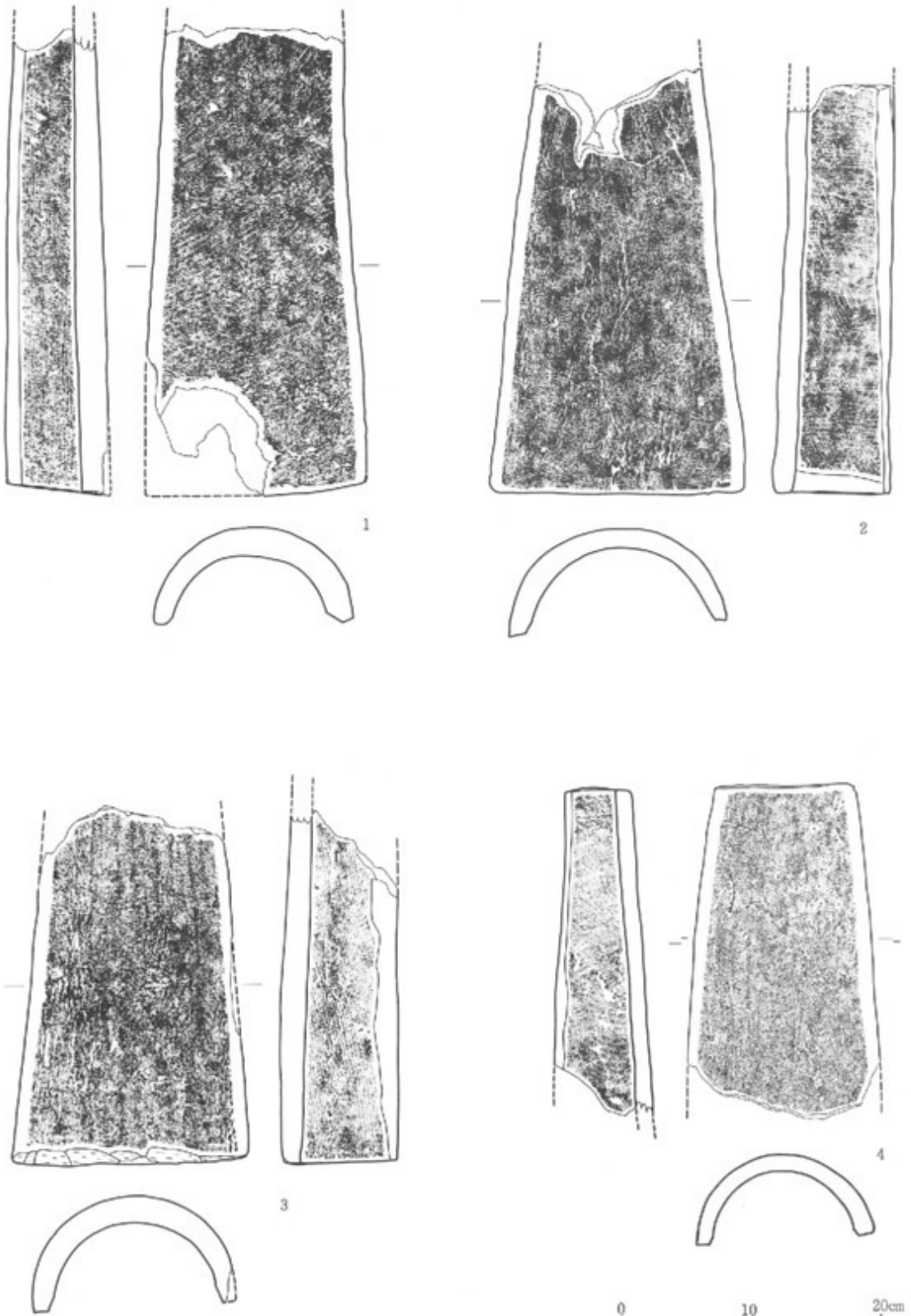
層位	土色	土性	備考
1b	10Y 2/2にぶい黄褐色	粘 土	褐褐土、風応物、焼粒色の地土を含む
10a	10Y 2/1黒 色	粘 砂	褐褐土
10b	10Y 2/6.5明 黄 褐 色	粘土質シルト	安地の大ブロック(30cm)の遺場を多く含む、他に、褐灰色のブロック、粒砂を含む
11a	10Y 2/2.5黒 色	シルト	表化角、小礫を含む
11b	10Y R3/4暗 褐 色	シルト	表化角、風応物、焼土、小礫を含む
11c	10Y R5/4にぶい黄褐色	シルト	褐灰遺粒を含む
12a	10Y R4/4褐 色	砂質シルト	1cm以下の小礫と焼砂粒を含む
12b	10Y R4/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	1cm以下の小礫と焼土粒を含む、マンガン分散に多く含む、竹建焼及ブロック(30cm)入る、元井遺構
13	10Y R4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐砂、万が焼粒混じ、焼土、炭化物、小礫の天を含む
14a	10Y R4/3にぶい黄褐色	シルト	表化角、焼土、1cm以下の褐灰遺粒を多量に含む
14b	10Y R2.1/1黒 色	粘土質シルト	1～2cmの焼土粒、1cm程の褐灰遺粒を若干、炭化物を多量に含む
15a	10Y R3/4にぶい黄褐色	砂質シルト	小礫の焼土、炭化物を散在する層
15b	10Y R3/4にぶい黄褐色	砂質シルト	粘土ブロック、炭化物を含む

層位	土色	土性	備考
15c	10Y R4/6.5明 黄 褐 色	粘 土	炭化物、焼土を含む
15d	2.5Y R4/6赤 褐 色	粘土質シルト	焼土ブロックの層
15e	5Y R5/8 明 赤 褐 色	粘 土	焼けた粘土と、黄色の粘質物の混合する層、周囲を焼ける土と粘質土にいる
16a	2.5Y7/4 浅 黄 色	粗 砂	焼土の礫状粒粒、大きなブロックを多量に含む
16b	2.5Y6/4 にぶい黄色	粗 砂	焼土粒、炭化物、層状ブロックを含む
16c	10Y R7/4 にぶい黄色	粗 土	砂、炭化物を少量含む
17	5.5Y4/1 緑 黒 色	砂質シルト	層状状ブロック、炭化物を少量含む
18a	2.5Y7/4 浅 黄 色	粗 砂	炭化物、焼土、層状状ブロックを含む
18b	2.5Y6/3 にぶい黄色	粗 砂	炭化物、礫状ブロック、焼化跡を含む
19a	5GY2/1 オリーブ黒色	砂質シルト	5mm以の小礫を含む
19b	2.5Y3/2 黒 褐 色	砂	1mm以の砂粒を含む
20	2.5Y6/8 明 黄 褐 色	砂質シルト	1mm以の砂、1cm角の小礫を含む
21	5Y5/4 オリーブ色	砂質シルト	2～3cm以の小礫、2cm以の小の粒土やブロック状に含む
22	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	2～3mmの小礫を含む

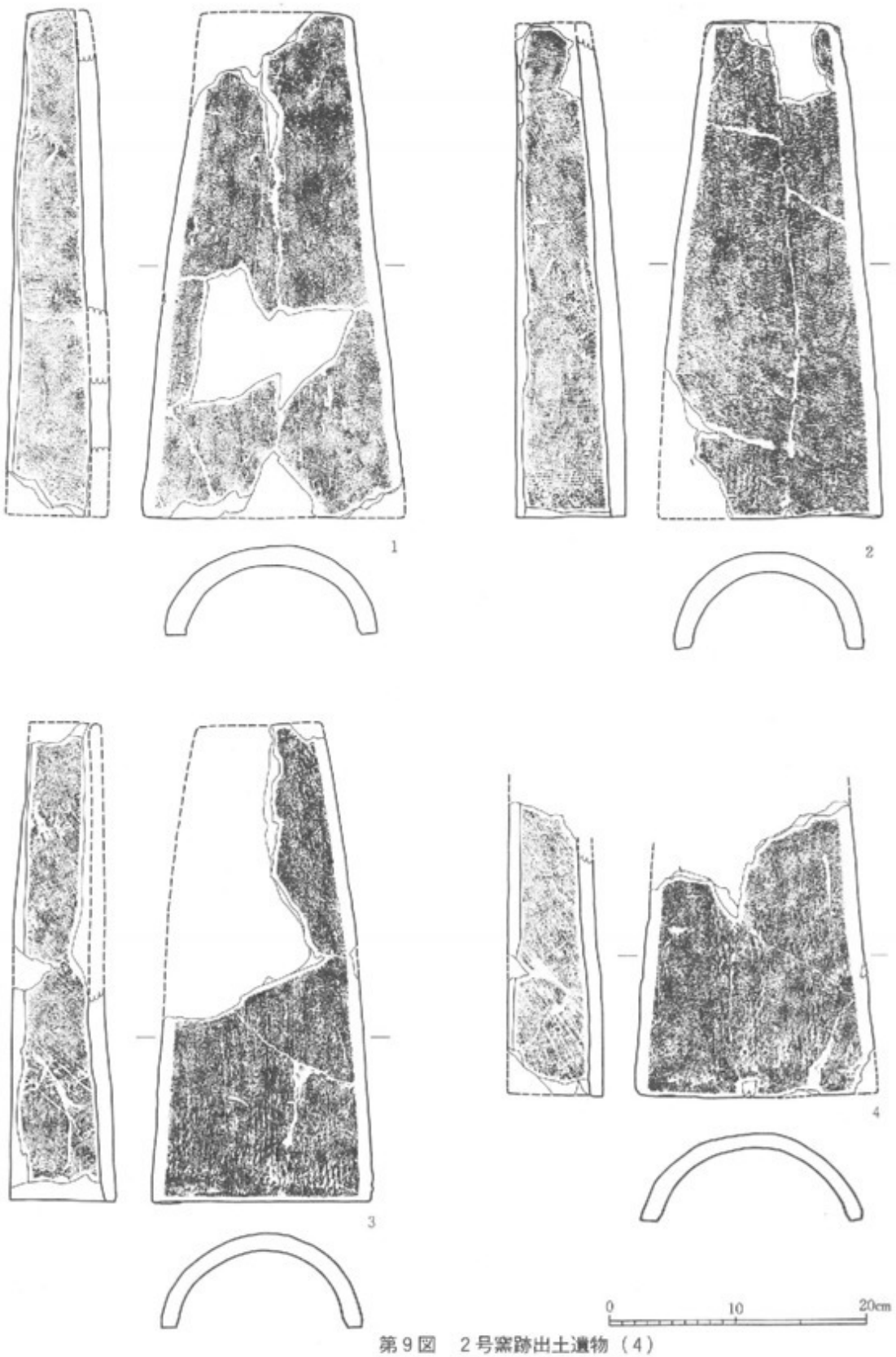
第6図 2 号 窯 跡



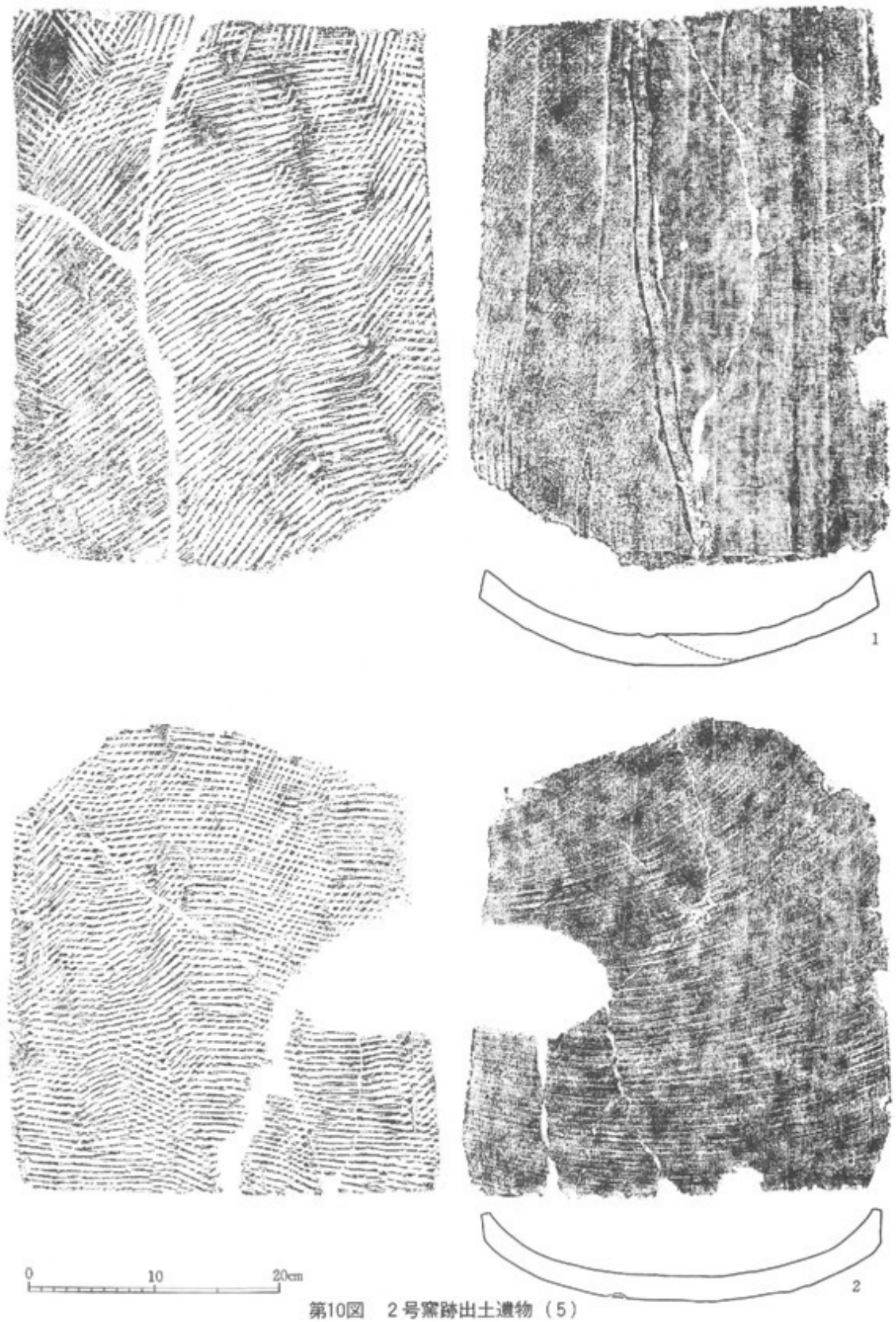
第７図　２号窯跡出土遺物（２）



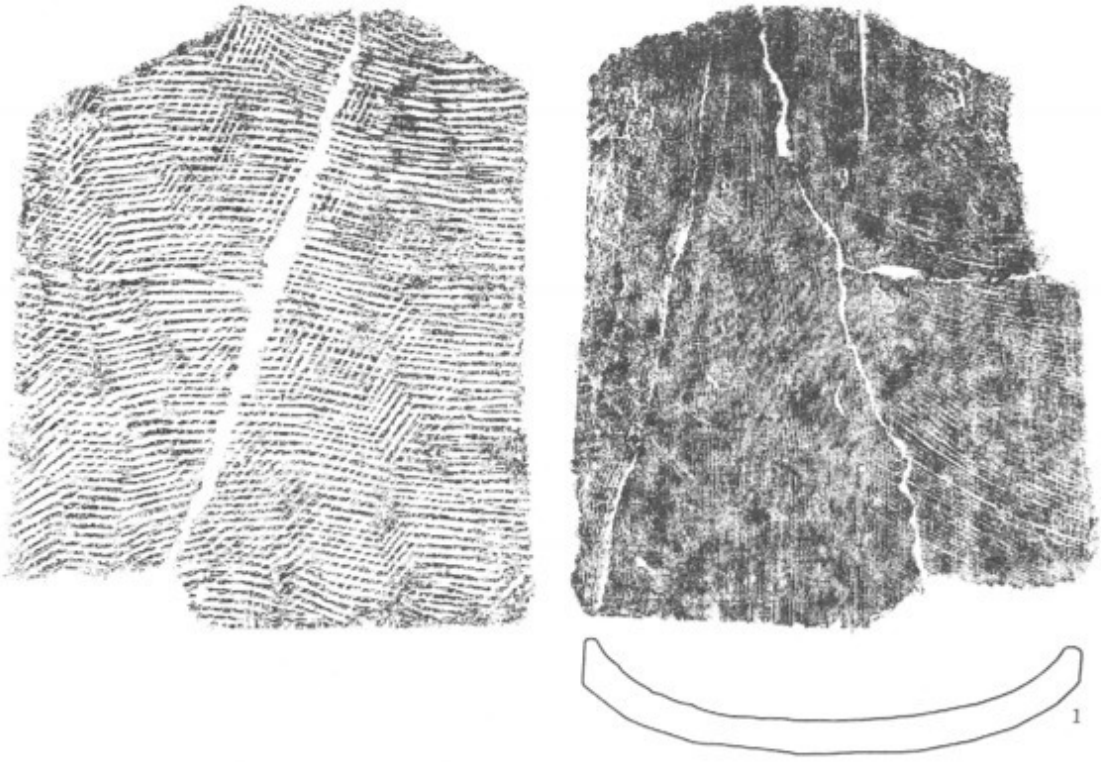
第8図　2号窯跡出土遺物（3）



第９図　２号窯跡出土遺物（４）



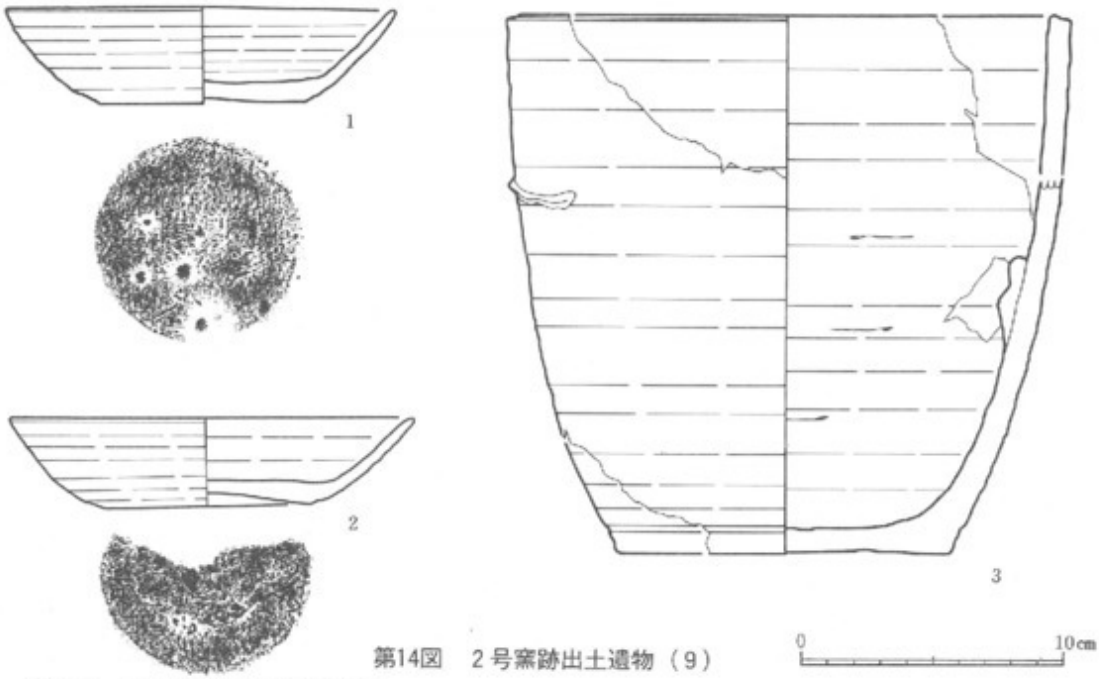
第10図　２号窯跡出土遺物（５）



第11図　２号窯跡出土遺物（６）

第12図　２号窯跡出土遺物（７）

第13図　２号窯跡出土遺物（８）



第14図　2号窯跡出土遺物（9）

第1表　2号窯跡出土遺物観察表

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 長さ	法量 広端幅	法量 狭端幅	特徴 凸面	特徴 凹面	分類	備考	写真図版
5－1	Ga－41	野平瓦	SO2 焼成部 床面2段				ロクロ挽き出し叩文	ナデ	IIb		
5－2	Ga－42	野平瓦	SO2 焼成部4層				ロクロ挽き出し叩文	横方向のナデ	Ic	段顎	

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 長さ	法量 広端幅	法量 狭端幅	特徴 凸面	特徴 凹面	分類	写真図版
7－1	Fb－1	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.5	37.4		12.4	平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、両側縁ヘラケズリ	IIa	20－1
7－2	Fb－2	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.7	36.2	15.0		平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、両側縁ヘラケズリ、凸面白土痕	IIa	20－2
7－3	Fb－3	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.2	(34.7)	14.3		平行叩き目A	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、布目じ痕、両側縁ヘラケズリ	IIa	20－3
7－4	Fb－4	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.1	(33.6)	18.0		平行叩き目A→スリ消し	糸切り痕、布目痕、布目じ痕、両側縁ヘラケズリ凸面白土痕	IIa	21－1
8－1	Fb－5	丸瓦	SO2 焼成部カクラン	(36.2)			平行叩き目A→スリ消し	糸切り痕、布目痕、両側縁ヘラケズリ、凸面白土痕	IIa	21－2
8－2	Fb－7	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.9	(33.6)	19.8		縄叩き目→スリ消し、両側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、側面縁ヘラケズリ	IIc	21－3
8－3	Fb－11	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.6	(28.2)	18.2		縄叩き目→スリ消し、両側縁・広端面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、一部タテ方向にナデ、両側面ヘラケズリ	IIa	22－2
8－4	Fb－10	丸瓦	SO2 玉縁部 排水No.3	(25.2)		16.7	縄叩き目→スリ消し、両側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、粘土板合わせ痕	IIa	22－1
9－1	Fb－8	丸瓦	SO2 焼成部 灰庫	40.1	20.4		縄叩き目→スリ消し（ヘラケズリ）	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、側面縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIa	23－1
9－2	Fb－9	丸瓦	SO2 焼成部 灰庫	39.2			縄叩き目→スリ消し、側面縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、側面縁ヘラケズリ	IIa	23－2
9－3	Fb－14	丸瓦	SO2 焼成部4層 11層、床面、灰庫	(37.8)	17.2		縄叩き目→スリ消し、両側縁・広狭端面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIa	23－3
9－4	Fb－15	丸瓦	SO2 焼成部 4層、床面、灰庫	(23.2)	18.9		縄叩き目→スリ消し、右側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIa	23－4
10－1	Gb－1	平瓦	SO2 焼成部 6層	45.2		30.5	平行叩き目A、側面斜ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、横骨痕、粘土板合わせ目痕→ナデ、広狭端面右斜切り	IIa	20－4
10－2	Gb－2	平瓦	SO2 焼成部 側壁カクラン	(38.4)	32.8		平行叩き目A、側面斜ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、両広端面斜切り	IIa	20－5
11－1	Gb－4	平瓦	SO2 焼成部 7層	(40.6)	32.5		平行叩き目A、両側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布縄じ痕、広端面左斜切り	IIa	20－6
11－2	Gb－10	平瓦	SO2 焼成部 燃焼部5層上	44.5	30.6	25.8	縄叩き目→スリ消し、両側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、横骨痕、両側縁・狭端縁ヘラケズリ、一部にナデ	IIa	21－4
12－1	Gb－20	平瓦	SO2 燃焼部5層上 SD1 最上層	44.7			縄叩き目→スリ消し、右側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、横骨痕、両側縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIa	21－5
12－2	Gb－26	平瓦	SO2 燃焼部 5層上	45.6	31.8		縄叩き目→スリ消し、両側縁ヘラケズリ、広端縁平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、横骨痕、粘土板合わせ目痕、一部ナデ、両側縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIb	22－6
13－1	Gb－33	平瓦	SO2 物原部 表土				縄叩き目→スリ消し、両側縁ヘラケズリ、広端縁平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、横骨痕、粘土板合わせ目痕、一部ナデ、側面縁・広狭端縁ヘラケズリ	IIb	22－7
13－2	Gb－21	平瓦	SO2 燃焼部5層上 物原部カクラン	41.5	34.2	29.5	縄叩き目→スリ消し（ほぼ全面ヘラケズリ）	糸切り痕、布目痕、横骨痕、両側縁ヘラケズリ	IId	23－5

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 口径	法量 底径	法量 器高	外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
14－1	E－1	須恵器	坏	SO2 焼成部1層	14.9	7.8	3.7	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、自然釉付着	ロクロナデ		5/6	23－7
14－2	E－2	須恵器	坏	SO2 焼成部1層	15.7	8.0	3.6	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ		3/5	23－8
14－3	E－3	須恵器	甕	SO2 焼成部1層	21.6	20.8	12.6	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、ナデ、自然釉、窯の設置付着	ロクロナデ、輪積み痕、自然釉、窯の設置付着		4/5	23－9

1.3m、奥幅で1.25mを測り、床面は傾斜角度6°とほぼ平坦である。天井部は崩壊しており、側壁は約1.2mの高さまで残存する。床面に薄い炭化層が堆積する以外は崩壊土である。

前庭部　平面形は方形を呈するが南側は後世の撹乱のため壊されている。前庭部床面での規模は残存長約2m、最大幅3.3mを測る。側壁に沿って幅10～20cmの周溝が巡っており、さらに、燃焼部南半の西壁沿いから前庭部にかけては、丸瓦8点が直線上に埋設された排水施設が検出された。この施設は幅20～30cmの溝の中に、凸面を上にした8点の丸瓦を接続して重ねて埋設したものである。丸瓦はいずれも無段の丸瓦であり、丸瓦II類とIII類が交互に重ねられており、南端の丸瓦2点は撹乱のため折れ曲がっている。

床面はほぼ平坦であり、傾斜角度は約6°である。また、前庭部の第13層中で平瓦が一面に検出され、第14層も床面と考えられ、前庭部には2つの床面が検出された。さらに焚口付近の前庭部壁面の一部は焼けて赤変しており、床面や周溝内に黄褐色粘土や焼土の塊がみられた。

〔遺物の出土状況〕　焼成部から前庭部第13層中にかけてほぼ一面に平瓦の破片が密集して出土しており、一括廃棄された様相を示している。これらの瓦はすべて破片であるが前庭部出土の平瓦は接合して完形品となるものもあり、焼成部床面に施設された瓦とほとんど同じもので平瓦III類である。また、前庭部床面では平瓦IIa類のほぼ完形品のものが出土している。

〔出土遺物〕　遺物は瓦総数1,054点と須恵器3点が出土している。瓦は大部分平瓦であり、96.3%を占める1,015点が出土し、その他丸瓦53点とロクロ挽き重弧文軒平瓦3点がある。

軒平瓦　ロクロ挽き重弧文軒平瓦の破片が3点で、軒平瓦Ia類とII類がある(第5図)。Ga－41は焼成部の床面の2段目に施設されている。

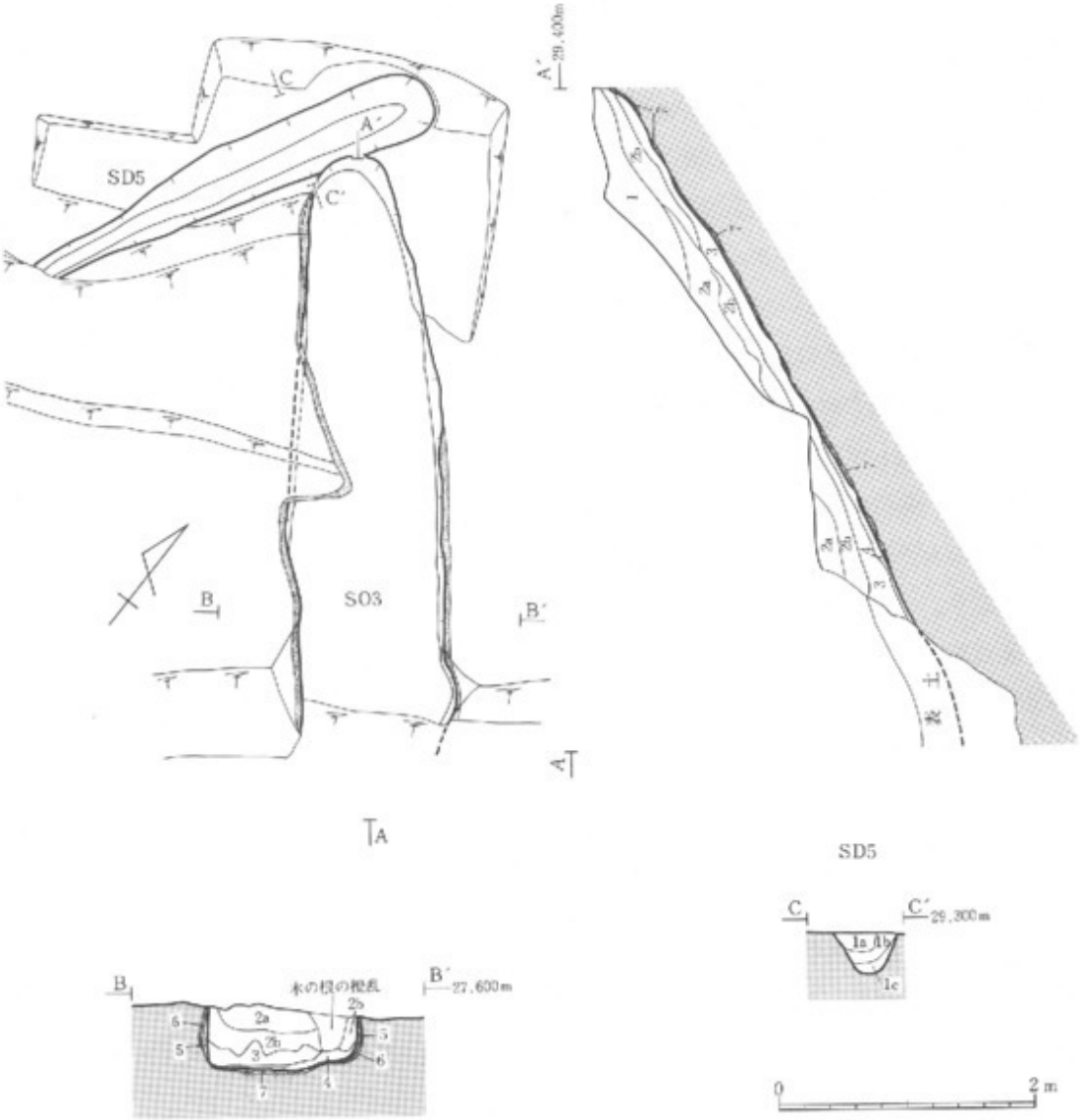
平瓦　すべて粘土板桶巻き作りの平瓦で、1,015点が出土している。凸面の叩き目の種類により平瓦I～V類が出土している。その中でも凸面が縄叩き目後スリ消しされている平瓦III類は、焼成部から前庭部のほぼ全面に出土しており、出土した平瓦の94.8%を占める962点が出土している。

丸瓦　すべて粘土板巻き作りの無段丸瓦で、53点が出土し、凸面の叩き目の違いにより丸瓦II～IV類がある。排水施設出土のものは凸面が平行叩き目のII類と縄叩き目後スリ消しのIII類の丸瓦が交互に施設されている。焼成部の床面ではIII類あるいは全面ヘラケズリのIV類がある。

3号窯跡（SO3）（第15・16図）

〔遺構の確認〕　調査区A区の中央付近の白色粘土層で検出された窯跡で、1号窯跡と2号窯跡の中間に位置している。

〔構造・規模〕　半地下式の害窯で、残存する規模は長さ4.5m、幅1.2mを測る。焼成部から奥壁にかけて検出され、煙道部、燃焼部はすでに壊されている。窯体の主軸方向はN－44°－W



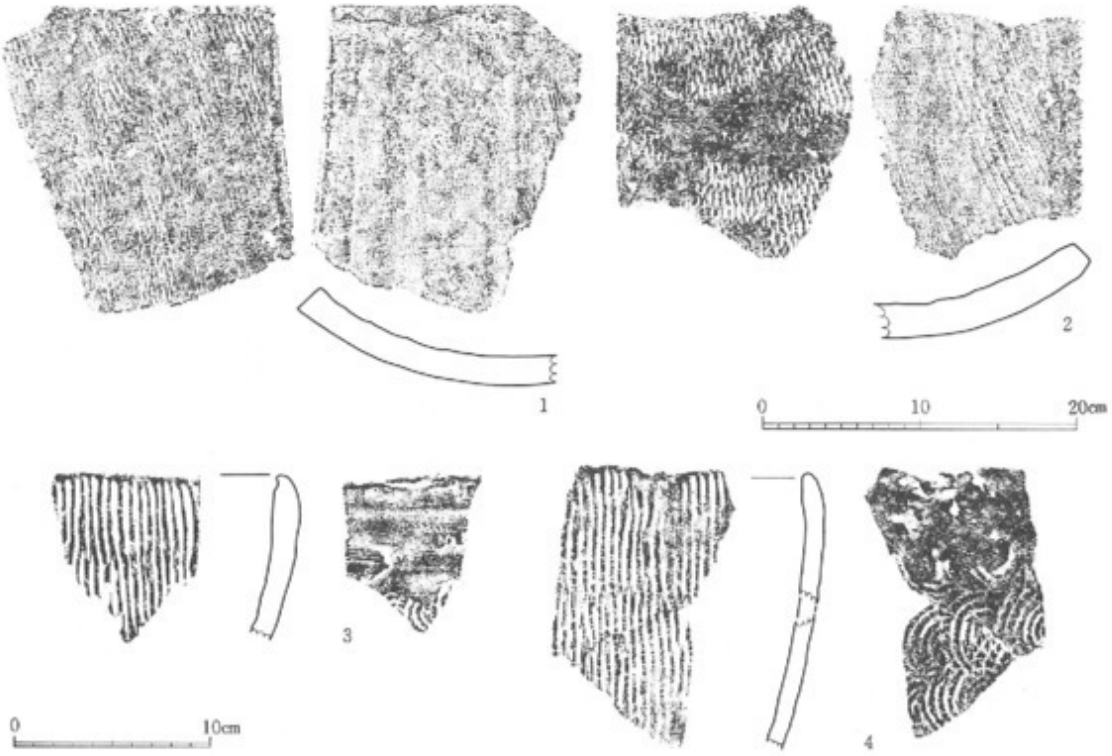
SO3

層位	土色	土性	備考
1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	2～5㎜の焼土粒を含む
2a	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	
2b	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	2～10㎜の焼土粒を含む
3	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	焼土粒を多量に含む
4	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	
5	10YR7/6 明黄褐色	シルト	窯壁が焼けて変色している
6	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	窯壁
7	5Y7/3 浅黄色	シルト	

SD5

層位	土色	土性	備考
1a	2.5Y6/6 明黄褐色	粘土	2.5Y7/6明黄褐色粘土の小ブロックを混入
1b	2.5Y6/6 明黄褐色	粘土	1a層より2.5Y7/6明黄褐色粘土を少量含む
1c	2.5Y6/6 明黄褐色	粘土	

第15図　3号窯跡・5号溝跡



番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm			特徴		分類	写真図版
				長さ	広端幅	狭端幅	凸面	凹面		
16－1	Gb－65	平瓦	SO3堆積土				縄叩き目→スリ消し、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、側縁・狭端縁ヘラケズリ	ⅢA	
16－2	Gb－66	平瓦	SO3堆積土				縄叩き目→横方向スリ消し、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、側縁ヘラケズリ	ⅢF	

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm			外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
					口径	底径	器高					
16－3	E－237	須恵器	鉢	SO3 焼成部堆積土				平行叩き目文	同心円文、ナデ		1/4	
16－4	E－239	須恵器	鉢	SO3 3層				平行叩き目文	同心円文、ナデ		1/3	

第16図　3号窯跡出土遺物

である。

〔堆積土〕　4層に分けられる。1層は黄褐色砂質シルト、2層は全体に厚く20～40cmで堆積する浅黄色シルトで小さな焼土粒を含んでいる。3層は奥壁から焼成部中央の床面を覆う浅黄色シルトの層で、ほぼ全体に約10～20cmの厚さで堆積し、大粒の焼土粒が多く含まれている。4層は焼成部中央から燃焼部側にかけての床面に薄く堆積するオリーブ褐色粘土質シルトで大粒の焼土粒を含む層である。

〔焼成部〕　残存する規模は長さ4.5m、最大幅1.2mで遺存状況は良くない。焼成部中央付近は大きな木の根があり、重機による掘削時に西側の壁から床面にかけて破壊された。壁は床面より約50cm残存しており、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は軟らかな床で、橙色に変色した部分と橙色の焼土が斑点状に混じる淡黄色の粘土質シルト部分とがあり、あまり焼けた状態ではない。床面の傾斜角度は26～30°と比較的急傾斜であり、標高は奥壁で29m、残存する焼成部南端

で26.7mを測り、床面の比高差は2.3mである。

〔その他の施設〕　奥壁の北側に接して5号溝跡が検出されており、幅20～50cm、長さ3.4mで西側に延びている。この溝跡は排水溝と考えられ、堆積土は明黄褐色粘土で溝の壁面は焼けている。

〔出土遺物〕　僅かに堆積土より平瓦III類の破片3点と焼成不良の須恵器甕片が出土している。

4号窯跡（SO4）（第17～22図）

〔遺構の確認〕　調査区B区の西端で検出された窯跡で、東側に5号窯跡が位置している。標高は確認された前庭部床面で30.6m、焼成部の床面で30.9mである。

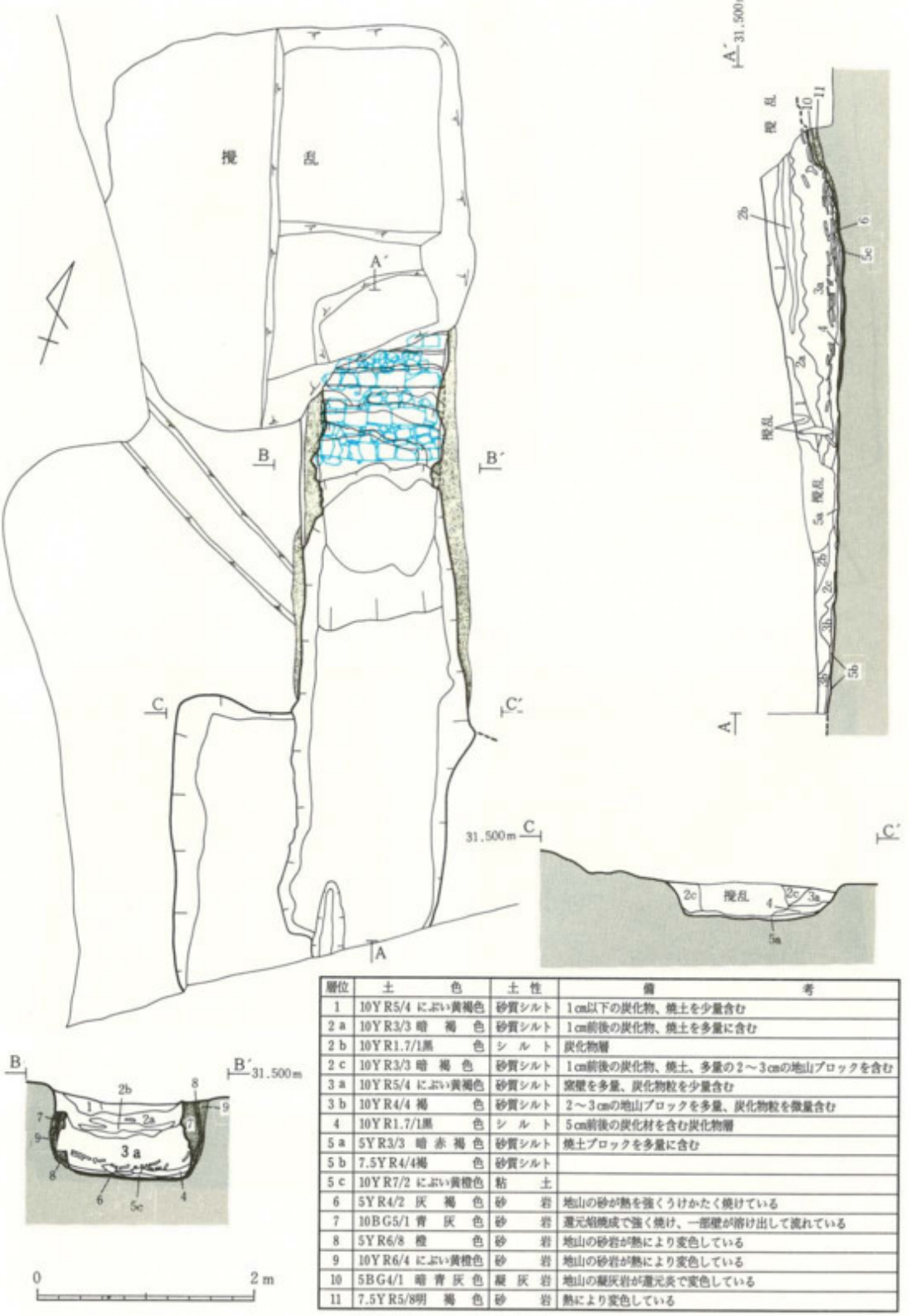
〔重複〕　大蓮寺の本堂や7×7mの方形の大きな撹乱により、焼成部と煙道部のほとんどが壊されている。

〔構造・規模〕　地山の砂岩を刳り抜いた地下式の害窯であり、窯体上半部は削平されている。残存する規模は長さ約5mで、焼成部の一部・燃焼部・前庭部が検出されている。焼成部は階段状の床面が6段検出され、その他は撹乱穴のため壊されており、前庭部も調査区南側へと延びる。窯跡の主軸方向はN－16°－Wである。

〔堆積土〕　堆積土は5層に大別され、そのほとんどは崩壊土、流入土である。1層はにぶい黄褐色砂質シルトである。2層は暗褐色・黒色の砂質シルトとシルトで2層に細分され、炭化物、焼土が混入する層である。2b層はブロック状に入る炭化物のみの層である。3層はにぶい黄褐色及び褐色の砂質シルトで、2層に細分される。3a層は燃焼部から焼成部にかけて分布し、地山の天井部が一気に崩壊した層である。層中には窯壁や天井部の崩壊土が混じり、下部に多量の瓦が混入している。層厚は20～40cmを測る。3b層は前庭部に薄く堆積する層である。4層は薄い黒色シルトで、炭化材を含む炭化物の層で燃焼部に堆積している。5層は3層に細分され、床面を覆っている層で薄く堆積している。5a層は焼土層、5b層は焼土を含む褐色シルトである。5c層はにぶい黄褐色の灰層で燃焼部に薄く堆積している。

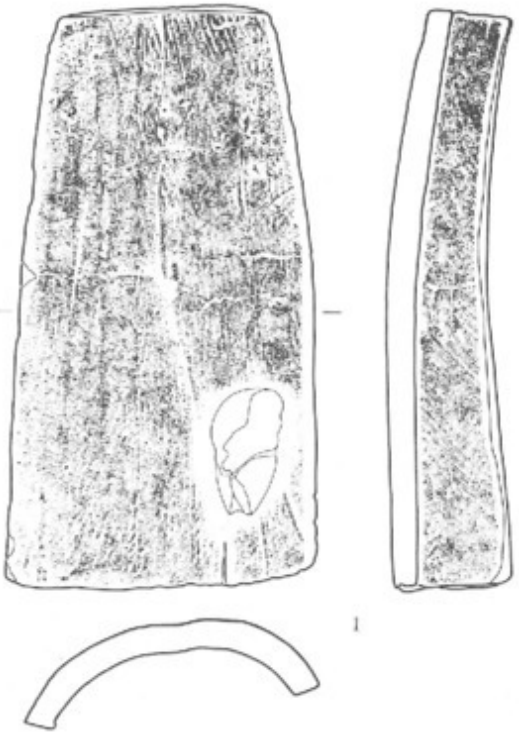
〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

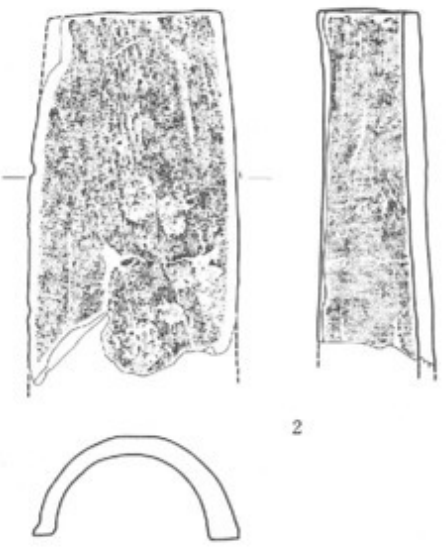
焼成部　残存する規模は、長さ約1.2m、幅約1.1mを測る。側壁は高さ60～70cmで、それより上はすでに削平されている。床面は階段状に6段が検出されたが、2号窯跡のように整然としているものではなく、高さが5～10cm、奥行10～30cmでやや不規則である。さらに、この階段上には丸瓦・平瓦を小さく分割し、二重に重ねて平坦に敷き詰めて4段としている。段の奥行は約30cmであり、手前側には大きな瓦を横に置き、奥に小さい瓦を敷いている。焼成部床面の傾斜角度は18°である。燃焼部から焼成部にかけての床面・側壁は強く焼け、青灰色・暗青灰色に還元している。側壁は一部高温のため溶けて流れ出している。

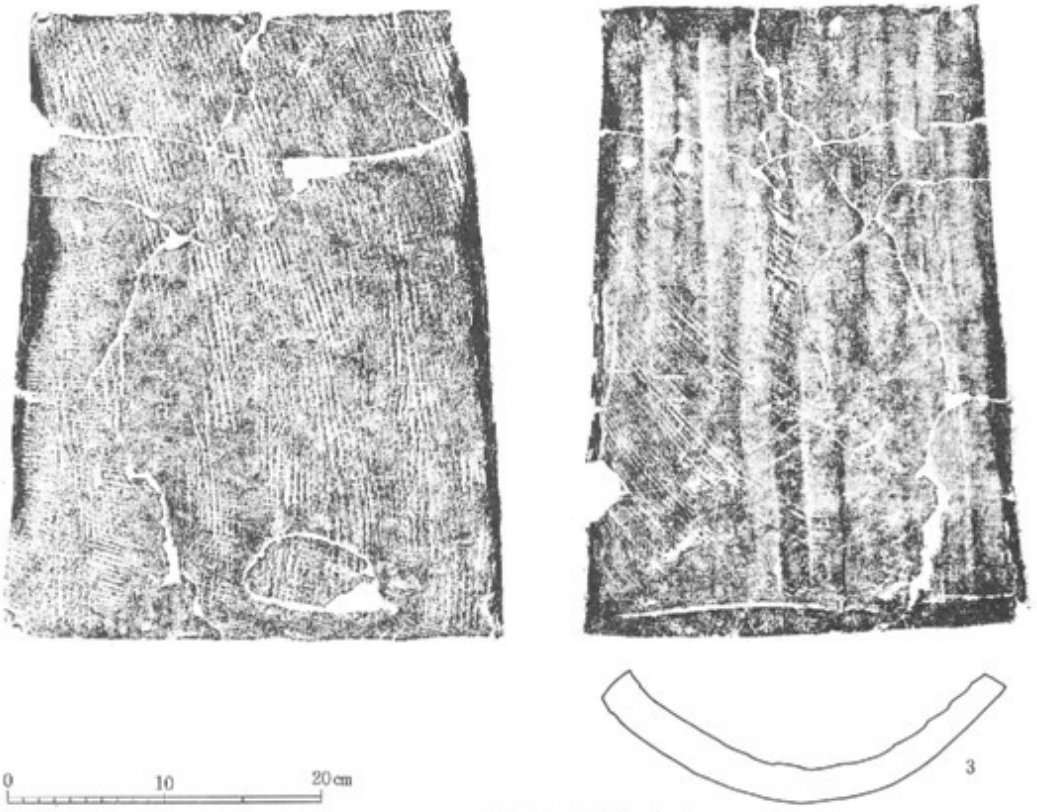


層位	土色	土性	備考
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	1cm以下の炭化物、焼土を少量含む
2a	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	1cm前後の炭化物、焼土を多量に含む
2b	10YR1.7/1黒色	シルト	炭化物層
2c	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	1cm前後の炭化物、焼土、多量の2～3cmの地山ブロックを含む
3a	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	窯壁を多量、炭化物粒を少量含む
3b	10YR4/4 褐色	砂質シルト	2～3cmの地山ブロックを多量、炭化物粒を微量含む
4	10YR1.7/1黒色	シルト	5cm前後の炭化材を含む炭化物層
5a	5YR3/3 暗赤褐色	砂質シルト	焼土ブロックを多量に含む
5b	7.5YR4/4褐色	砂質シルト	
5c	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土	
6	5YR4/2 灰褐色	砂岩	地山の砂が熱を強くうけかたく焼けている
7	10BG5/1 青灰色	砂岩	還元焔焼成で強く焼け、一部壁が溶け出して流れている
8	5YR6/8 橙色	砂岩	地山の砂岩が熱により変色している
9	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂岩	地山の砂岩が熱により変色している
10	5BG4/1 暗青灰色	凝灰岩	地山の凝灰岩が還元炎で変色している
11	7.5YR5/8明褐色	砂岩	熱により変色している

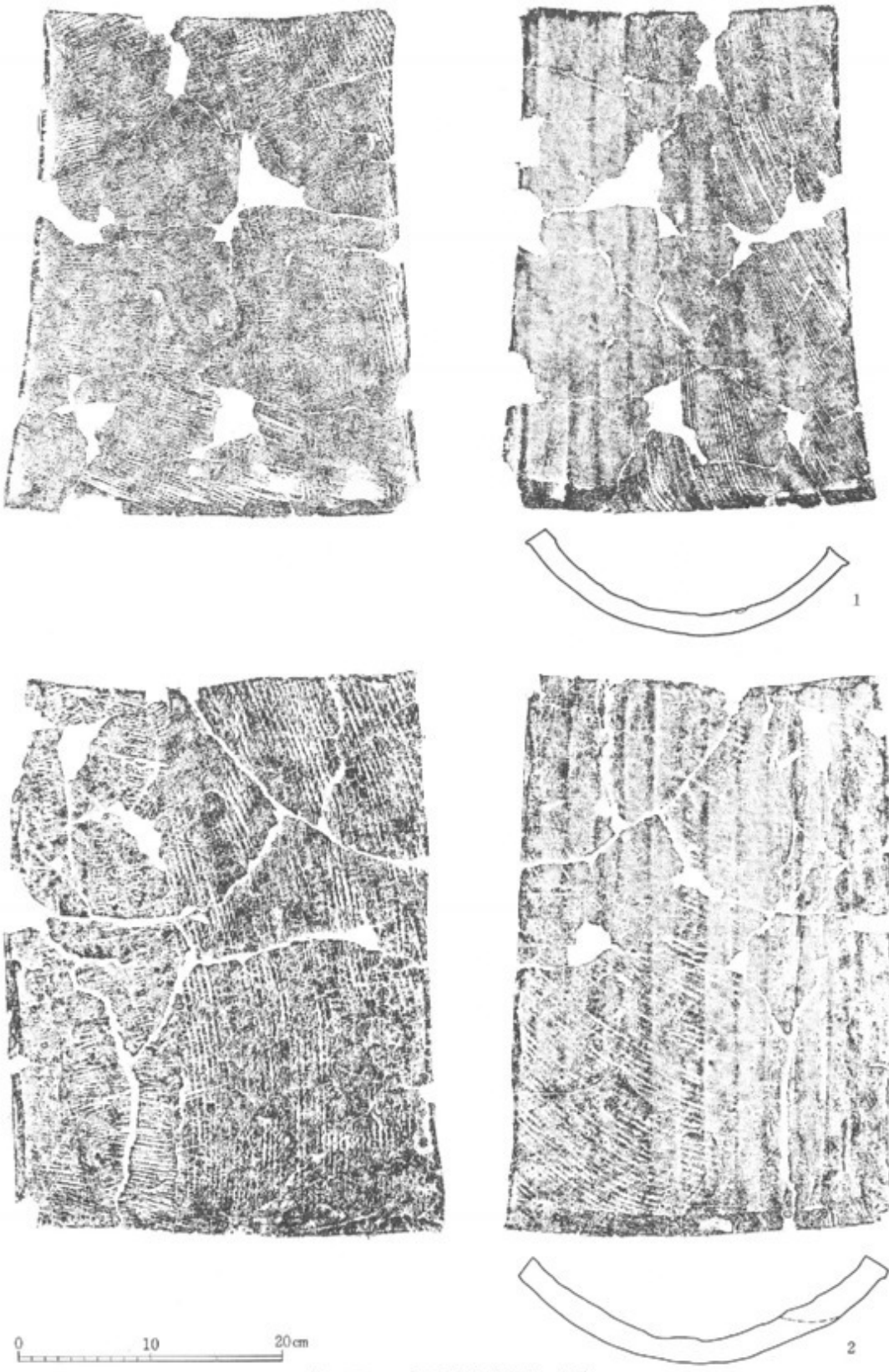
第17図　4号窯跡



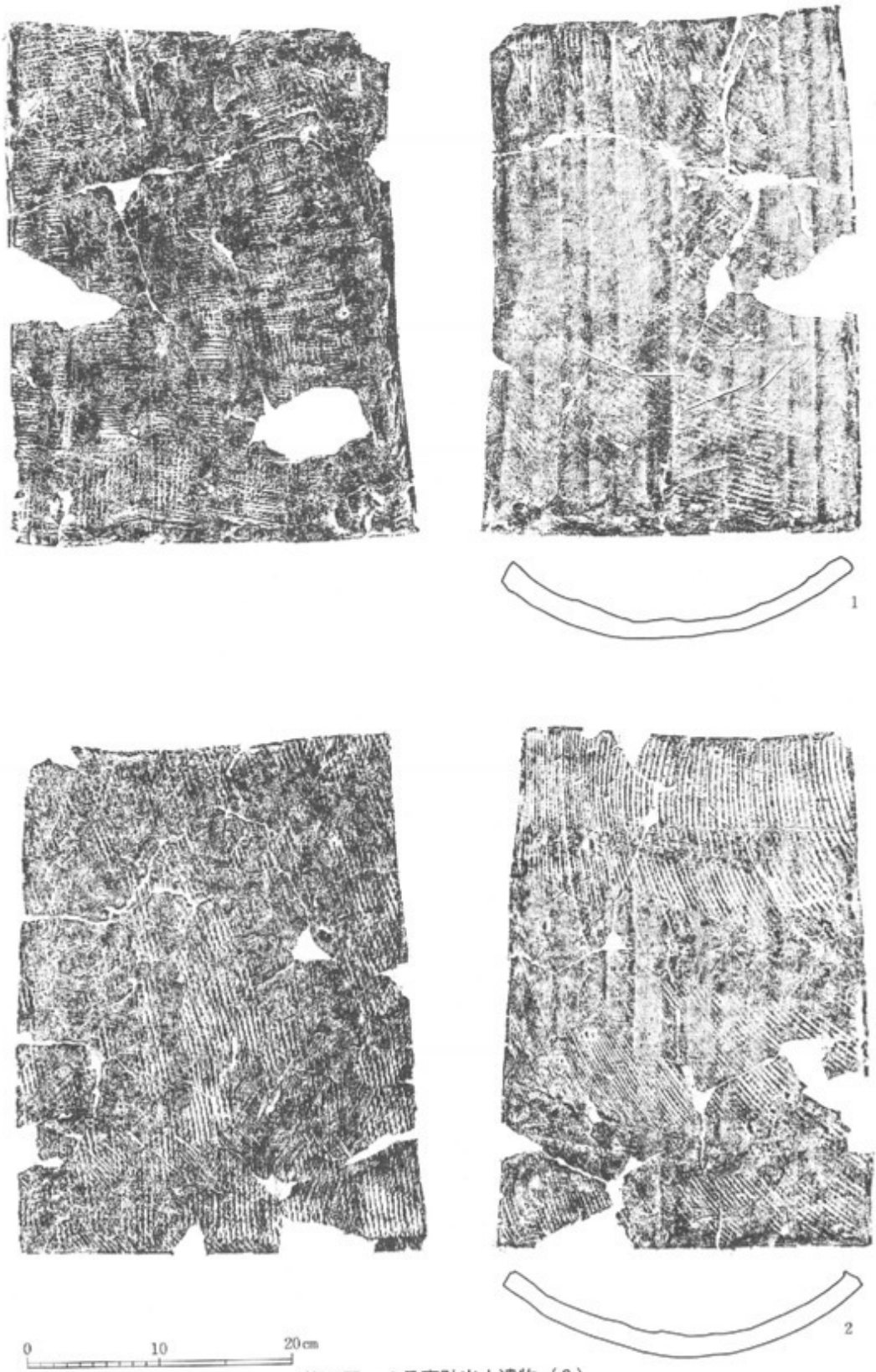




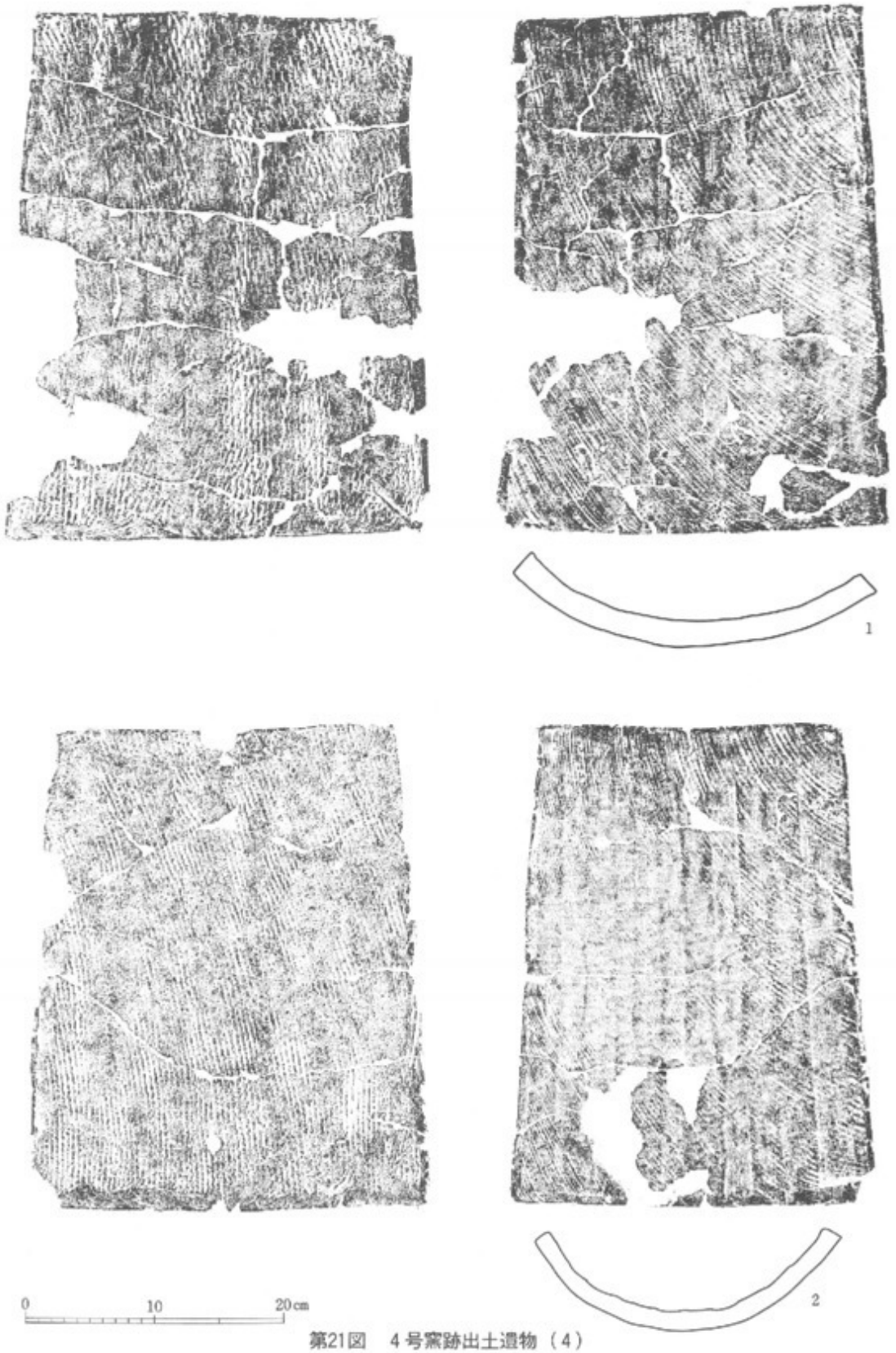
第18図　4号窯跡出土遺物（1）



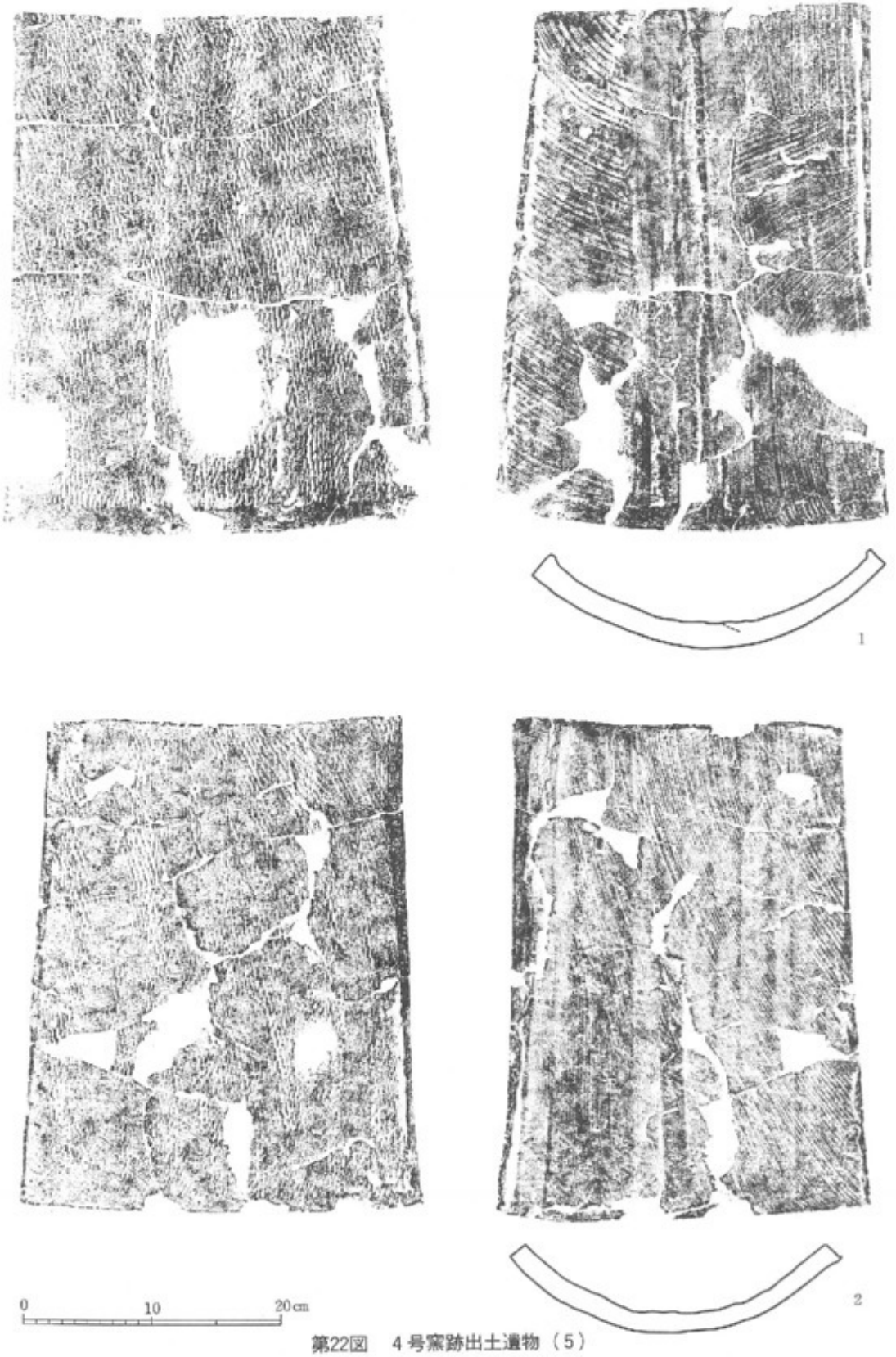
第19図　4号窯跡出土遺物（2）



第20図　4号窯跡出土遺物（3）



第21図　4号窯跡出土遺物（4）



第22図　4号窯跡出土遺物（5）

第２表　４号窯跡出土遺物観察表

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm 長さ	広幅端	狭幅端	特徴 凸面	凹面	分類	写真図版
18－1	Fb 25	丸瓦	SO4	焼成部床面施設２段目	37.7	19.7	13.6	縄叩き→ヘラ消し、布目痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、型挽ヘラケズリ	Ⅲ	24－1
18　2	Fb－29	丸瓦	SO4	焼成部３a層下部	(24.1)	－	10.5	縄叩き目→ヘラ消し、布目痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布合わせ目痕、粘土板合わせ目痕	Ⅲ	
18－3	Gb－72	平瓦	SO4	焼成部３a層	40.5	28.5	22.3	縄叩き目→ヘラ消し→平行叩き目C、凹型痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	Ⅲc	24－3
19－1	Gb 73	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層下部	39.1	26.2	22.7	縄叩き目→ヘラ消し→平行叩き目C、凹型痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凹型痕ヘラケズリ	Ⅲc	24　5
19－2	Gb－75	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層下部	43.0	28.0	26.4	縄叩き目→ヘラ消し→平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	Ⅲc	24－4
20－1	Gb 74	平瓦	SO4	焼成部３a層下部焼成部床面施設	49.2	27.6	26.6	縄叩き目→ヘラ消し→平行叩き目C、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凹型痕・広狭端痕ヘラケズリ	Ⅲc	24－6
20－2	Gb－77	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層下部	40.0	29.1	27.1	縄叩き目→ヘラ消し、広端縁平行叩きⅢC、凹型痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布縁じ痕、凹型痕・広狭端痕ヘラケズリ	Ⅲb	24－8
21－1	Gb－82	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層下部	41.3	29.6	27.9	縄叩き目→ヘラ消し、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ、広端縁一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布縁じ痕、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	Ⅲa	25－1
21　2	Gb－85	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層下部	38.4	(26.3)	22.5	縄叩き目→ヘラ消し、凹型痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	Ⅲa	25　4
22－1	Gb－86	平瓦	SO4	焼成部・焼成部３a層上面、施設内	41.9	29.5	27.0	縄叩き目→ヘラ消し、凹型痕ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、布縁じ痕、凹型痕、狭端痕ヘラケズリ、広端縁一部ナデ	Ⅲa	25－6
22－2	Gb 90	平瓦	SO4	焼成部３a層下部、床面	39.7	28.4	24.9	縄叩き目→ヘラ消し、凹型痕ヘラケズリ、広端縁一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凹型痕・狭端痕ヘラケズリ	Ⅲa	25　8

燃焼部　前庭部との境が焚口と考えられ、壁面の焼けた範囲もこの付近から焼成部までである。床面の下幅で1.2m、壁の高さ30cmを測る。焚口より焼成部の段までの部分が燃焼部であり、長さ2.3m、幅約1.2mを測り、側壁は約30～70cmの高さまで残存する。床面の傾斜はほぼ水平であり、中央部から奥にかけて長さ1.4m、幅1.2mの長方形状の範囲は僅かに窪んでいる。

前庭部　前庭部は、燃焼部の壁面・床面をそのまま南側に延長した部分と、その西側に一段高く段状となって幅1.1m、残存長2.7mの長方形状の部分からなる。東側は削平を受けているため不明であるが、西側同様のものがあったと考えられる。残存する前庭部の規模は、下幅2.5m、長さ2.7mを測る。底面の傾斜は燃焼部と同様にほぼ水平であるが、南側に向かって徐々に高くなっている。南端で幅30cm、深さ５cmの排水溝が検出され、さらに南側へ延びる。

〔遺物の出土状況〕　焼成部から燃焼部の床面直上にかけての狭い範囲に、平瓦・丸瓦片が密集して出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。これらの瓦はすべて破片のまま折り重なるように出土している。接合されて完形品となるものもあり、焼成部床面に施設された平瓦や丸瓦とほとんど同じものである。

〔出土遺物〕　出土した遺物は平瓦311点、丸瓦64点の総数375点である。平瓦は粘土板桶巻き作りのもので、凸面に縄叩き目後スリ消しされるⅢ類がほとんどである。接合されてほぼ完形のものが27点あり、凹面には糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板の合わせた痕跡、布の綴じ合わせ痕などが観察される。丸瓦は粘土板巻き作りの無段丸瓦がほとんどを占め、その他粘土紐巻き作り有段丸瓦の破片１点がある。粘土板巻き作りの無段丸瓦は、凸面が縄叩きされるⅢ類が多く、凸面がナデ、ヘラケズリされるⅣ類が次いでいる。

５号窯跡（ＳＯ５）（第23～30図）

〔遺構の確認〕　調査区Ｂ区中央付近で検出された窯跡で、西側に４号窯跡が位置している。標高は前庭部の床面で30.2m、焼成部奥の床面で31.5mである。

〔重複〕　大蓮寺の本堂が建てられていたために焼成部の一部・煙道部及びすべての天井部が

すでに削平されている。

〔構造・規模〕　地山の砂岩・凝灰岩を刳り抜いた地下式の窖窯であり、４号窯跡同様上半部は削平を受け、残存する規模は約７ｍを測る。焼成部奥から煙道部にかけてはすでに壊されており、前庭部の一部は調査区外へと延びている。窯体の主軸方向はＮ－33°－Ｗである。

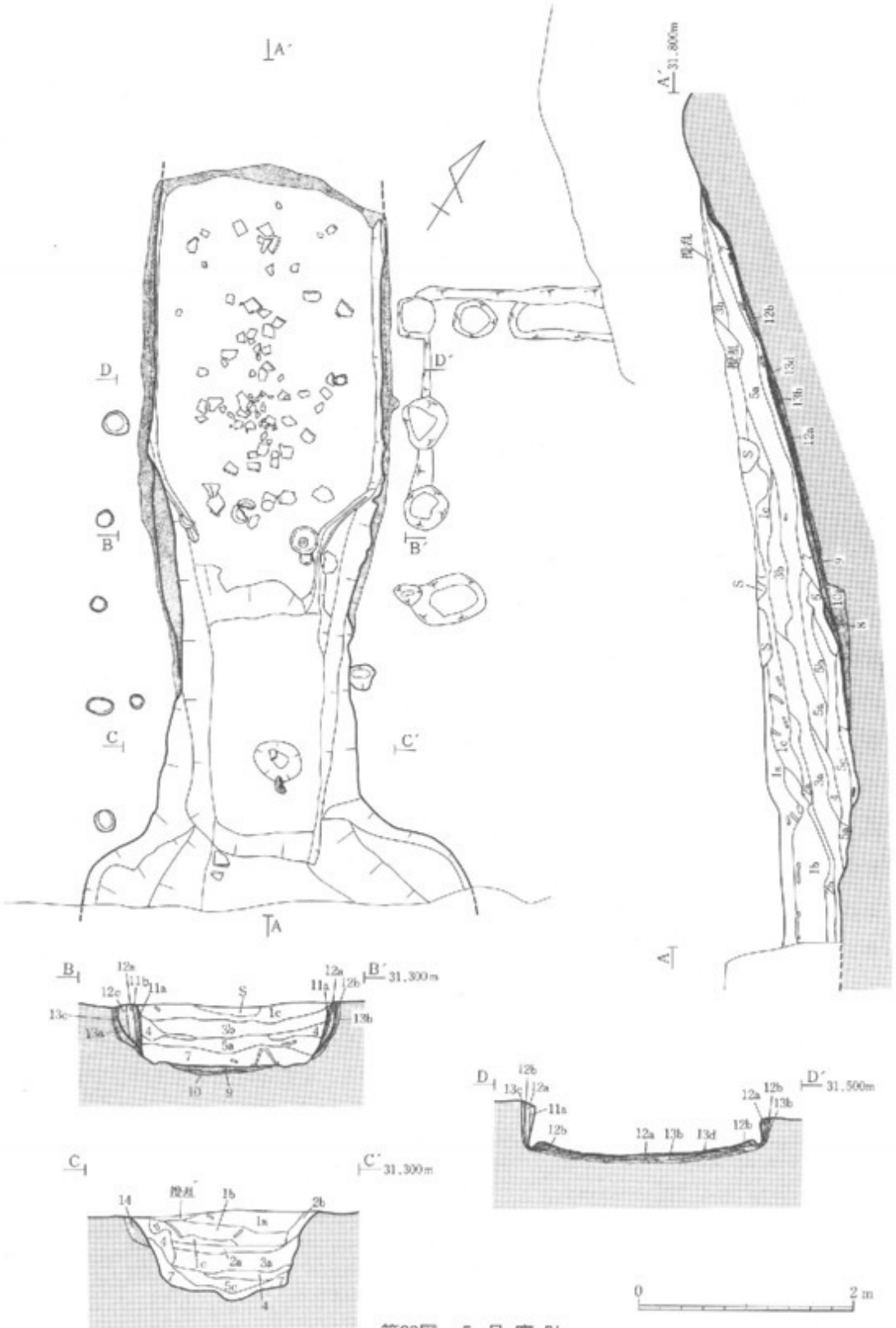
〔堆積土〕　堆積土は撹乱が著しいものの７層に大別される。１層は黒褐色粘土質シルトで、焼成部から前庭部にかけて分布し、炭化物、焼土、瓦片が含まれている。２・３層はにぶい黄褐色粘土質シルトで、焼成部から前庭部のほぼ全域に分布し、多量の炭化物や焼土、天井部崩壊土をブロック状に混入している。４・５層は黄褐色のシルト質粘土及び褐色・黄褐色粘土質シルトであり、５ａ層は焼成部から前庭部にかけて分布し、炭化物・焼土をブロック状に多量に混入している。燃焼部の５ｃ層中より単弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片１点が出土している。６層は燃焼部に分布する焼土の塊であり、７層は焼成部から燃焼部にかけて薄く堆積する黒褐色の灰層で炭化物を多く含み床面を覆っている層である。焼成部の５・７層より多量の須恵器坏・蓋や瓦の破片が多く出土している。

〔焼成部・燃焼部・前庭部〕

焼成部　焼成部床面は無段のもので、残存長3.8m、中央部幅約2.2mを測る。床面は凝灰岩をそのまま床面としている部分と粘土を張った部分とがあり、強く焼けて青灰色に還元している。横断面の床面形状は平坦ではなく、中央部がやや低く側壁に向かって徐々に高くなり、側壁下には幅５～10cmの排水溝が側壁に沿って両側に検出されている。焼成部と燃焼部は明瞭な境はないが、床面の傾斜角度が変化し、さらに壁が狭く排水溝が曲がる部分より北側が焼成部である。床面の傾斜角度は18°であり、標高は燃焼部との境の床面で30.4m、焼成部奥で31.5mである。燃焼部から焼成部にかけての平面形は羽子板状を呈する。側壁は高さ約50cmまでが残存しており、一部は高温のため溶けて流れ出している。西側壁の一部はスサ入り粘土で壁が補修されている。

燃焼部　前庭部との境が焚口と考えられ、床面での下幅約１ｍ、壁は約60cmまで残存している。焚口より焼成部との床面の傾斜が変わる部分までが燃焼部である。燃焼部は長さ約2.5m、幅約１ｍの長方形状を呈し、焼成部と前庭部よりやや窪んでいる。壁は高さ60～70cmまで残存しており、壁面は赤褐色に焼け、底面付近にも焼土の塊が多く堆積している。床面の傾斜角度は６°とほぼ平坦に近い。

前庭部　平面形は方形を呈し、残存する長さ約70cm、幅約3.7mで、南側調査区外に半分以上延びている。床面は長さ50cm、幅1.5mの不整形であり、深さは約50cmを測り、ほぼ平坦である。褐色の粘土が約10cmの厚さで壁際、床面付近に堆積している。



第23図　5 号 窯 跡

5号窯跡土層註記表

層位	土色	土性	備考
1a	7.5YR3/1黒褐色	粘土質シルト	多量の炭化物、焼土粒を含む
1b	7.5YR3/1黒褐色	粘土質シルト	1a層よりも炭化物をブロック状に多く含む
1c	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	多量の炭化物、焼土粒を含む、瓦片を多く含む
2a	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山の砂岩のブロックと炭化物・焼土粒の混合土
2b	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を少量含む
3a	10YR6/3にぶい黄橙色	粘土質シルト	窯壁、天井部の崩壊土、多量の焼土ブロック、炭化物を含む
3b	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	窯壁、天井部の崩壊土、多量の焼土ブロック、炭化物を含む
4	10YR5/8黄褐色	シルト質粘土	焼土をブロック状に含む
5a	7.5YR3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土をブロック状に含む
5b	7.5YR3/3暗褐色	粘土質シルト	5a層よりも炭化物、焼土を多量に含む
6	5YR5/6明赤褐色	粘土質シルト	焼土の塊
7	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	多量の炭化物と灰を含む
8	5YR3/6暗赤褐色	シルト	酸化焔焼成された床面である
9	7.5YR5/1褐灰色	シルト	部分的な貼り床で、還元焔を焼成され、変色している
10	2.5Y7/3浅黄色	砂岩	地山の砂岩のブロック層で、焼土、炭化層を少量含む
11a	10BG6/1青灰色	粘土	スサ入り粘土が還元焔焼成された窯壁である
11b	2.5Y8/1灰白色	灰	さらさらとした灰層
12a	5YR2/3極暗赤褐色	砂岩	地山の砂岩が酸化焔焼成され赤変している
12b	7.5YR6/8橙色	砂岩	地山の砂岩が酸化焔焼成され赤変している
12c	7.5YR6/6橙色	粘土	窯壁の補修した粘土が赤変している
13a	10BG6/1青灰色	粘土	窯壁、還元焔焼成されている
13b	7.5Y8/1灰白色	砂岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
13c	7.5YR5/6明褐色	砂岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
13d	2.5Y7/3浅黄色	凝灰岩	地山の砂岩が熱変化のため変色している
14	10YR5/6黄褐色	砂	若干熱変化のため変色している

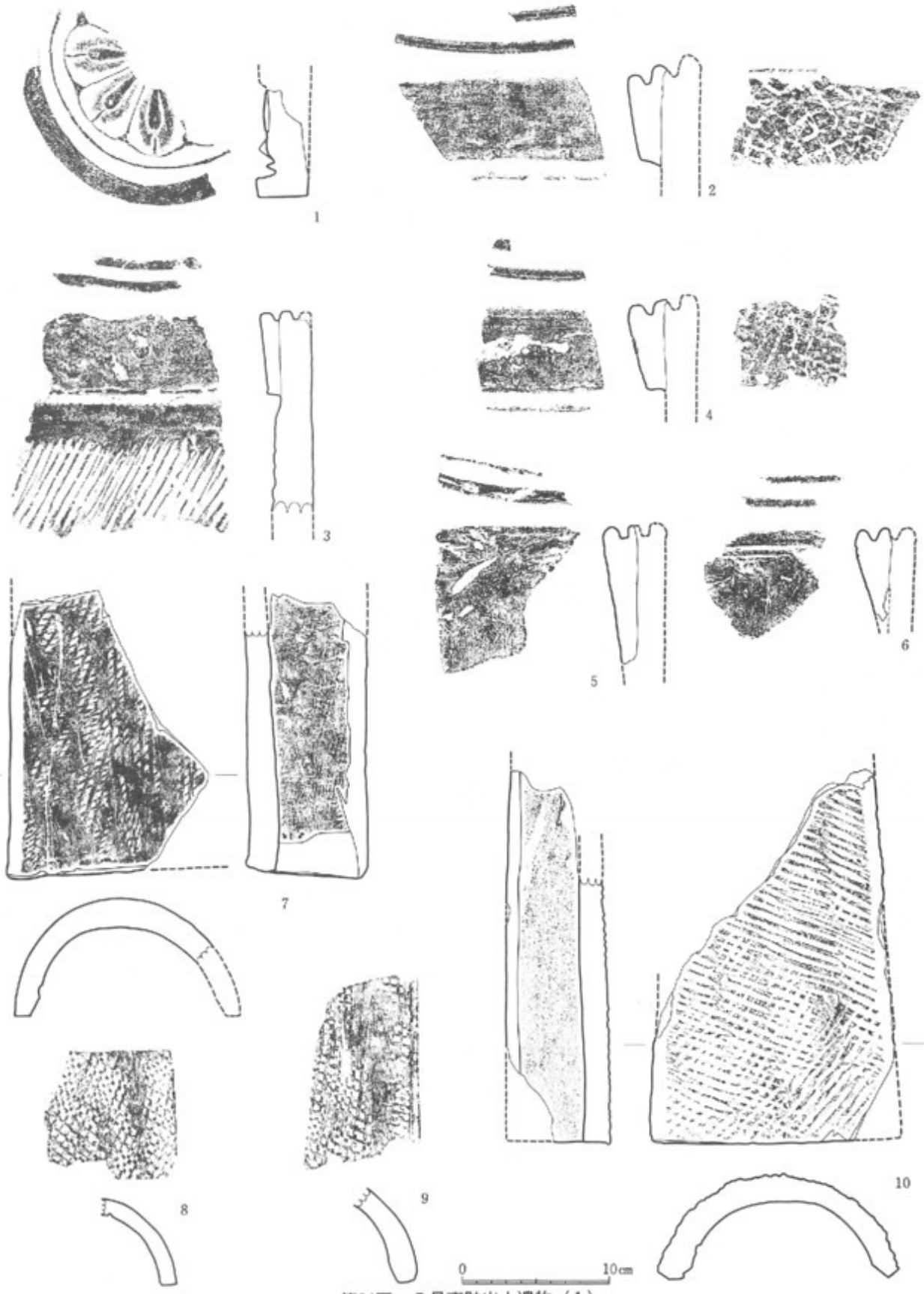
〔遺物の出土状況〕　遺物は焼成部から前庭部にかけて須恵器と瓦が出土している。須恵器は焼成部床面・床面直上から多くの坏・蓋が出土し、その他にすり鉢のほぼ完形品が倒立状態で出土している。瓦は焼成部から前庭部にかけて軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土しており、軒丸瓦は燃焼部床面直上より出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片1点がある。

〔出土遺物〕　遺物は瓦総数669点と須恵器291点が出土している。

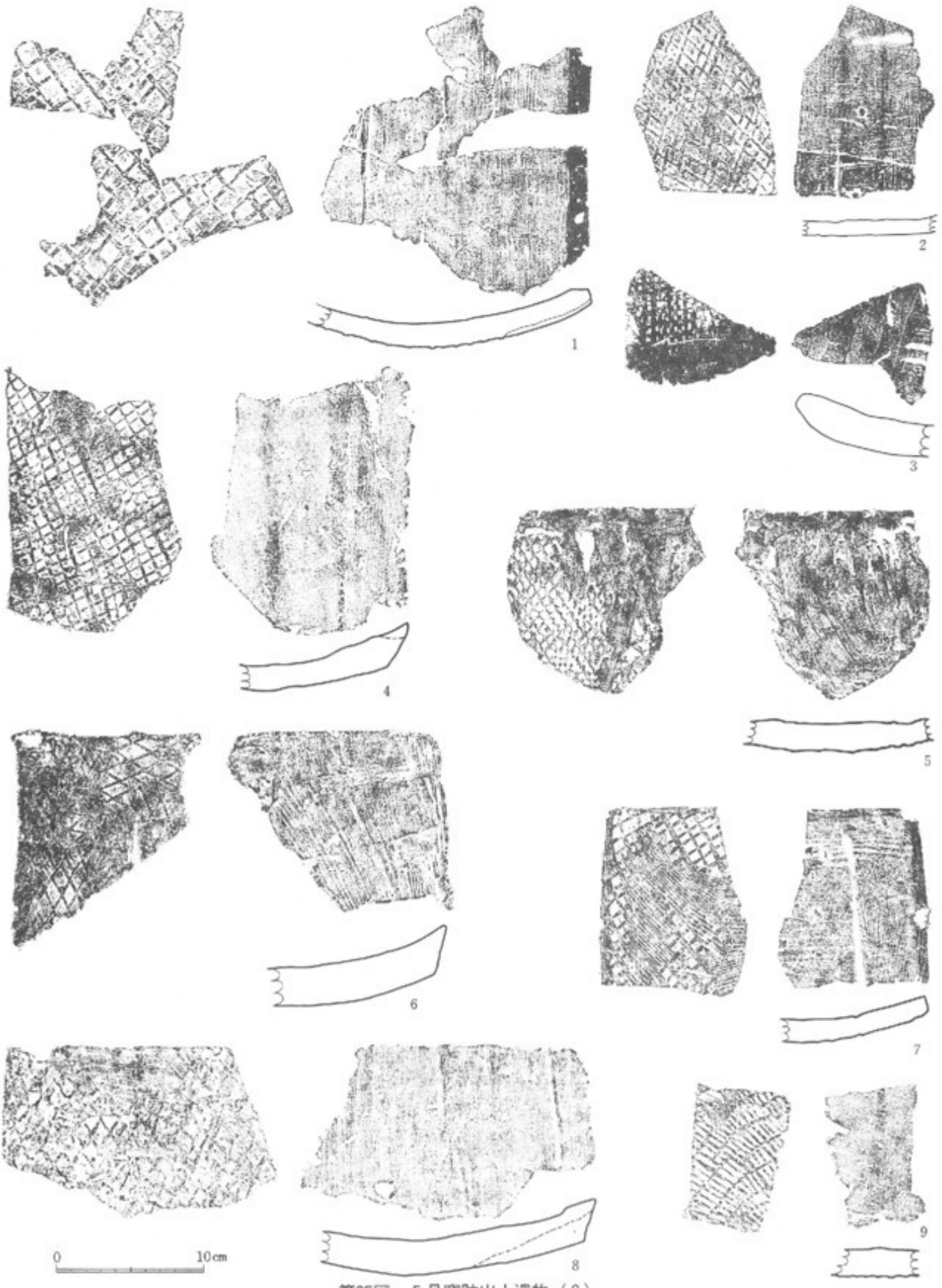
瓦　出土した瓦には軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦があり、その大部分は平瓦が占める。軒丸瓦は燃焼部床面直上より単弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片1点と周縁部の破片2点が出土した。軒平瓦は焼成部から前庭部にかけてロクロ挽き重弧文軒平瓦の破片が16点出土し、軒平瓦Ⅰ類が8点とⅡ類5点の他、分類不可能なⅢ類3点がある。平瓦はすべて粘土板桶巻き作りのもので619点が出土している。凸面の叩き目の種類により平瓦Ⅰ～Ⅴ類が出土しており、凸面が平行叩き目のⅡ類と縄叩き目後スリ消しのⅢ類が多く出土している。丸瓦は28点が出土し、ほとんど粘土板巻き作りの無段丸瓦で丸瓦Ⅰ類～Ⅳ類が出土している。その他粘土紐巻き作りの有段丸瓦

第3表　5号窯跡出土遺物観察表（1）

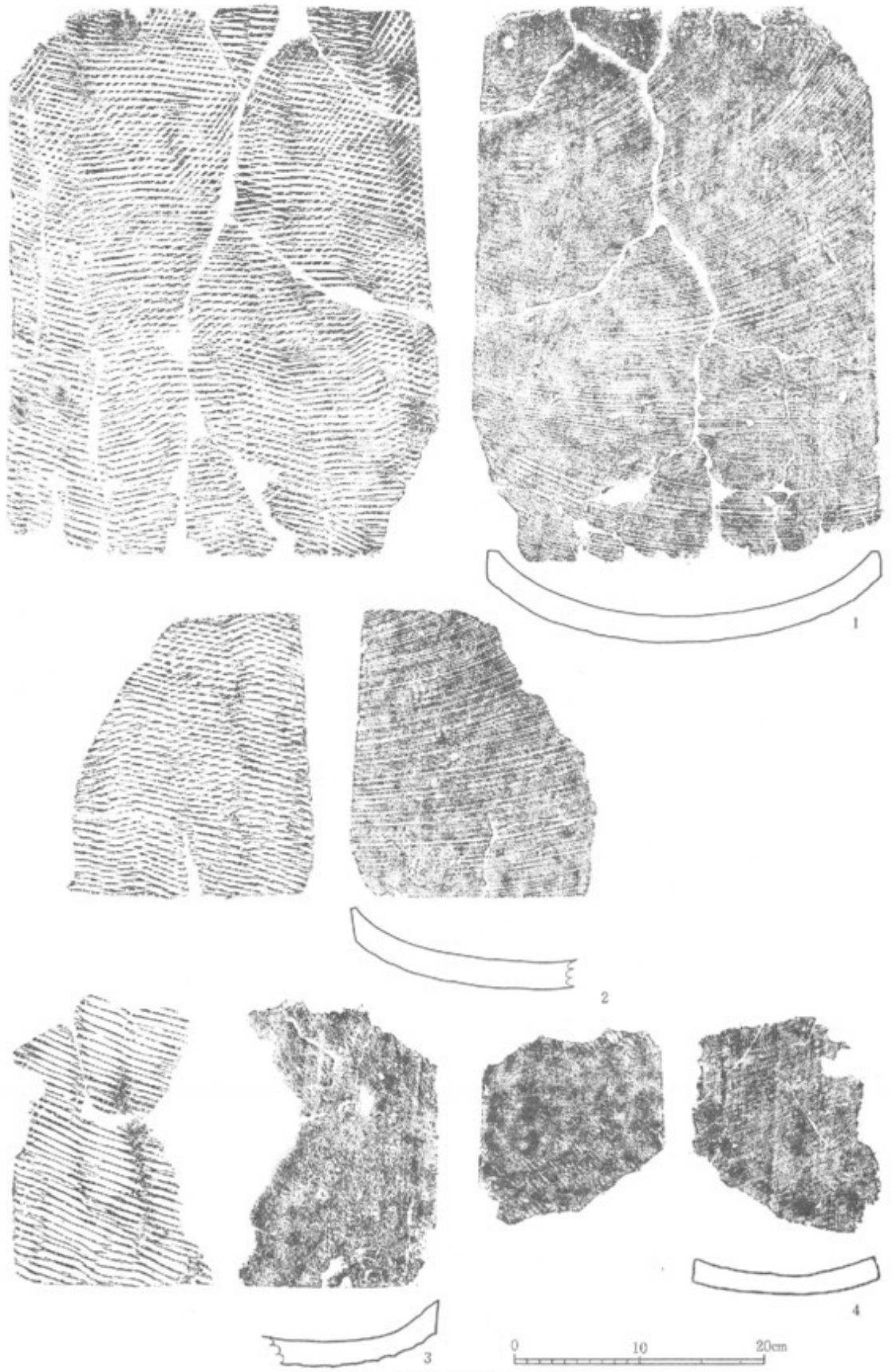
番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴 凸面	特徴 凹面	分類	備考	写真図版
24－1	Fa－1	軒丸瓦	SO5 燃焼部5a層	単弁八葉蓮華文			Ⅰb		26－1
24　2	Ga－3	軒平瓦	SO5 燃焼部1層	ロクロ挽き重弧文	横方向のナデ	斜線面正格子叩き目A・B	Ⅰa	段顎	26－3
24－3	Ga－6	軒平瓦	SO5 前庭部1層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ、平行叩き目A	布目痕、模骨痕	Ⅰb	段顎	26－2
24　4	Ga－4	軒平瓦	SO5 焼成部5a層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	斜線面正格子叩き目B	Ⅰa	段顎	
24－5	Ga－10	軒平瓦	SO5 前庭部1層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	斜線面平行叩き目C	Ⅱa		
24　6	Ga－9	軒平瓦	SO5 焼成部1層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	斜線面平行叩き目C	Ⅱa		



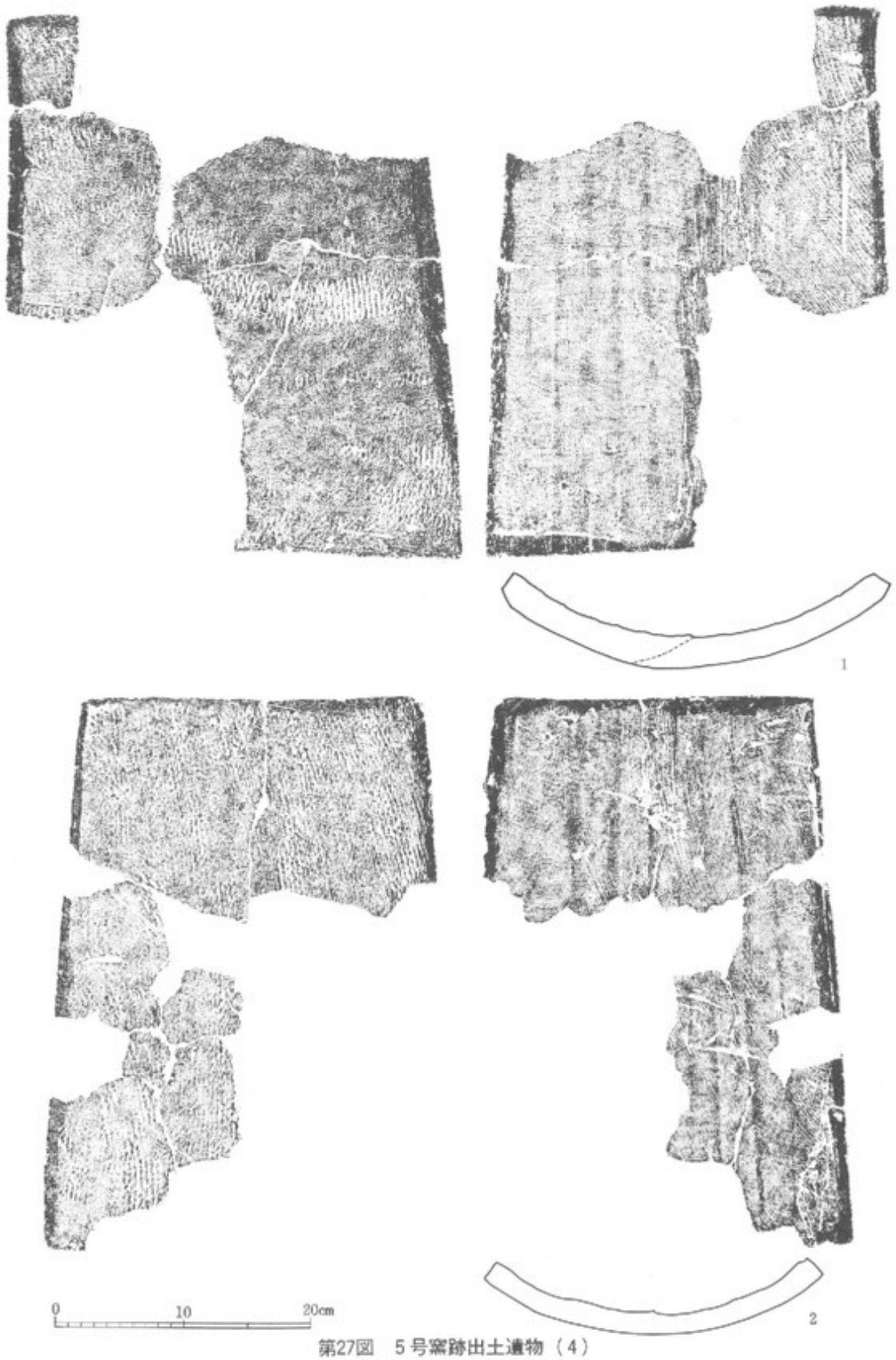
第24図　5号窯跡出土遺物（1）



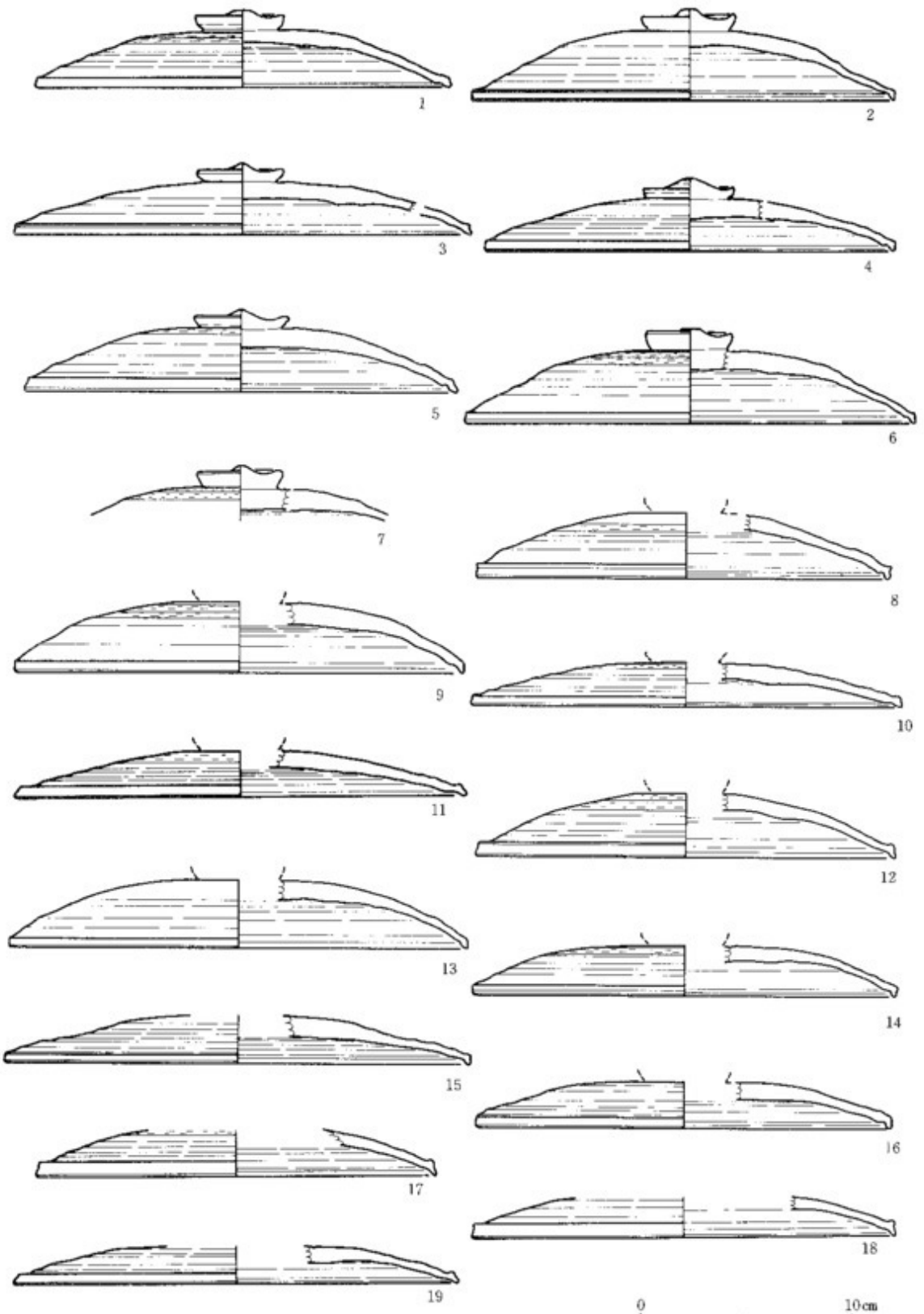
第25図　5号窯跡出土遺物（2）



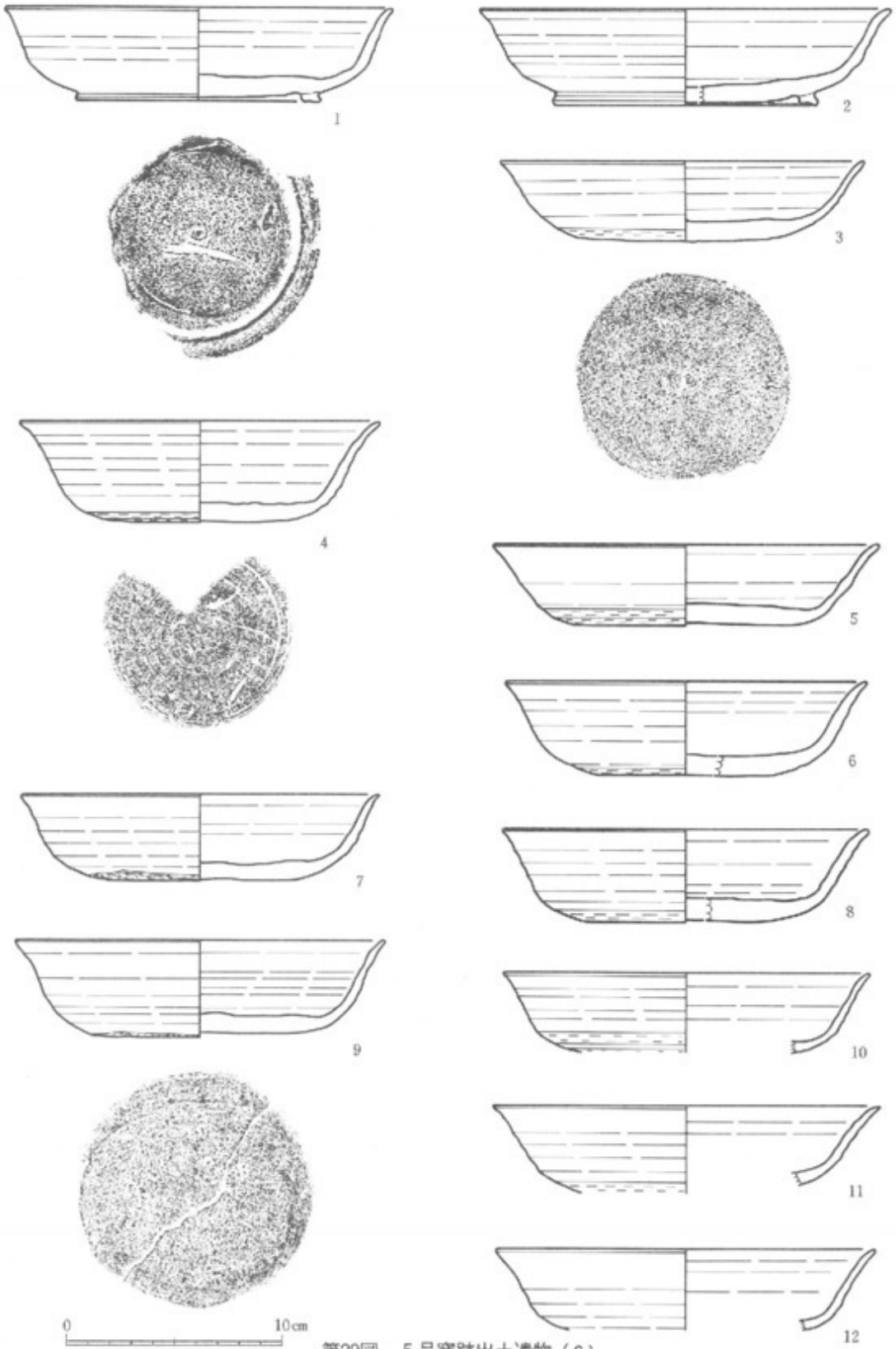
第26図　5号窯跡出土遺物（3）



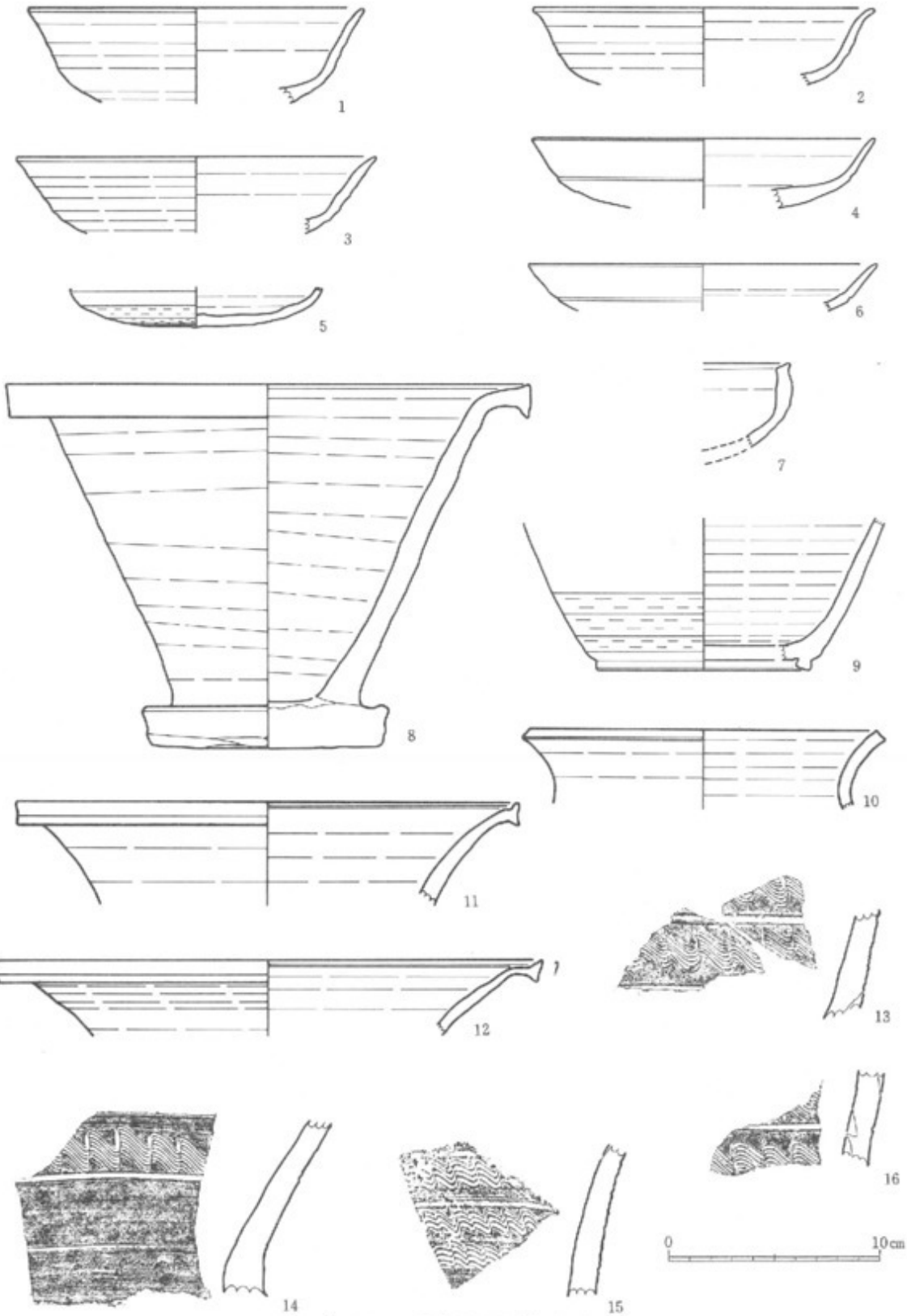
第27図　5号窯跡出土遺物（4）



第28図　5号窯跡出土遺物（5）



第29図　5号窯跡出土遺物（6）



第30図　5号窯跡出土遺物（7）

第４表　５号窯跡出土遺物観察表（2）

番号	登録番号	種別	器種・層位	法量 cm 長さ	広鑓幅	狭鑓幅	特徴	備考	分類	写真図版
24-7	Fb-37	丸瓦	SO5 焼成部床直 焼成粘土層				斜格子叩き目C→ヘラ削し（ヘラケズリ）	糸切り痕、凹面痕、布継ぎ痕、粘土紐巻き痕、ヘラ描・広鑓綿ヘラケズリ	Id	27-1
24-8	Fb-43	丸瓦	SO5 焼成部 7層				平格子叩き目C、一部ナデ	糸切り痕、布目痕、側縁ヘラケズリ	Ib	
24-9	Fb-39	丸瓦	SO5 焼成部 5a層				斜格子叩き目C→ヘラ削し（ヘラケズリ）、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、布継ヘラケズリ	Ib	
24-10	Fb-35	丸瓦	SO5 焼成部 7層				平行叩きE A	糸切り痕、布目痕、布継ぎ痕	IIa	27-2
25-1	Gb-125	平瓦	SO5 焼成部5a層 粘土粒1層				正格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、凸面台形痕、側縁ヘラケズリ	IAa	26-4
25-2	Gb-130	平瓦	SO5 焼成部 3層				斜格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、接合痕	IAd	26-10
25-3	Gb-127	平瓦	SO5 焼成部 1層				正格子叩き目C→ヘラ削し	糸切り痕、ヘラケズリ	IAc	26-8
25-4	Gb-124	平瓦	SO5 焼成部 5a層				正格子叩き目B、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、凹凸状痕、粘土紐巻き痕	IAb	26-6
25-5	Gb-125	平瓦	SO5 焼成部 3層				正格子叩き目C→ヘラ描し	布目痕、ナデ	IAc	26-7
25-6	Gb-139	平瓦	SO5 焼成部 床直				斜格子叩き目B→ヘラ描し、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕	IAc	26-9
25-7	Gb-143	平瓦	SO5 焼成部 床直				正格子叩き目B→平行叩き目C、側縁・狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、接合痕、凸凹台状痕、側縁・狭端縁ヘラケズリ	IBa	26-13
25-8	Gb-68	平瓦	SO5 焼成部 床直				斜格子叩き目A→ヘラ描し、側面ヘラケズリ	布目痕、粘質痕、粘土紐合わせ目痕	IAd	26-5
25-9	Gb-129	平瓦	SO5 焼成部 5a層下位				長方形格子叩き目	糸切り痕、布目痕、接合痕	IAe	26-11
26-1	Gb-144	平瓦	SO5 焼成部 5a層				平行叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、側面ヘラケズリ、広鑓面右偏切り	IIa	27-6
26-2	Gb-148	平瓦	SO5 焼成部 5b層				平行叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、広鑓面右偏切り	IIa	27-3
26-3	Gb-147	平瓦	SO5 焼成部 床直				平行叩きE A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、接合痕、広鑓面右偏切り	IIa	27-4
26-4	Gd-1	瓦当面	SO5 焼成部 1層				長方形格子叩き目→横方向ヘラ描し	糸切り痕、布目痕、接合痕	IAe	27-5
27-1	Gb-180	平瓦	SO5 焼成部 1層 凸台部 1層	41.5			縄叩きE→縦方向ヘラ描し、凹部押・狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、接合痕、粘土紐巻き痕、凸台部ヘラケズリ	IIf	27-7
27-2	Gb-156	平瓦	SO5 焼成部 5a～7層 粘土層 1層	43.5		24.5	縄叩き目→ヘラ描し、凹部押・狭端縁・ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、接合痕、有機痕・狭端縁ヘラケズリ	IIe	27-8

の破片３点がある。

須恵器　主に焼成部床面及び堆積土より蓋・坏・甕・すり鉢など291点が出土している。甕が最も多く出土しているがすべて破片であり、完形のものとして坏・蓋が多く出土している。坏は口径16.0～19.2cm、器高3.8～4.6cm、底径8.2～9.8cmを測り、高台の付くものと付かないものがある。底部の切り離しは回転ヘラ切りがほとんどで、体部下端から底部周縁に回転ヘラケズリされるものが多く、さらに底部の切り離しは不明で全面に手持ちヘラケズリされるものも２点が出土している。蓋は口径19.6～22.2cmを測り、扁平な宝珠形のつまみで内面にかえりのないものである。天井部は高く口縁部は下方に折り曲げられている。

２．灰　　原

１号灰原

調査区Ａ区の北東部で南北約５ｍ、東西約11ｍの範囲に検出された灰原であり、さらに東側へと延びている。北隣のＢ区で４・５号窯跡が検出されているが、灰原の分布域は４号窯跡から５号窯跡にかけての南側斜面に位置している。

灰原の厚さは20～40cmを測り、３層に分けられる。１層は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトのブロックを霜降り状に含む層であり、10～20cmと最も厚く堆積している。２層はにぶい黄褐色シルト層で部分的に堆積している。３層は炭化物粒と焼土粒が多量に含まれる黒色シルトで、10～15cmの厚さで堆積している。

第4表（続）

番号	登録番号	種別	器種	遺構・層位	法量cm 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
28-1	E-49	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	19.8		3.7	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	5/6	28-6
28-2	E-50	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層～7層	22.0		4.4	ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	4/5	28-2
28-3	E-51	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	21.9		3.4	ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	3/5	28-4
28-4	E-59	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	19.6		3.6	ロクロナデ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	1/4	28-3
28-5	E-65	須恵器	蓋	SO5 焼成部床面	20.6		4.0	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	1/3	
28-6	E-55	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	21.4		4.5	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI	1/4	28-1
28-7	E-58	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層				ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、扁平な宝珠つまみ	ロクロナデ	BI		
28-8	E-53	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層	19.8			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/2	
28-9	E-56	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層	21.4			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/3	
28-10	E-52	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	20.6			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/2	
28-11	E-57	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	21.6			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/3	
28-12	E-62	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層～7層	20.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/4	
28-13	E-63	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層	22.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/5	
28-14	E-54	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	20.2			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/3	
28-15	E-61	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	22.2			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/5	
28-16	E-60	須恵器	蓋	SO5 焼成部7層	19.8			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/3	
28-17	E-69	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層	19.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/6	
28-18	E-70	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層～7層	20.2			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/6	
28-19	E-64	須恵器	蓋	SO5 焼成部5a層～7層	21.2			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/5	
29-1	E-16	須恵器	高台付坏	SO5 焼成部5a層	18.1	11.4	4.4	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/5	28-7
29-2	E-17	須恵器	高台付坏	SO5 焼成部7層	19.2	12.4	4.5	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/4	28-6
29-3	E-22	須恵器	坏	SO5 焼成部床面	17.0	9.8	3.8	ロクロナデ、体部、下端～底部周縁、回転全面ヘラケズリ	ロクロナデ	BIb	2/3	28-9
29-4	E-18	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層～7層	16.8	9.1	4.8	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、体部下端～底部、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	BIa	3/5	29-3
29-5	E-12	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層	18.0	9.2	3.8	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、体部下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BIb	2/3	28-10
29-6	E-15	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層～7層	16.8	8.2	4.4	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、体部下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BIb	1/2	29-2
29-7	E-13	須恵器	坏	SO5 焼成部床面	16.8	8.5	4.0	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	BIc	ほぼ完形	29-1
29-8	E-11	須恵器	坏	SO5 焼成部7層	17.1	9.6	4.3	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、体部下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BIb	2/3	28-8
29-9	E-14	須恵器	坏	SO5 焼成部7層	17.3	9.4	4.6	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	BIc	ほぼ完形	29-4
29-10	E-24	須恵器	坏	SO5 焼成部7層	17.1			ロクロナデ、体部下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BI	1/5	
29-11	E-21	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層～7層	16.0			ロクロナデ、体部下端～底部周縁、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	BIb	1/2	
29-12	E-29	須恵器	坏	SO5 焼成部7層	17.8			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/6	
30-1	E-23	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層～7層	16.0			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/2	
30-2	E-32	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層	16.2			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/3	
30-3	E-26	須恵器	坏	SO5 焼成部7層	17.1			ロクロナデ	ロクロナデ	BI	1/4	
30-4	E-19	須恵器	坏	SO5 補修窯口12層	16.3			ロクロナデ、体部中央に段、底部丸底不定方向ナデ	ロクロナデ	AIa	1/5	29-3
30-5	E-33	須恵器	坏	SO5 焼成部5a層				ロクロナデ、底部丸底、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	A	1/8	
30-6	E-20	須恵器	坏	SO5 補修窯口12層	16.8			ロクロナデ、体部中央に段	ロクロナデ	AIa	1/10	29-6
30-7	E-46	須恵器	椀	SO5 焼成部7層				ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	B	1/8	
30-8	E-30	須恵器	鉢	SO5 煙道部7層	24.9	11.6	17.4	ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	BI	完形	29-9
30-9	E-82	須恵器	高台付壺	SO5 焼成部5a層		10.2		ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B	1/4	
30-10	E-87	須恵器	甕	SO5 前庭部1層	17.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/6	
30-11	E-90	須恵器	甕	SO5 焼成部7層	21.0			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/10	
30-12	E-91	須恵器	甕	SO5 焼成部7層	26.2			ロクロナデ	ロクロナデ	B	1/8	
30-13	E-99	須恵器	甕	SO5				波状沈線文	ロクロナデ			29-7
30-14	E-96	須恵器	甕	SO5 前庭部2b層				ロクロナデ、波状沈線文	ロクロナデ			29-11
30-15	E-97	須恵器	甕	SO5 焼成部				波状沈線文	ロクロナデ			29-10
30-16	E-98	須恵器	甕	SO5 前庭部1層				波状沈線文	ロクロナデ			29-8

遺物は1～3層より多量の瓦塼類と少量の須恵器・円面硯が出土している。層位的に分離することはできず、各層間の遺物は接合している。また、灰原と1号溝跡とは切り合い関係はないが灰原と1号溝跡出土の遺物が多く接合することから、灰原が形成される過程で1号溝跡も徐々に埋まったものと考えられる。

出土遺物には多量の瓦塼類と少量の須恵器と円面硯が出土している。

瓦塼類は総数1,639点と遺構の中で一番多く出土し、その大部分は1,336点の平瓦で81.5%を占めている。その他として丸瓦95点、軒丸瓦13点、軒平瓦185点、熨斗瓦1点、隅切り瓦6点、塼3点が出土している。軒丸瓦は直径16.5～17.0cmを測る単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面が完形のものが出土している。軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦で185点と多く出土し、段顎のⅠ類と無顎のⅡ類とがある。顎部は粘土を接合して作られており、顎部が剝がれているものがほとんどである。平瓦は粘土板桶巻き作りの平瓦Ⅰ～Ⅴ類があり、その中でⅠ類が492点、Ⅳ類344点、Ⅱ類254点の順に出土している。丸瓦は粘土板巻き作りの無段丸瓦が95点出土し、その中で凸面の叩き目が不明のⅣ類が65点と最も多く出土している。

須恵器は136点が出土し、大部分が甕の破片である。蓋は5点あり、内面にかえりのあるものとないものとがある。高坏は脚部欠損の坏が1点出土しており、体部に段が形成されている。

その他、円面硯の破片2点が出土している。

3．溝　跡

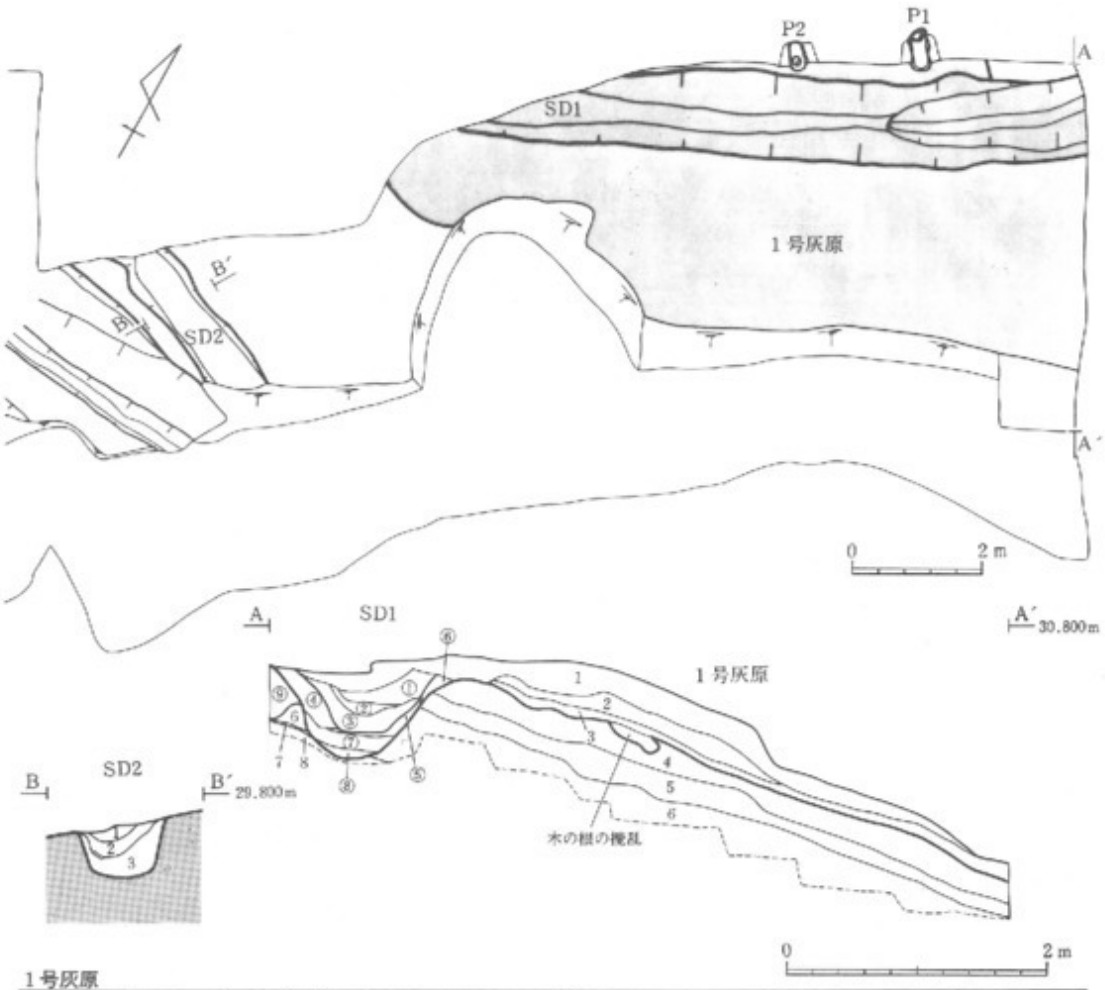
1号溝跡（ＳＤ1）

調査区A区の北東部で検出され、1号灰原の北側に接している。溝の規模は長さが約21.5m、幅が約140cmを測る東西方向に走る溝跡である。西側は通路状遺構に切られており、東側は調査区外へと延びている。深さは一番深い所で約65cmを測り、断面形はU字形を呈している。溝跡は底面と第3層に砂が堆積しており、水の流れた形跡が二時期あったことがうかがわれる。底面は西側が高いため東側へ向かって流れたと考えられる。

堆積土は8層に分けられるが、堆積状況より大きく3つに大別される。1層、2～3層、4～8層である。1層はにぶい黄褐色シルトである。2・3層はにぶい黄褐色・灰褐色砂質シルトで、下層に炭化物が多量に混入される黒色シルトがある。4～6層は黒色・灰黄褐色のシルトであり、7層はにぶい黄褐色シルト質砂で炭化物が多量に混入する黒色シルトが下層に堆積し、さらに最下層はにぶい黄褐色砂が堆積している。

1号灰原との重複関係はないが灰原の2・3層と溝跡の最下層、灰原1・2層と溝跡中層出土の遺物が接合する例が多く、灰原の形成過程で溝跡も埋まっているものと考えられる。

遺物は各層より瓦塼類、須恵器、硯が出土しており、その中でも瓦類が最も多く総数883点が



1号灰原

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトのブロックを斑点状に含む
2	10YR5.5/4にぶい黄褐色	シルト	
3	10YR1.7/1黒色	シルト	にぶい黄褐色シルトをブロック状に、炭化物（数mm～数cm）を多量に含む
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	凝灰岩ブロック（1cm～10cm）を多量に含む、植遺物痕
5	10YR4/3 褐色	シルト質粘土	
6	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
7	5Y7/2 灰白色	シルト質粘土	
8	2.5Y7/6 明黄褐色	粘土質シルト	

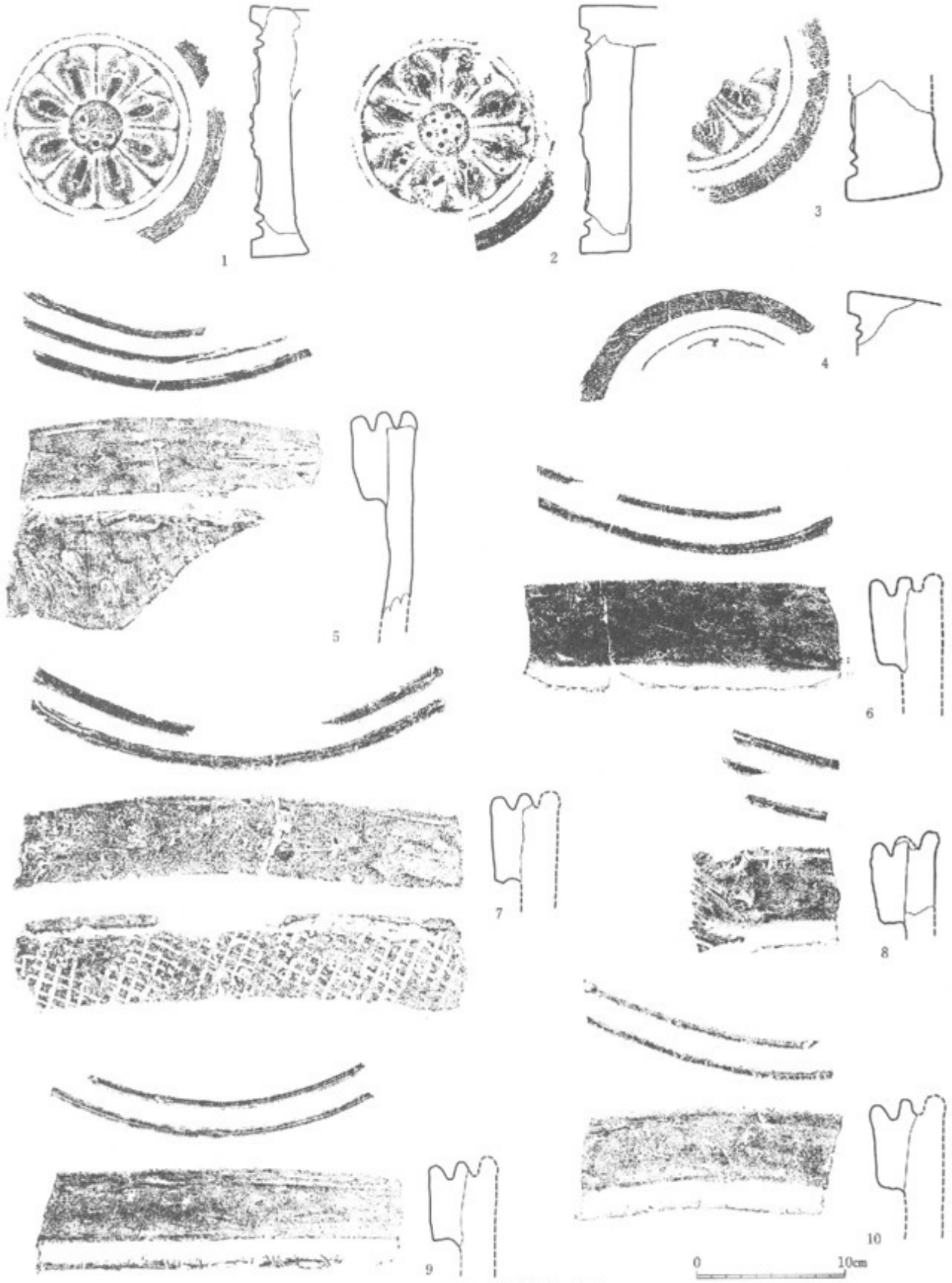
SD1

層位	土色	土性	備考
①	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	
②	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	下層に炭化物を多量に含む
③	10YR5/2 灰褐色	砂質シルト	
④	10YR2/2 黒褐色	シルト	
⑤	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
⑥	10YR4/4 褐色	シルト	
⑦	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質砂	下層に炭化物が入る
⑧	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂	
⑨	10YR1.7/1黒色	シルト	にぶい黄橙色のシルト質粘土、褐灰色シルト、褐色シルトのブロック、焼土が斑点状に含む

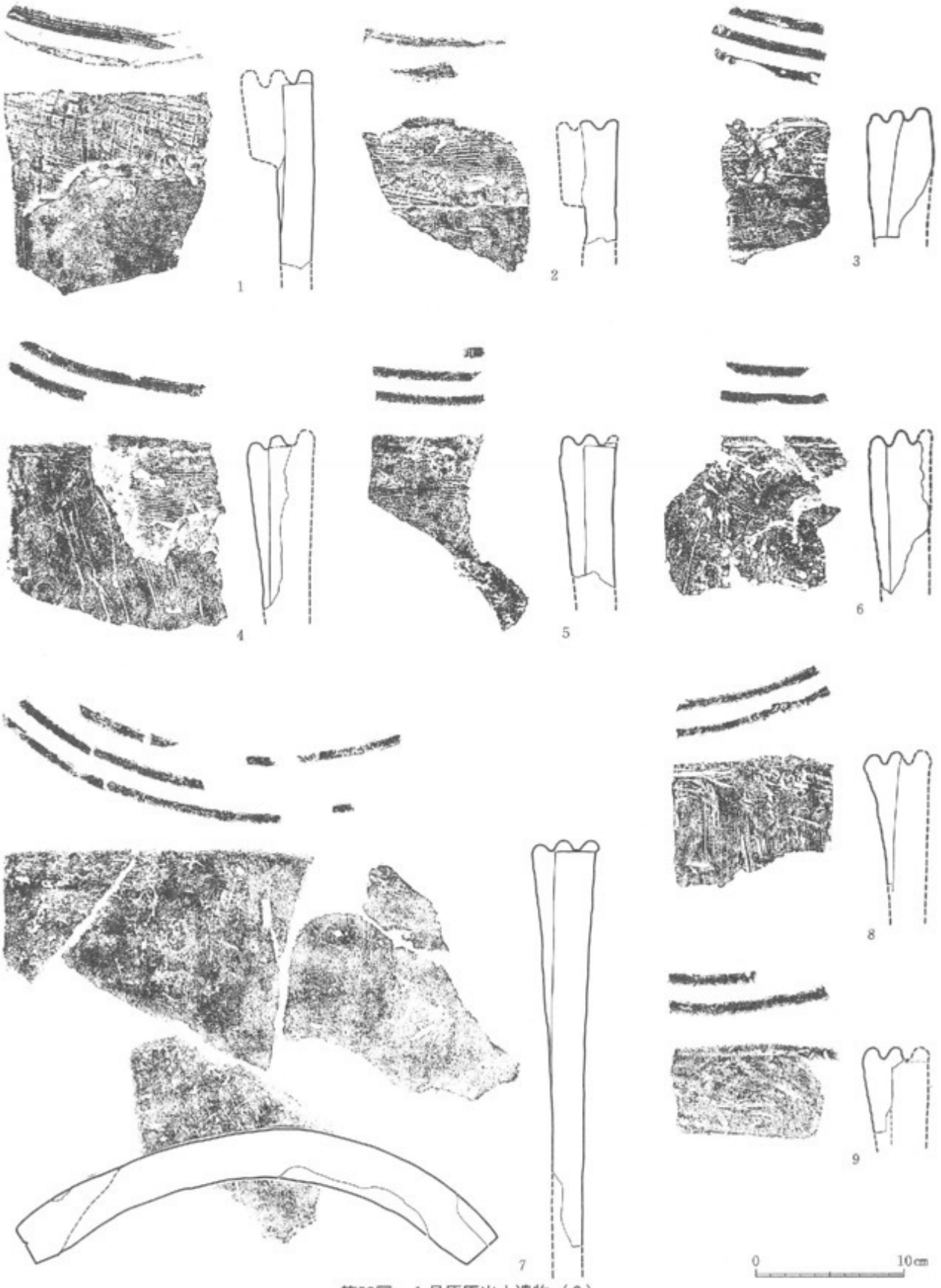
SD2

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	下面に礫を含む
3	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	

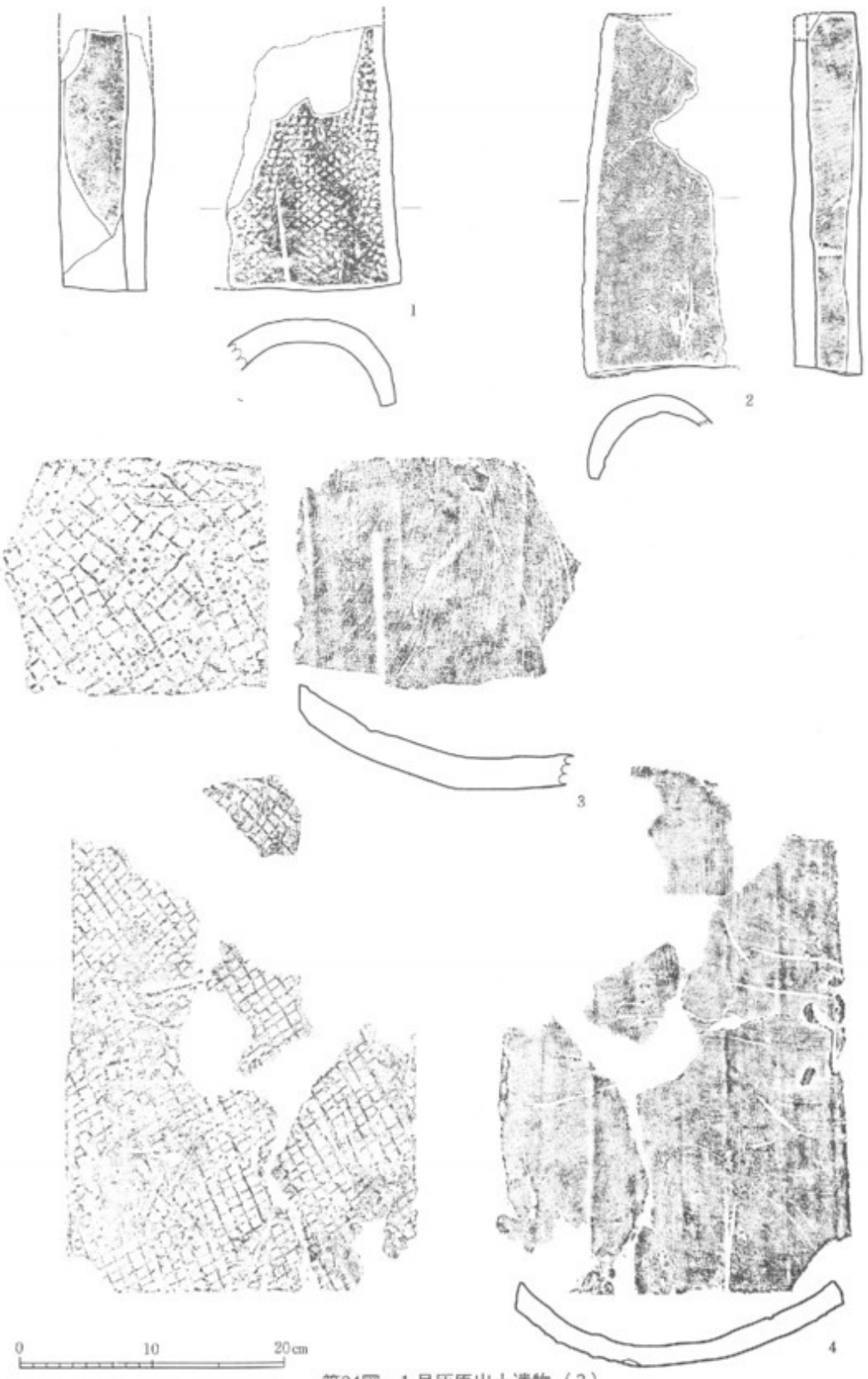
第31図　1号灰原・1号・2号溝跡



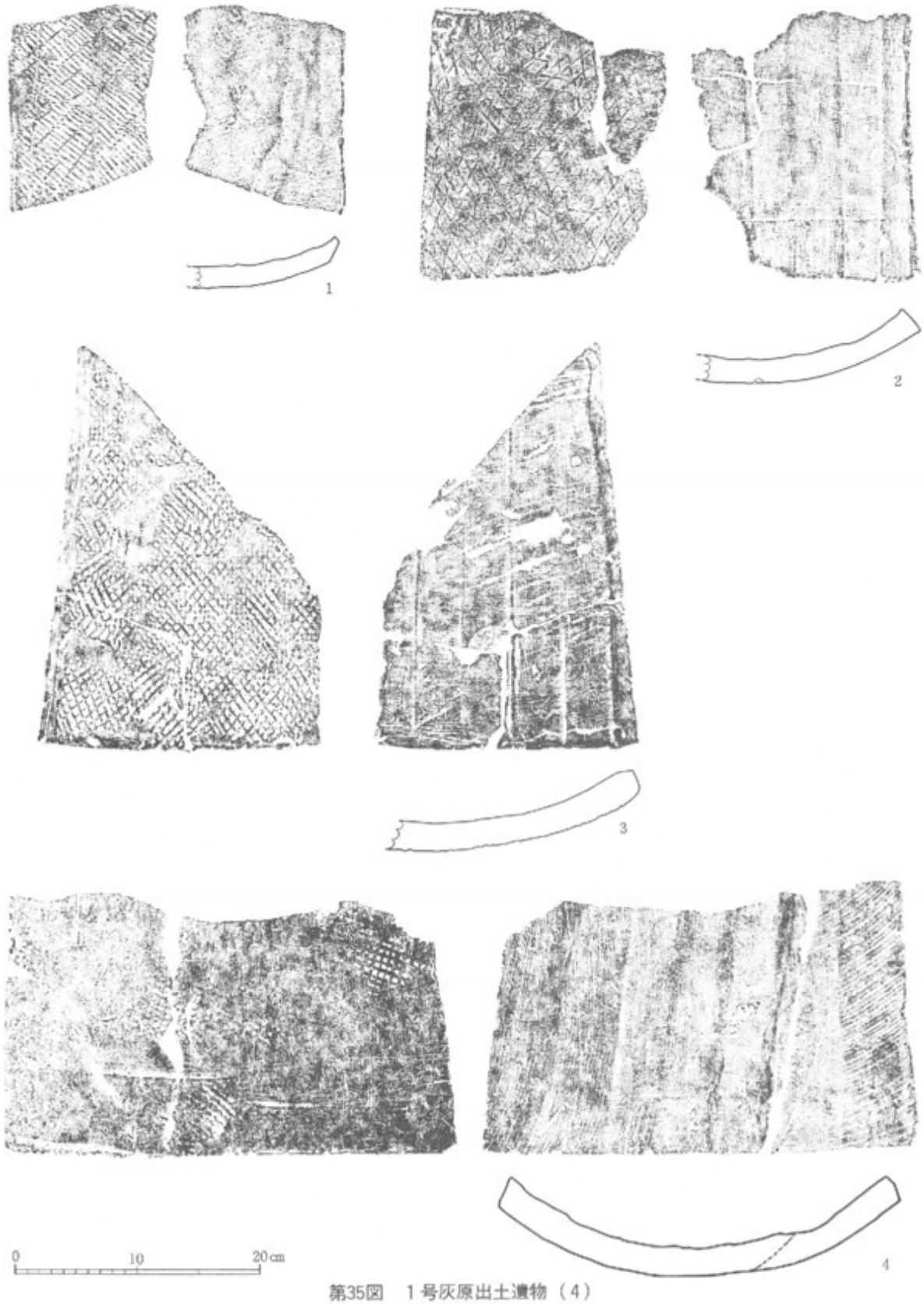
第32図　1号灰原出土遺物（1）



第33図　1号灰原出土遺物（2）

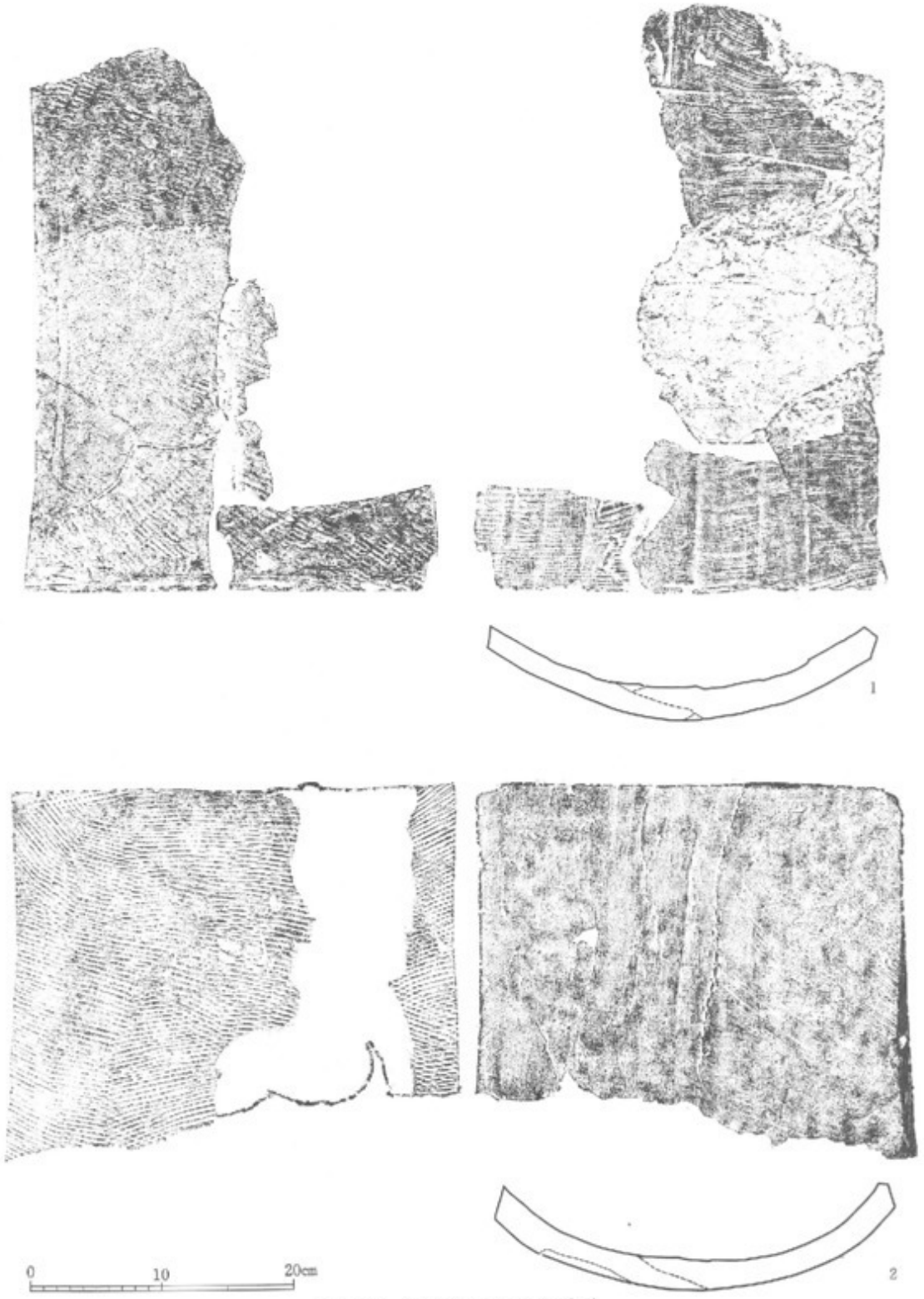


第34図　1号灰原出土遺物（3）

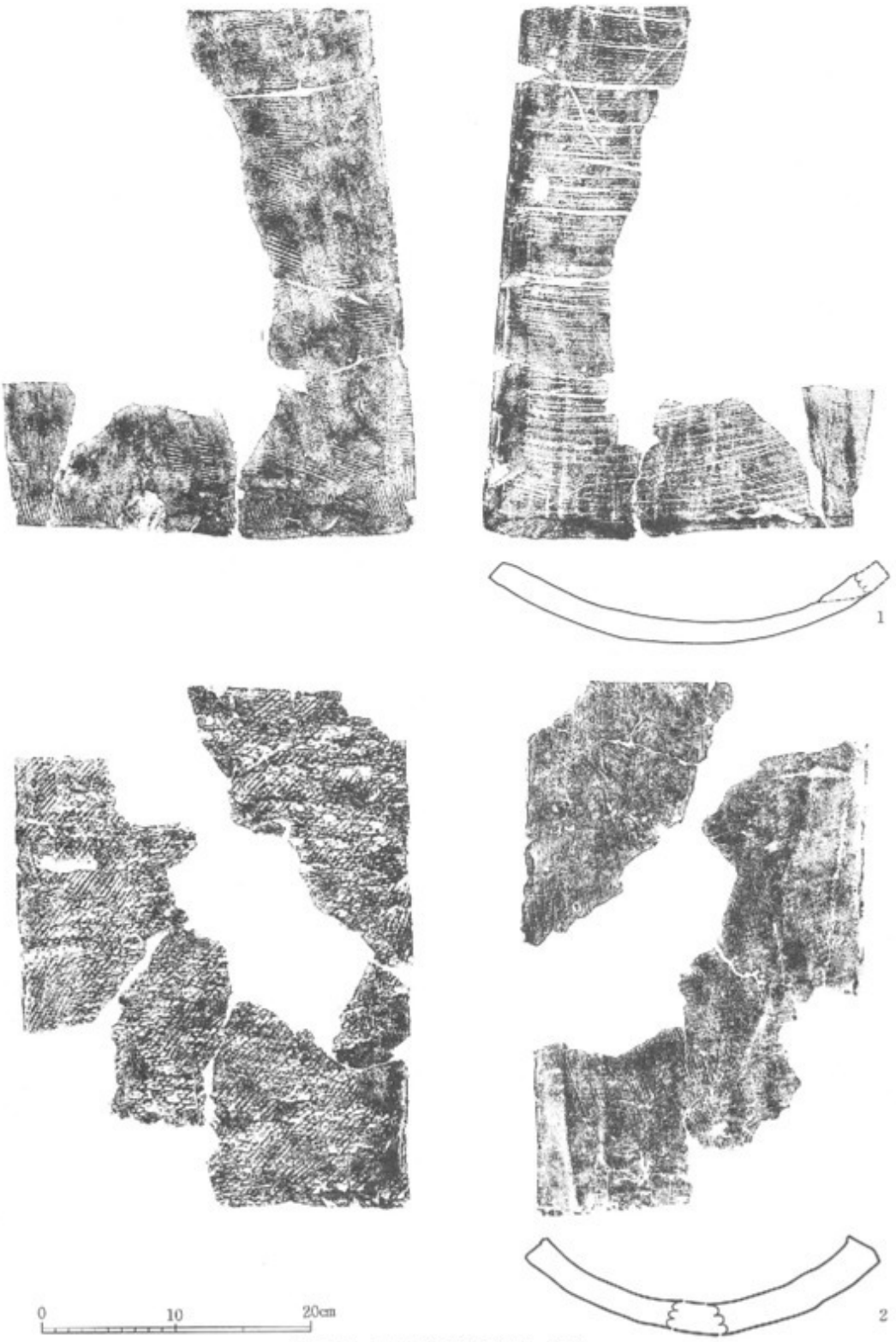


第35図　1号灰原出土遺物（4）

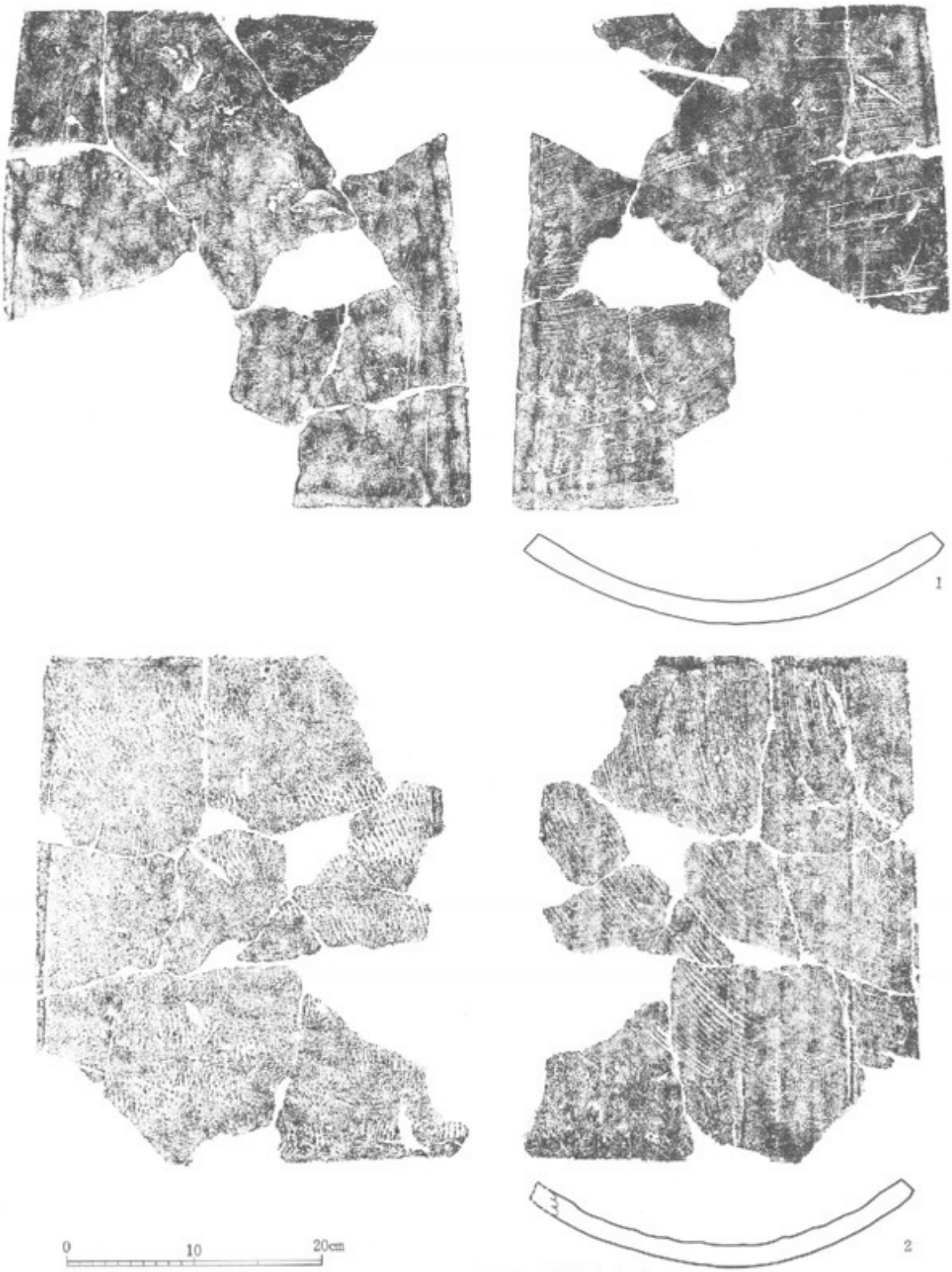
第36図　1号灰原出土遺物（5）



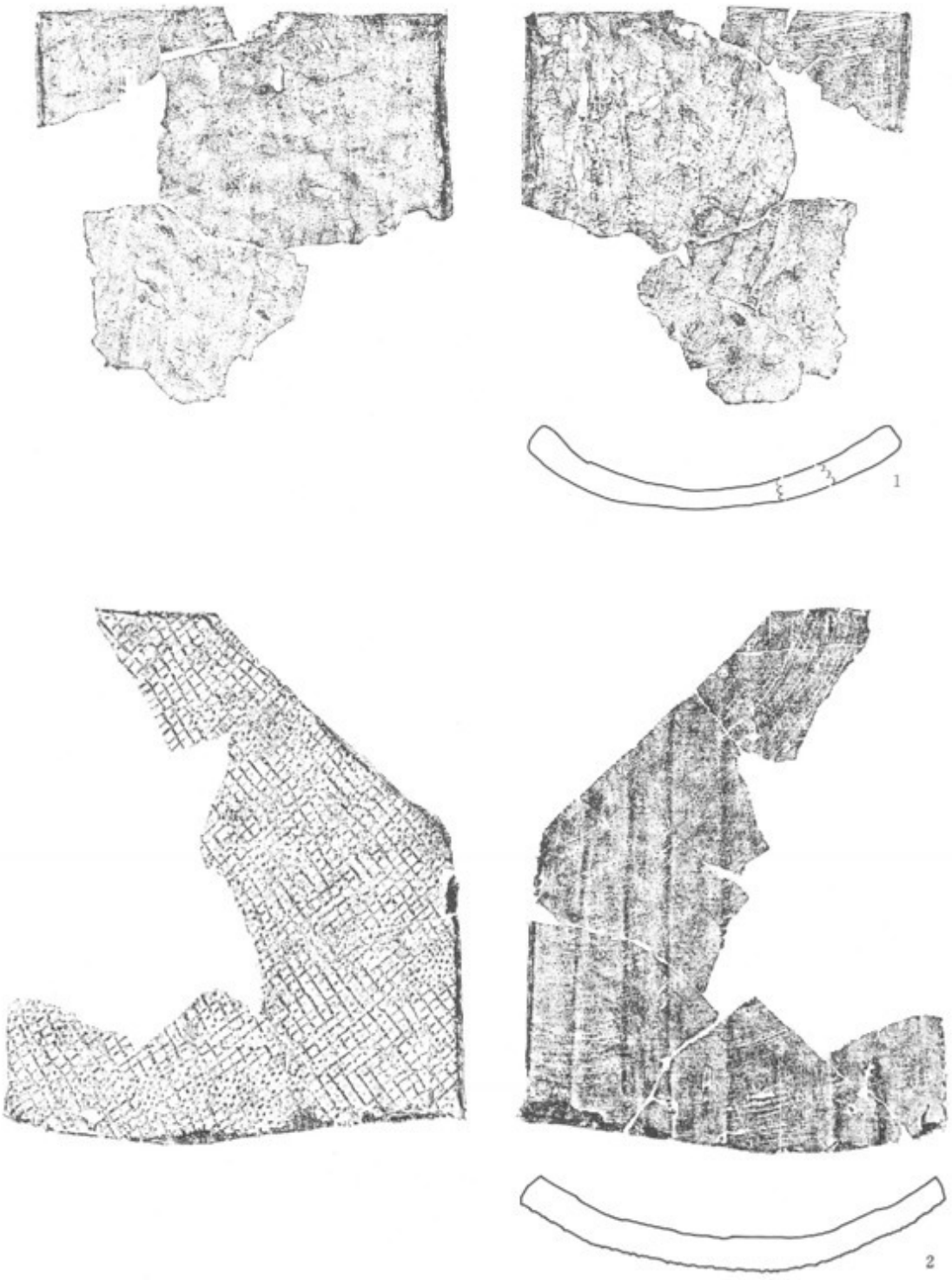
第37図　1号灰原出土遺物（6）



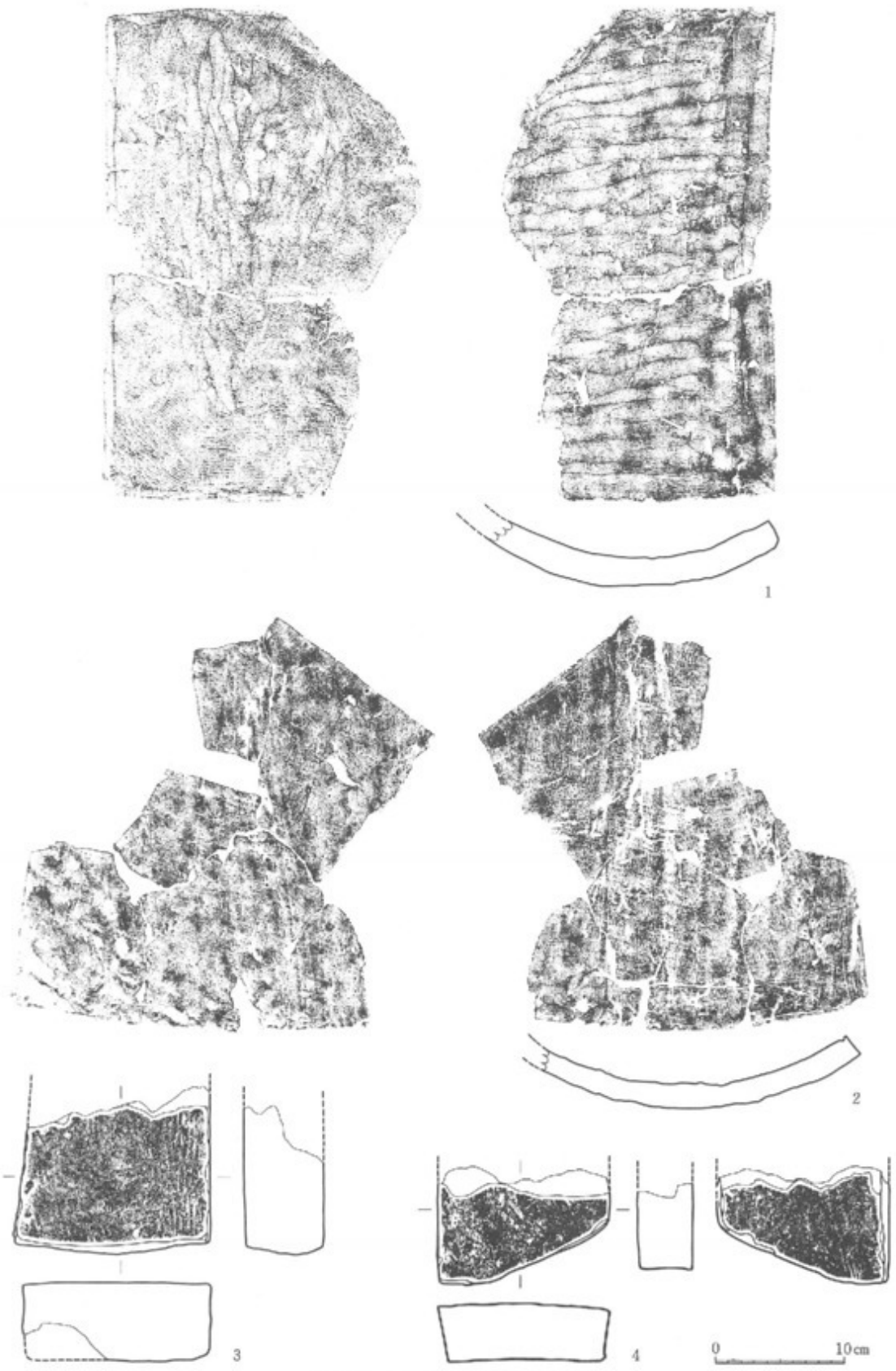
第38図　1号灰原出土遺物（7）



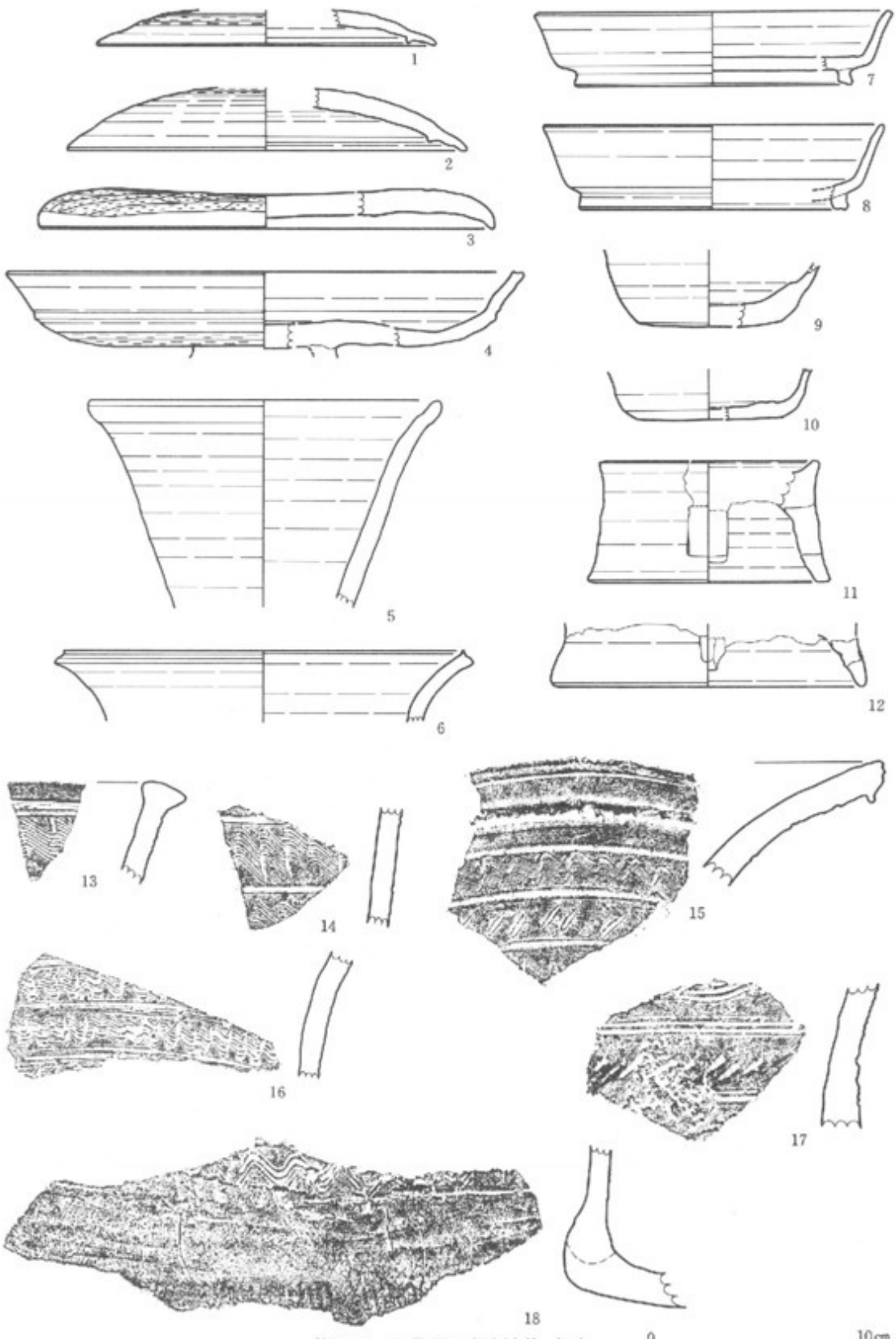
第39図　1号灰原出土遺物（8）



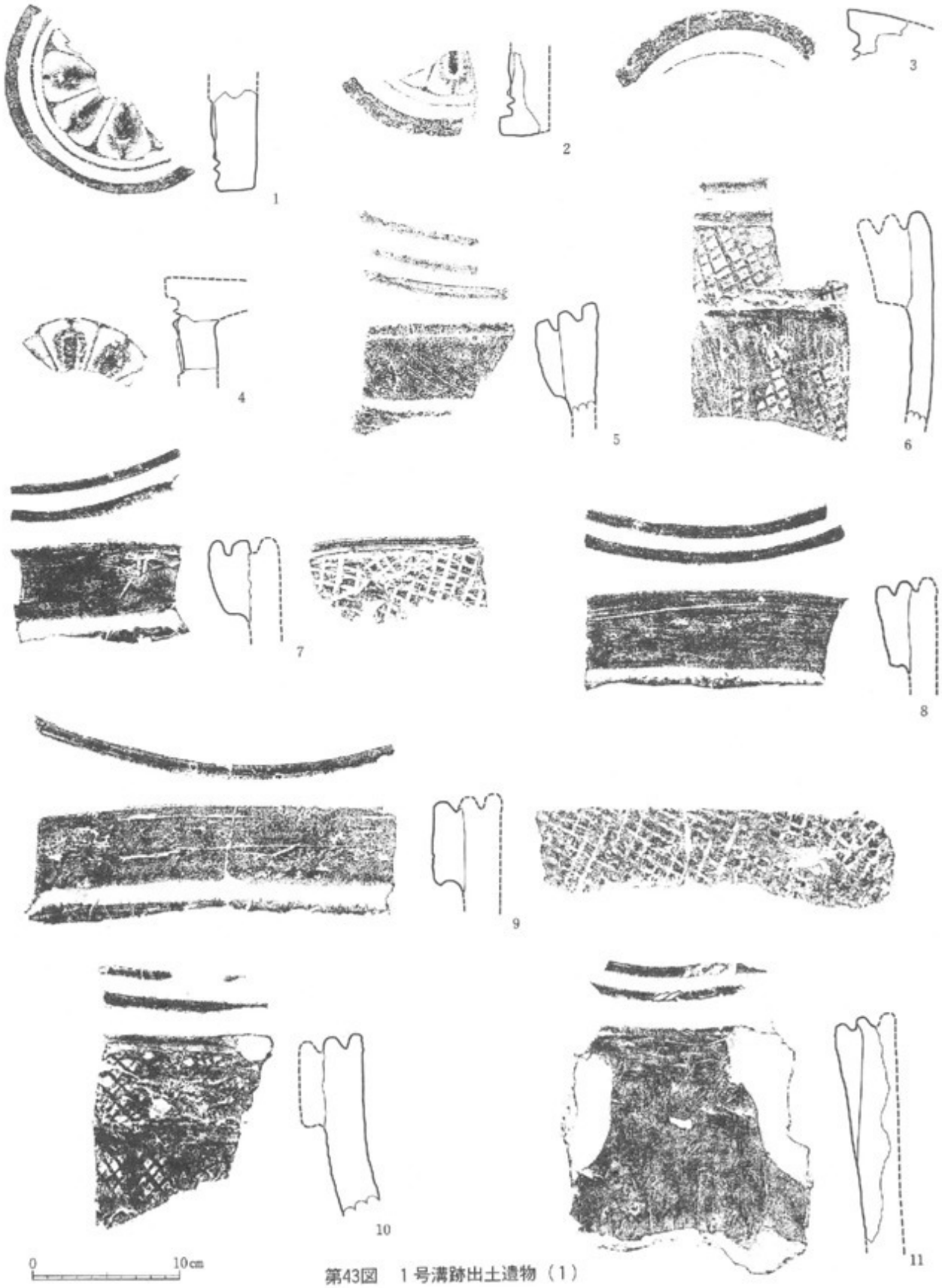
第40図　1号灰原出土遺物（9）



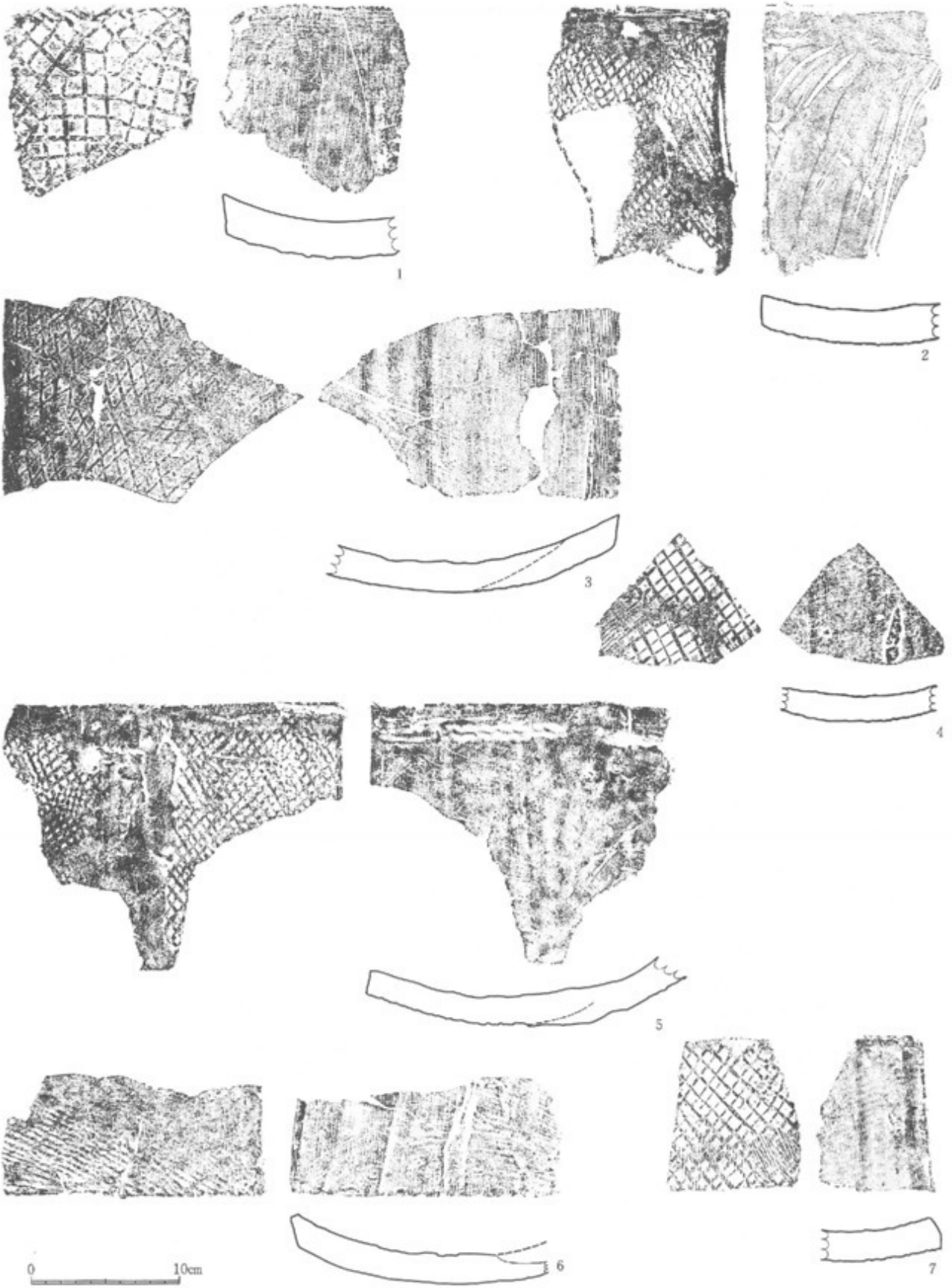
第41図　1号灰原出土遺物（10）



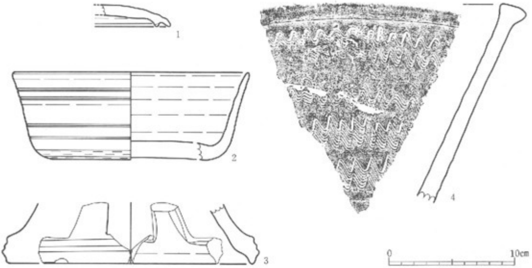
第42図　1号灰原出土遺物（11）



第43図　1号溝跡出土遺物（1）



第44図　1号溝跡出土遺物（2）



第45図　1号溝跡出土遺物（3）

第5表　1号灰原・1号溝跡出土遺物観察表

1号灰原

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴 凸面	凹面	分類	備考	写真図版
32－1	Fa－5	軒丸瓦	1灰　2層	複弁八葉蓮華文			Ⅰa		30－1
32－2	Fa－10	軒丸瓦	1灰　2層	複弁八葉蓮華文			Ⅰa		30－2
32－3	Fa－13	軒丸瓦	1灰　3層	複弁八葉蓮華文			Ⅰa		30－3
32－4	Fa－8	軒丸瓦	1灰	複弁八葉蓮華文			Ⅱ		
32－5	Ga－25	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	正格子叩き目C→スリ消し	糸切り痕、布目痕、模骨痕	Ⅰa	段顎	30－5
32－6	Ga－50	軒平瓦	1灰　2層 SD1	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	側縁面、正格子叩き目B	Ⅰa	段顎	30－8
32－7	Ga－26	軒平瓦	1灰　西2層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	側縁面、正格子叩き目B	Ⅰa	段顎	30－10
32－8	Ga－29	軒平瓦	1灰　2～3層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	糸切り痕、布目痕、側面ヘラケズリ	Ⅰc	段顎	
32－9	Ga－43	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ		Ⅰc	段顎	30－6
32－10	Ga－44	軒平瓦	1灰　西3層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ		Ⅰc	段顎	30－7
33－1	Ga－58	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	横方向のナデ、顎部剥離面、正格子叩き目C	布目痕、模骨痕、一部ヘラケズリ	Ⅰa	段顎	
33－2	Ga－54	軒平瓦	1灰　1層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ、顎部剥離面、平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、ヘラケズリ	Ⅰb	段顎	
33－3	Ga－35	軒平瓦	1灰　西3層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、ヘラケズリ	Ⅱb		
33－4	Ga－59	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ、剥離面、平行叩き目C		Ⅱa		
33－5	Ga－30	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	平行叩き目B→スリ消し	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	Ⅱa		
33－6	Ga－34	軒平瓦	1灰	ロクロ挽き重弧文	ヘラケズリ	布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	Ⅱb		
33－7	Ga－32	軒平瓦	1灰2a層、3層、西3層	ロクロ挽き重弧文	ナデ、剥離面、平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕、粘土板合わせ目痕	Ⅱa		30－9
33－8	Ga－57	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	剥離面平行叩き目B	Ⅱa		
33－9	Ga－61	軒平瓦	1灰　2層	ロクロ挽き重弧文	ナデ	剥離面平行叩き目B	Ⅱa		

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量cm 長さ	広端幅	狭端幅	特徴 凸面	凹面	分類	写真図版
34－1	Fb－59	丸瓦	1灰　2層				正格子叩き目C	布目痕、凸型台圧痕、側端ヘラケズリ	Ⅰb	31－1
34－2	Fb－77	丸瓦	1灰　2層	28.2			ナデ	糸切り痕、布綴じ痕、側縁ヘラケズリ	Ⅳ	31－2
34－3	Gb-184	平瓦	1灰　2層	(18.5)			正格子叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	ⅠAa	31－3
34－4	Gb-181	平瓦	1灰　西3層	40.8			斜格子叩き目A→正格子叩き目B、一部布目痕、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕	ⅠBi	31－4
35－1	Gb-252	平瓦	1灰　1層				長方形格子叩き目、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕	ⅠAg	31－9
35－2	Gb-205	平瓦	1灰 SD1　最下層				斜格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	ⅠA	33－1
35－3	Gb-189	平瓦	1灰　西3層	(33.6)			正格子叩き目C、一部ナデ、一部布目痕、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、側縁・広端縁ヘラケズリ	ⅠAc	31－6
35－4	Gb-240	平瓦	1灰　2層3層 SD1　最下層		34.8		正格子叩き目C→スリ消し→横方向ヘラケズリ→刻文叩き目	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕、側端面ヘラケズリ	ⅠAc	31－8
36－1	Gb-186	平瓦	1灰				斜格子叩き目A、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、凸型台圧痕	ⅠAd	
36－2	Gb-267	平瓦	1灰　2層				斜格子叩き目A→長方形格子叩き目、一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕	ⅠBk	33－2
36－3	Gb-268	平瓦	1灰　2層				正格子叩き目B→平行叩き目C、側縁・広端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布綴じ痕凸型台圧痕、側面ヘラケズリ	ⅠBh	33－3
36－4	Gb-185	平瓦	1灰　2層	39.8			正格子叩き目A→斜格子叩き目A、一部布目痕、側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕布綴じ痕、凸型台圧痕、広端面方向切り	ⅠBa	31－7
36－5	Gb-217	平瓦	1灰　2層				斜格子叩き目C、側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、ほぼ全面ヘラケズリ	ⅠAf	
37－1	Gb-239	平瓦	1灰　2～3層、3層	45.0	30.0		長方形格子叩き目→スリ消し、両側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕凸型台圧痕	ⅠAg	32－1
37－2	Gb-274	平瓦	1灰　2層		30.3		平行叩き目B、両側面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕布綴じ痕右側縁ヘラケズリ	Ⅱb	31-10
38－1	Gb-286	平瓦	1灰　2層、西3層、3層	40.2			平行叩き目C→スリ消し、広端面ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕、側縁・広端縁ヘラケズリ	Ⅱc	32－5

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm 長さ	広端幅	狭端幅	特徴 凸面	凹面	分類	写真図版
38－2	Gb-299	平瓦	1灰 西3層	39.3			平行叩き目E→ヘラ消し	布目痕、模骨痕、布継ぎ痕、凸型台圧痕	IIe	
39－1	Gb-321	平瓦	1灰 2層,西3層,3層 SD1 最下層	39.3			平行叩き目C→ヘラ消し（ほぼ全面ヘラケズリ）、両側縁・広狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、両側縁ヘラケズリ	IIc	32－4
39－2	Gb-313	平瓦	1灰 1層	40.7			縄叩き目→横方向ヘラ消し、両側縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、両側縁ヘラケズリ	IIe	32－2
40－1	Gb 324	平瓦	1灰 2層、3層 SD1 最下層			27.3	全面ナデ、一部ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、ほぼ全面ヘラケズリ	IVb	
40－2	GC－3	隅切り瓦	1灰 2層、西3層 SD1 2層	40.3	31.3		正格子叩き目B、右側縁・広端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、一部ナデ	IAh	32－6
41－1	GC－7	隅切り瓦	1灰 西3層	39.2			平行叩き目C→ヘラ消し、側縁・広狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、ほぼ全面ヘラケズリ	IIc	32－8
41－2	GC－6	隅切り瓦	1灰 2層、西3層、3層				全面ナデ	布目痕、模骨痕、布継ぎ痕、一部ヘラケズリ	IVb	32－7

番号	登録番号	種別	遺構・層位	法量 cm 長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版
41－3	H－1	埴	1灰 3層	(12.0)	15.0	5.8～6.1	両面平行叩き目→ヘラ消し、磨滅している	33－6
41－4	H－2	埴	1灰	(9.0)	13.5	4.0～4.3	平行叩き目、磨滅している	33－7

番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
42－1	E-181	須恵器	蓋	1灰 2層	16.0			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、かえり	AI	1/10	
42－2	E-189	須恵器	蓋	1灰 2層	16.8			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、かえり	AI	1/4	33－4
42－3	E-163	須恵器	壺	1灰 2層	21.5		1.9	ロクロナデ、大井部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	AII	1/4	33－5
42－4	E-167	須恵器	高台坏	1灰 2～3層	24.4		3.7	ロクロナデ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、脚部欠損	AI	1/3	33－8
42－5	E 185	須恵器	鉢	1灰 3層、西3層	16.7			ロクロナデ	ロクロナデ	AI	1/4	
42－6	E-194	須恵器	壺	1灰 2層	19.7			ロクロナデ	ロクロナデ	A	1/7	
42－7	E-168	須恵器	高台付坏	1灰	16.8	13.0	3.55	ロクロナデ	ロクロナデ	AI	1/8	
42－8	E-169	須恵器	高台付坏	1灰 1層	16.0	12.6	4.02	ロクロナデ	ロクロナデ	AI	1/16	
42－9	E-184	須恵器	坏	1灰 3層、西3層		6.7		ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、底面付着	ロクロナデ	AIII	1/4	
42－10	E 178	須恵器	坏	1灰 2層、西3層		6.7		ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ→底部ナデ	ロクロナデ	AIII	1/2	
42－11	E-189	須恵器	円面硯	1灰 西3層	30.5	5.8	11.3	ロクロナデ、長方形透しあ	ロクロナデ	A	1/4	33－12
42－12	E 190	須恵器	円面硯	1灰 2～3層		14.5		ロクロナデ、長方形透しあ	ロクロナデ	A		33－15
42－13	E-199	須恵器	甕	1灰 西2a層				波状沈線文	ロクロナデ			
42－14	E-209	須恵器	壺	1灰 1層				波状沈線文	ロクロナデ			33－11
42－15	E-198	須恵器	壺	1灰 3層				波状沈線文	ロクロナデ			33－9
42－16	E-205	須恵器	壺	1灰 2～3層				波状沈線文	ロクロナデ			33－10
42－17	E 208	須恵器	壺	1灰 2層				沈線文、櫛描列点文	ヘラナデ			33－14
42－18	E-203	須恵器	甕	1灰 2層				波状沈線文、平行叩き目→ナデ	ナデ			33－13

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴 凸面	凹面	分類	備考	写真図版
43－1	Fa－17	軒丸瓦	SD1 中層	単弁八葉蓮華文					34－1
43－2	Fa－19	軒丸瓦	SD1 最下層	単弁八葉蓮華文					34－3
43－3	Fa－16	軒丸瓦	SD1 上層						
43－4	Fa 18	軒丸瓦	SD1 下層	単弁八葉蓮華文					34－2
43－5	Ga－37	軒平瓦	SD1 中層	ロクロ挽き重弧文	顎部ナデ	布目痕、模骨痕、左側面ヘラケズリ			34－4
43－6	Ga－36	軒平瓦	SD1 底面	ロクロ挽き重弧文	正格子叩き目B→ヘラ消し 側面側面正格子叩き目B	布目痕、模骨痕、凸型台圧痕		段顎	34－6
43－7	Ga－65	軒平瓦	SD1 底面	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	斜離面正格子叩き目B		段顎	34－7
43－8	Ga－62	軒平瓦	SD1 1層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	斜離面正格子叩き目B		段顎	
43－9	Ga－27	軒平瓦	SD1 中層 1灰 西3層	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向のナデ	斜離面正格子叩き目B		段顎	34－10
43－10	Ga－69	軒平瓦	SD1 5層	ロクロ挽き重弧文	正格子叩き目B→ヘラ消し 側面側面正格子叩き目B	布目痕、模骨痕		段顎	
43－11	Ga－72	軒平瓦	SD1 最下層	ロクロ挽き重弧文	一部布目痕、ナデ、ヘラケズリ	斜離面平行叩き目C			34－8

番号	登録番号	器種	遺構・層位	法量 cm 長さ	広端幅	狭端幅	特徴 凸面	凹面	分類	写真図版
44－1	Gb-366	平瓦	SD1 最下層				正格子叩き目A	糸切り痕、布目痕、凸型台圧痕	IAa	34－14
44－2	Gb-367	平瓦	SD1 最下層				正格子叩き目C→ヘラ消し、狭端・狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、全面ヘラケズリ	IAc	34－15
44－3	Gb 372	平瓦	SD1 最下層				斜格子叩き目B→ヘラ消し、模骨ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布継ぎ痕、粘土板合わせ目痕、凸型台圧痕	IAe	34－13
44－4	Gb-376	平瓦	SD1 最下層				正格子叩き目B→平行叩き目C、一部ナデ	糸切り痕、布目痕、模骨痕	IBh	34－12
44－5	Gb 368	平瓦	SD1 最下層				正格子叩き目C、粘土板合わせ目痕、一部ヘラケズリ、狭端縁ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、布継ぎ痕	IAc	34－17
44－6	Gb-373	平瓦	SD1 最下層				長方形格子叩き目→ヘラ消し、側端ヘラケズリ	糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕左側面ヘラケズリ、凸型台圧痕	IAg	34－16
44－7	Gb 377	平瓦	SD1 最下層				正格子叩き目B→平行叩き目C	糸切り痕、布目痕、模骨痕	IBb	34－11

番号	登録番号	器別	器形	遺構・層位	法量 cm 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
45－1	E-262	須恵器	蓋	SD1 中層				ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、かえり	AI		
45－2	E-221	須恵器	坏	SD1 中層				ロクロナデ、体部沈線、体部下端～底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	AII	1/5	
45－3	E 222	須恵器	円面硯	SD1 2層				ロクロナデ	ロクロナデ	A		34－19
45－4	E-226	須恵器	鉢	SD1 下層、北7b層				ロクロナデ、波状沈線文	ロクロナデ	AI		34－18

出土した。瓦塼類は完形品のものはなくすべて破片であるが、単弁八葉蓮華文軒丸瓦６点、ロクロ挽き重弧文軒平瓦78点、丸瓦62点、平瓦745点、塼１点がある。

２号溝跡（ＳＤ２）

調査区Ａ区の２号窯跡と１号灰原の間で検出された溝跡で、北西から南西方向に走っている。溝の規模は長さが約３ｍ、幅60～80cm、深さ40cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は下幅で50～60cmで、高低差は北西が高く、南西が低くなっている。この溝跡は２号窯跡の外側を巡る排水施設の可能性がある。

堆積土は３層に分けられ、１・２層は暗褐色シルト、３層は黄褐色シルト質粘土で凝灰岩の小ブロックを混入する層である。２層と３層の層離面に平瓦の破片が数点出土している。

３号溝跡（ＳＤ３）

調査区Ａ区の西端で検出された溝跡で、断面のみが観察された。幅約2.3m、壁上面は東側が高く西側が低く、深さ150～50cmを測り、断面形はＵ字形を呈する。北西から南東方向に走る溝跡と推定される。

４．その他の遺構

１号土坑（ＳＫ１）

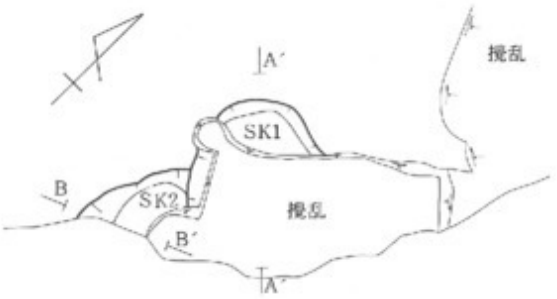
調査区Ｂ区の東側に位置している遺構で、調査時に６号窯跡として調査したが窯跡かどうか不明である。平面形は長軸残存長約１ｍ、短軸約１ｍの楕円形状を呈するものと考えられ、撹乱により大きく壊されており、詳細は不明である。

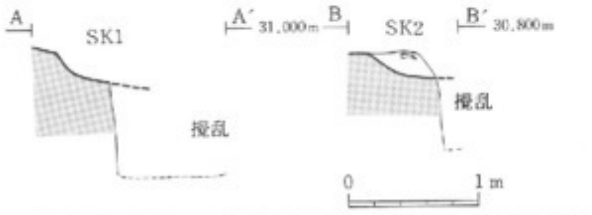
２号土坑（ＳＫ２）

調査区Ｂ区東側に位置し、１号土坑に切られている。平面形は楕円形を呈するものと考えられるが撹乱等により不明である。

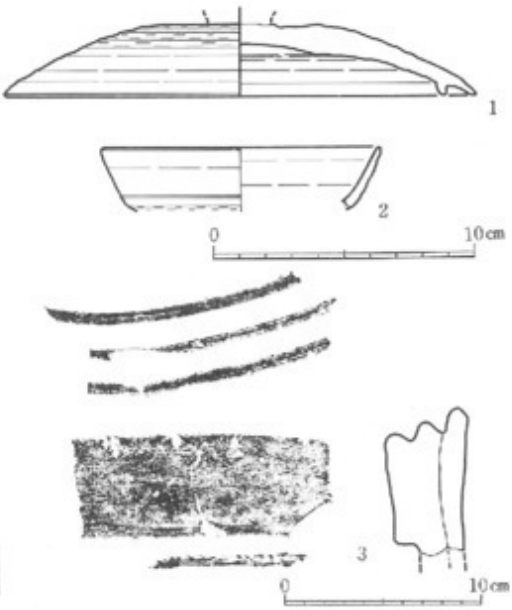
通路状遺構

調査区Ａ区の中央付近で検出されたもので、傾斜面を削平してテラス状の平坦面と溝跡を形成して南東から北西方向にかけて直線上に斜面を登っている。テラス状の部分は幅約１～1.5mであり、その北側に幅約15cm、深さ５cmのＳＤ４溝跡が伴っている。この遺構は２号窯跡、１号溝跡を切っている。





層位	土色	土性	備考
1	10YR5/2灰褐色	砂質シルト	明黄褐色粘土質シルトを斑点状に含む。ロクロ挽き重弧文出土



番号	登録番号	種別	器形	遺構・層位	法量 cm 口径	底径	器高	外面調整	内面調整	分類	残存	写真図版
46－1	E-154	須恵器	壺	SK1 上部撹乱	18.2			ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、かえり	AI	1/2	35－1
46－2	E-156	須恵器	坏	SK1 上部撹乱	10.8			ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ	ロクロナデ	AIb	1/4	

番号	登録番号	種別	遺構・層位	瓦当文様	特徴 凸面	特徴 凹面	分類	備考	写真図版
46－3	Gn－21	軒平瓦	SK1 検出面	ロクロ挽き重弧文	顎部横方向ナデ	糸切り痕、布目痕	Ic	段顎	35－2

第46図　1号・2号土坑

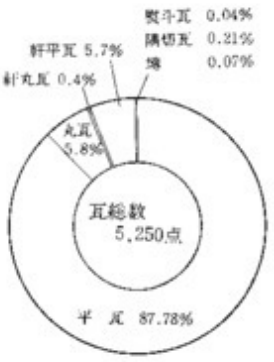
V．出土遺物について

1．瓦　塼　類

調査によって出土した瓦塼類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・塼などがあり、２号・４号・５号窯跡や１号灰原、１号溝跡などから総数5,250点が出土している。その中でも、平瓦は4,608点と最も多い出土量で瓦塼類全体の約88％を占め、さらに丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、道具瓦(熨斗瓦、隅切り瓦)、塼の順で出土している。

丸瓦や平瓦は凸面に叩き目の痕跡が観察されることが多く、その種類もいくつかに分けられ、丸瓦や平瓦を分類する一つの基準となることから、叩き目についてここで概観しておきたい。

第６表　瓦塼類構成比率



(1) 叩き目の種類（第47図、写真36－１～８）

丸瓦や平瓦は、凸面がスリ消されて叩き目が不明なもの以外は、ほとんど観察されており、その種類は大きく格子・平行・縄叩きの３つに分けられる。格子叩き目は形状や大きさにより正格子叩き目（A・B・C)、斜格子叩き目（A・B・C)、長方形格子叩き目の７種類に細分される。また、平行叩き目は凸線の幅や高低などによりA～Fの６種類に細分され、縄叩き目を合わせた叩き目の合計は14種類が観察されている。

正格子叩き目A　一辺の長さが12～15㎜を測る大形の正格子叩き目である。同一の叩き目の中でも大きさが異なり、やや長方形に近い正方形のものもある。

正格子叩き目B　一辺の長さが５～10㎜を測る中形の正格子叩き目である。同一の叩き目でも大きさにばらつきがあり、８～９㎜のものが一般的である。部分的に長方形や斜格子に近いものもある。

正格子叩き目C　一辺の長さが４～６㎜を測る小形の正格子叩き目である。正格子A・B類と同様、斜格子に近いものもある。

斜格子叩き目A　一辺の長さが10～14㎜を測る大形の斜格子叩き目で、斜格子の一単位に１本の刻線を入れて長方形状としている部分がある。

斜格子叩き目B　一辺の長さが９～10㎜を測る中形の斜格子叩き目で、整然とした菱形のものである。

斜格子叩き目C　一辺の長さが５～６㎜を測る小形の斜格子叩き目である。

長方形格子叩き目　長辺が13～15㎜、短辺が３～５㎜を測る長方形叩き目である。

平行叩き目A　平行する凸線は鋭くて高い叩き目で、凸線間の幅が5～7㎜と広い平行叩き目である。凸線は断面三角形状で、木目が鮮明に観察される。叩き目も強く叩かれて凹凸が著しい。

平行叩き目B　平行する凸線間の幅が3～4㎜とやや狭い平行叩き目で、凸線はA類ほどではないが断面三角形状で鋭く高い。

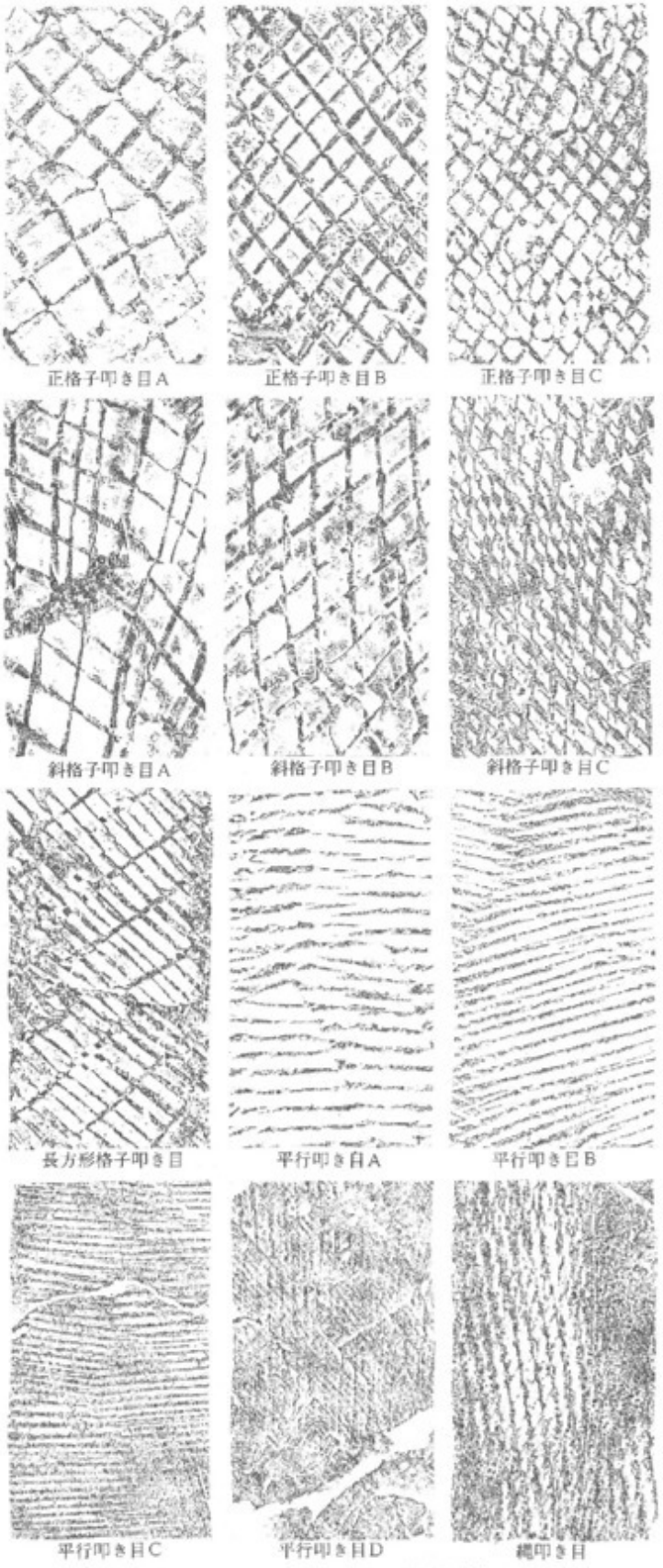
平行叩き目C　平行する凸線間の幅は1～3㎜と狭い平行叩き目で、凸線は細く低いものである。

平行叩き目D　平行する凸線間の幅は4～5㎜と広い平行叩き目で、凸線は細く低いものである。

平行叩き目E　平行叩き目Cと同類のものと考えられるが、叩き板がすり減って不明瞭のものである。

平行叩き目F　平行叩き目Dと同類のものと考えられるが、叩き目板がすり減って不明瞭のものである。

縄叩き目　左撚りの縄叩き目であり、凸面に残された撚紐圧痕は右上り左下りの1段Lの撚紐である。



第47図　叩き目の種類（縮尺1/2）

(2) 瓦の分類

瓦は製作技法や凸面・凹面・側面・端面に残された痕跡などを考慮し、凸面の叩き目や凹面の模骨痕、粘土板合わせ目痕や布の合わせ目痕や布綴じ痕などの特徴に注目して以下のように分類した。

丸　瓦

丸瓦は、瓦塼類全体の5.8%を占める総数304点が各遺構より出土している。そのうち完形に近いものが2号・4号窯跡から8点出土しており、それ以外はすべて破片である。これらの丸瓦は製作技法、凸面の叩き目、調整などによって5類に分類される。

丸瓦Ⅰ類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面が格子叩きされるものである。叩き目の種類によってさらに5類に細分される。a類：正格子叩き目Bのもの、b類：正格子叩き目Cのもの、c類：斜格子叩き目Aのもの、d類：斜格子叩き目Bのもの、e類：長方形格子叩き目のもの、である。

Ⅰ類は5号窯跡、1号灰原、1号溝跡から35点出土している。完形品がないため全体の大きさは不明であるが、狭端部幅推定9.5cm、残存長約20cmのものがある。この類は、凸面の叩き目が縦方向のナデ調整によってスリ消しされているものが多く、凹面は斜方向の糸切り痕、布目痕が観察され、まれに布を合わせてかがり縫いをした布綴じ痕がみられる。凹面の両側縁にはヘラケズリによる面取りがなされている。

丸瓦Ⅱ類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面が平行叩きされるものである。叩き目の種類により2類に細分される。a類：平行叩き目Aのもの、b類：平行叩き目Cのもの、である。Ⅱ類は2・5号窯跡と1号溝跡より36点出土し、Ⅱa類が19点、Ⅱb類が17点ある。

Ⅱa類　おもに2号窯跡前庭部排水施設より完形に近いもの5点が出土している。瓦の大きさは長さ36.2～37.4cm、広端部幅14.3～19.1cm、狭端部幅12.4cmを測り、断面形は半円形を呈する。凸面の平行叩き目はスリ消しがほとんどないものと、平行叩き目後スリ消しされるものとがある。叩き目は3～5cm幅で叩かれている。

凹面は斜方向・縦方向の糸切り痕や布目痕が観察され、まれに布を合わせてかがり縫いをした布綴じ痕（第49図1）や粘土板合わせ目痕がみられる。粘土板合わせ目痕はZ形とS形があり(註6)、さらに布目痕を切るように凸型台の痕跡と考えられるスジ状の圧痕(註7)

第7表　丸瓦構成比率

が観察されるものもある(第48図)。凹面の両側縁には1～3cmの幅でヘラケズリによる面取りのあるものがほとんどである。

IIb類　完形のものはなく、小破片のため全体については不明であるが、凸面は平行叩き目C後ナデ調整のスリ消しが行なわれている。凹面は糸切り痕、布目痕があり、布目痕がつぶれ気味のものもある。

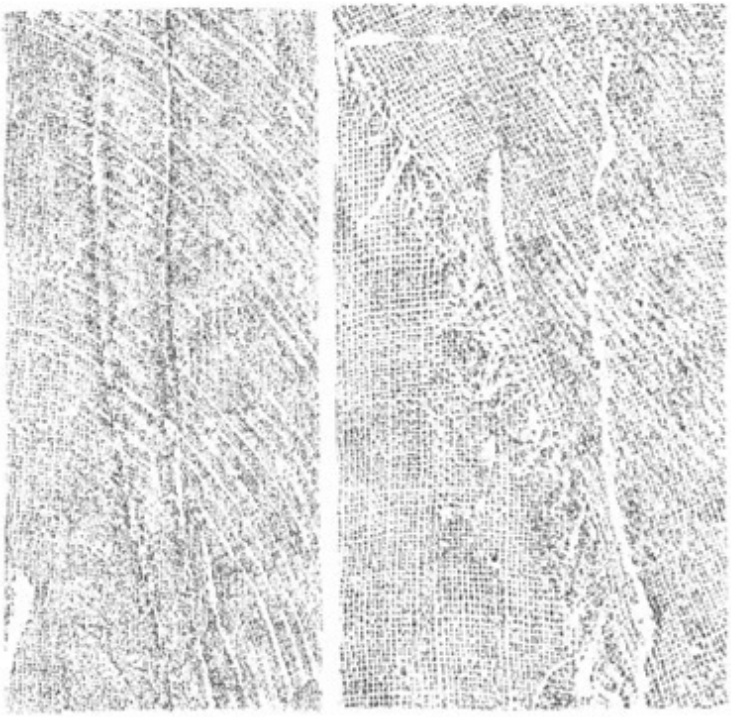
第48図　スジ状の圧痕（縮尺1/2）

丸瓦III類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面を縄叩き目後ナデ調整のスリ消しが行なわれているものである。III類は2・4号窯跡などから29.3%を占める89点が出土している。完形に近いものは5点あり、瓦一枚の大きさは長さ36.6～40.1cm、広端部幅17.2～20.4cm、狭端部幅10.4～11.9cmで、断面形は半円形を呈する。

凸面は縦方向に縄叩きされた後、そのほぼ全面に縦方向のナデ・ヘラケズリ調整によるスリ消しが行なわれ、わずかに縄叩き目が観察される。

凹面には糸切り痕、布目痕、布の合わせ目痕(第49図2、写真36－10)、粘土板合わせ目痕が観察される。布の合わせ目痕は10点で観察され、縫い合わせたものではなく巻いて合わせたもので、布の端糸がそのまま残っている。粘土板の合わせ目痕はまれにみられ、Z形とS形とがある。凹凸面の側縁にはヘラケズリによる面取りが行なわれているものが多い。



1．丸瓦II類（Fb-3）　　2．丸瓦III類（Fb-9）

第49図　布綴じ痕・布合わせ目痕（縮尺1/2）

丸瓦IV類

粘土板巻き作りの無段（行基式）丸瓦で、凸面は全面にナデ・ヘラケズリ調整され、叩き目が不明のものである。完形品がないため全体は不明であるが、長さ28.2cmを測るものがあ

る。Ⅲ類と区別できないものも含んでいるが、縄叩き目が観察されないものをこの類とした。Ⅳ類はおもに１号灰原、１号溝跡より45.1％を占める137点が出土している。凹面の糸切り痕、布目痕、布の合わせ目痕、粘土板合わせ目痕はⅢ類と同様のものである。

丸瓦Ⅴ類

粘土紐巻き作りの有段（玉縁）丸瓦のもので、小破片７点が４・５号窯跡と１号溝跡より出土しているだけである。凸面の叩き目により２類に細分され、ａ類：縄叩き目後スリ消しのもの、ｂ類：叩き目が不明なもの、である。小破片のため全容は不明である。

平　瓦

平瓦は各遺構から瓦塔類全体の87.9％を占める総数4,608点が２・４・５号窯跡と１号灰原、１号溝跡より多量に出土している。製作技法、凸面の叩き目、凹面の模骨痕、調整などによって５類に分類される。

平瓦Ⅰ類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が格子叩きされるものである。凸面の叩き目が１種類のもの（Ａ類）、２種類のもの（Ｂ類）とに大別される。

ⅠＡ類　凸面が１種類の格子叩き目からなるもので、その種類によってさらに７類に細分される。ａ類：正格子叩き目Ａのもの、ｂ類：正格子叩き目Ｂのもの、ｃ類：正格子叩き目Ｃのもの、ｄ類：斜格子叩き目Ａのもの、ｅ類：斜格子叩き目Ｂのもの、ｆ類：斜格子叩き目Ｃのもの、ｇ類：長方形格子叩き目のもの、である。

ＩＡ類は完形に近いものや瓦の一辺が明らかなものが５点出土している。瓦の平面形は長方形に近く、瓦一枚の大きさは長さ42.5cmと45cm、広端部幅34.8cm、狭端部幅24.4～30cmを測る。断面形は円弧形を呈し、その形状より４枚作りの平瓦と考えられる。この類は820点出土しており、１号灰原と１号溝跡より出土したものがその約81％を占めている。

この類の格子叩き目には同一の叩き目が重複し、２次叩きしているものも含んでいると考えられる。またｃ・ｄ・ｅ・ｇ類のように格子叩き目後ナデ調整によるスリ消しが行なわれているものが比較的多くみられる。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などが観察される。糸切り痕は斜・横方向のものが多く、模骨痕は約３～５cmの比較的幅の広いもので、桶板の枚数は７枚から８枚である。模骨痕は凸部がつぶれ気味のものが多く、凸型台の圧痕と考えられるスジ状の圧痕が布目痕を切って多く観察される。粘土板合わせ目痕は132点中16点が認められ、Ｓ形３点とＺ形５点がある。

第８表　平瓦構成比率

布綴じ痕は12点に観察され、布と布を合わせてかがり縫いをし、さらに上下の布をぐし縫いしたもの（第50図１、写真36－12）で、かがり縫いとぐし縫いの間隔が広いものと狭いものとがある。

凹面や凸面の両側面にはヘラケズリによる面取りが行なわれている。特に凸面の両側面は、大きくヘラケズリされているものが多い。

ＩＢ類　凸面が格子叩き目され、さらに種類の異なる叩き目が重複する２次叩きのものである。その種類によって11類に細分され、ａ類：正格子叩き目Ａ→斜格子叩き目Ａのもの、ｂ類：正格子叩き目Ａ→斜格子叩き目Ｂのもの、ｃ類：正格子叩き目Ｂ→正格子叩き目Ａのもの、ｄ類：正格子叩き目Ｂ→斜格子叩き目Ａのもの、ｅ類：正格子叩き目Ｂ→斜格子叩き目Ｂのもの、ｆ類：正格子叩き目Ｂ→斜格子叩き目Ｂのもの、ｇ類：正格子叩き目Ｂ→長方形格子叩き目のもの、ｈ類：正格子叩き目Ｂ→平行叩き目Ｃのもの、ｉ類：斜格子叩き目Ａ→正格子叩き目Ｂのもの、ｊ類：斜格子叩き目Ｂ→正格子叩き目Ｂのもの、ｋ類：斜格子叩き目Ａ→長方形格子叩き目のもの、である。２次叩きが部分的に観察されているが、小破片などはＩＡ類に分類している可能性がある。また２次叩きが全面に及び１次叩きが部分的にみられるものと、反対に２次叩きが部分的にみられるものがある。ＩＢ類はＩＡ類同様粘土板桶巻き作りの平瓦で、43点と出土量は少なく小破片のものが多い。一枚の大きさが推定されるものは２点あり、瓦の大きさは長さ39.8cmと40.8cm、広端部幅約25cmを測る。平面形は長方形に近く、断面形は円弧形を呈し、その形状より４枚作りの平瓦と考えられる。

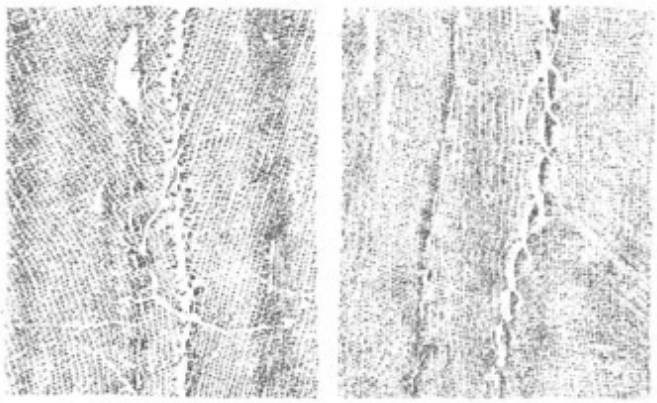
製作技法や叩き目、糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、布綴じ痕、面取りなどはＩＡ類と同様の特徴がある。なお１号灰原出土のＦｂ－185（第36図４）は広端部左側に小さな隅切りがある。

平瓦II類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が平行叩き目されるものである。その種類や調整などによってさらに６類に細分される。ａ類：平行叩き目Ａのもの、ｂ類：平行叩き目Ｂのもの、ｃ類：平行叩き目Ｃで叩いた後ヘラケズリ・ナデ調整によるスリ消しのもの、ｄ類：平行叩き目Ｃ・Ｄの２種類のもの、ｅ類：平行叩き目Ｅのもの、ｆ類：平行叩き目Ｆのもの、である。この類は平瓦の11.1％を占める511点が出土し、その中でも１号灰原と１号溝跡より74.6％の381点が出土している。II類の中ではII ｂ類とII ｃ類が32.9％と32.1％と最も多く、II ａ類が15.5％の割合を占めている。

II ａ類　２・５号窯跡、２号窯跡前庭部南側撹乱よりほぼ完形のもの２点、完形に近いもの８点が出土し、瓦一枚の大きさは長さ40.6～45.2cm、広端幅30～33.5cm、狭端幅推定30～30.5cmを測る。平面形は長方形であり、断面形は円弧形に近いものもあるが、中央部が平坦に近く

側面が上方へ折れ曲がるような「＼＿／」状を呈するものが多い。凸面の側面は大きくヘラケズリによる面取りがなされ、広端部の両側および狭端部の一部に小さな隅切りが行なわれている。小さな隅切りは、広端部両側の隅をほぼ全部切り落としたもので、狭端部の隅切りは1点だけにみられ、狭端部のすべてにあるかどうか不明である。



1．平瓦ⅠAd類（Gb-228）　2．平瓦Ⅱb類（Gb-274）

第50図　平瓦の布綴じ痕（縮尺1/2）

凸面の叩き目は平行叩き目Aが重複し、2度にわたり叩かれている。1次叩きは平瓦の狭端部を奥に置いた場合、右上から左下の斜方向に走り、2次叩きは同方向や横方向、反対の斜方向と様々である。2次叩きにより1次叩きはその痕跡が残る程度であり、叩き目や面取り以外には凸面調整がほとんど加えられていないものである。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕が観察される。糸切り痕は縦方向のものもあるが、主に横・斜方向のもので、粘土板の合わせ目の部分を境に糸切りの方向が連続しないで変化している。粘土板の合わせ目痕は10点中4点にみられ、Z形である。模骨痕は3～4cmの幅で、凸部はつぶれ気味であり不明瞭のものが多い。布目痕は部分的に消えており、その部分には縦方向の細かいスジ状の圧痕が観察され、凸型台の圧痕かと考えられる。さらに布目痕のつぶれや消えている範囲は凹面側縁部付近が顕著である。また布綴じ痕は2点にみられるが、かがり縫いは不明瞭となっている。

Ⅱb類　Ⅱ類の中では出土量が最も多く32.9%を占めており、一辺の大きさが明らかなもの3点以外はすべて小さな破片である。瓦の平面形は長方形であり、長さ37.5cm、狭端幅30cmを測る。断面形はⅡa類と同じような「＼＿／」状を呈し、側面が大きく面取りされる形状も似ている。凸面は平行叩き目Bが重複し2度にわたり叩かれている。叩き目の方向はⅡa類と同様である。

凹面には糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕(第50図2、写真36－11)が観察される。糸切り痕は斜方向であり、粘土板の合わせ目の部分を境に糸切りの方向が連続しないで変化している。粘土板の合わせ目痕はZ形であり、模骨痕は2.5～3.5cmの幅であるがⅡa類同様つぶれ気味で不明瞭である。

Ⅱc類　Ⅱ類中32.1%とⅡb類とほぼ同じ出土量で、一辺の大きさが明らかなものが5点ある。瓦の大きさは長さ38.5～40.2cm、狭端幅28.5cmを測り、平面形は長方形、断面形は円弧形

で、その形状により４枚作りのものと考えられる。破片のものが大半を占め、１号灰原と１号溝跡から90.2%が出土している。IIａ・IIｂ類は叩き目以外ほとんど凸面調整が見られないのに対して、IIｃ類はナデ・ヘラケズリ調整によるスリ消しが施されている。凹面には糸切り痕、模骨痕、布目痕があり、まれに粘土板合わせ目痕、布綴じ痕が観察される。糸切り痕は斜方向もあるが横方向のものが多くみられ、模骨痕は2.7～4.0cmの幅で、不明瞭なものが多い。また、ナデ・ヘラケズリ調整が全体的に及んでいるものもある。平瓦凹凸面の側縁・広狭端縁にはヘラケズリによる面取りがある。

IIｄ類　２種類の平行叩き目があり、平行叩き目Ｃ→平行叩き目Ｄの順に叩かれている。II類の中では最も少ない30点で、１号灰原と１号溝跡からのみ出土している。すべて破片で不明な点が多く、一枚の大きさも狭端幅29.7cmを測るだけである。平面形は長方形に近く、断面形は円弧形でその形状より４枚作りと考えられる。

IIｅ類　IIｃ類と同様の可能性もあるが叩き目が不明瞭でスリ消しはあまり見られない。平面形は長方形で、長さ42.4cmを測る。断面形は円弧形で、その形状により４枚作りと考えられる。模骨痕は不明瞭で凸型台の圧痕と思われる痕跡がある。布綴じ痕は３本縫いのものがある。

IIｆ類　平行叩き目Ｆであり、叩き目が不明瞭のもので33点が出土している。平面形は長方形に近いもので、一枚の大きさが長さ39.3～40.3cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より４枚作りと考えられる。布綴じ痕や粘土板合わせ目痕のＳ形が観察されている。

平瓦III類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面が縄叩き目のものである。平瓦全体の中では、43.6%と最も多い2,007点が出土している。スリ消しや平行叩き目、調整などにより７類に細分される。ａ類：縄叩き目後縦方向のスリ消しのもの、ｂ類：IIIａ類の広端縁に平行叩き目Ｃのあるもの、ｃ類：縄叩き目スリ消し後に平行叩き目Ｃのあるもの、ｄ類：縄叩き目後ほぼ全面ヘラケズリのもの、ｅ類：IIIｂ類のものでほぼ全面ヘラケズリのもの、ｆ類：縄叩き目後横方向のスリ消しのもの、ｇ類：縄叩き目であるが小破片のため分類不能のもの、である。この類の平瓦は２・４・５号窯跡より79.7%を占める1,599点が出土している。

凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕、粘土板合わせ目痕、布綴じ痕が観察され、特に模骨痕は明瞭に残っている。

IIIａ類　凸面が縄叩き目後スリ消しのもので、III類の80%を占める1,606点が２・４号窯跡などより出土している。ほぼ完形に近いものが31点あり、平面形は台形、断面形は円弧形である。凸面の調整は縦方向の直線の縄叩き目であり、縦方向のナデ調整によるスリ消しが行なわれている。凹面の調整は糸切り痕、布目痕、粘土板合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などが観察される。２号窯跡と４号窯跡の平瓦は一枚の大きさや分割枚数などに相違点がある。

〔2号窯跡〕　完形に近いものが10点出土している。一枚の大きさは長さ39.3～50.0cm、広端幅30.0～32.4cm、狭端幅22.9～28.5cmを測り、断面の形状より4枚作りのものと考えられる。凹面の糸切り痕は横・斜方向が多く、模骨痕は明瞭に観察される。模骨痕の幅は1.5～3.3cmで、桶板枚数は12～14枚を数える。粘土板合わせ目痕は登録された25点中12点に観察され、Z形とS形とがあり、その部分は縦方向にナデ調整され消されているものが多い。布綴じ痕はかがり縫いであるが、不明瞭なものが多い。凹凸面の側縁と狭端縁にはヘラケズリによる面取りが多く行なわれている。また、側面・小口面はヘラケズリされるものが一般的であり、少量ではあるが分割しただけで側面にヘラケズリがなく、分割した破面がそのまま残っているものもある。

〔4号窯跡〕　完形に近いものが21点出土している。一枚の大きさは長さ38.0～42.6cm、広端幅27.1～31.6cm、狭端幅23.1～28.3cmを測り、断面の形状より3枚作りのものと考えられる。凹面の糸切り痕や布目痕、模骨痕や凹凸面の面取りは2号窯跡のものと同じである。模骨痕は明瞭に観察され、幅が1.6～2.7cmで桶板枚数は12～14枚を数える。布綴じ痕や粘土板合わせ目痕、分割した破面のままのものがまれに観察される。粘土板合わせ目痕は3例あり、Z形とS形がある。

Ⅲb類　Ⅲa類と同類かもしれないが、凸面が縄叩き目後スリ消しされ広端縁に平行叩き目Cが軽く叩かれているものである。この叩き目は不明瞭であり、桶をはずして乾燥する際に軽く叩かれている補助的な叩きと考えられる。(註8)

この類は2号窯跡より比較的多く出土している。ほぼ完形に近いものが2号窯跡から9点、4号窯跡から1点が出土している。瓦の平面形は台形を呈し、一枚の大きさが長さ40.0～45.6cm、広端幅29.1～31.8cm、狭端幅26.5～28.4cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より4枚作りの平瓦と考えられる。

Ⅲc類　Ⅲa類のものに平行叩き目Cが2次叩きされているもので、ほとんど4号窯跡から出土しており、完形に近いものが6点ある。瓦の平面形は台形で、一枚の大きさが長さ38.3～43.0cm、広端幅26.2～29.5cm、狭端幅22.3～26.6cmを測る。断面形は円弧形で、その形状より3枚作りのものと考えられるが、焼成時の歪みが著しく不明なものもある。

Ⅲd・Ⅲe類　Ⅲa・Ⅲb類のものがほぼ全面にヘラケズリ調整されるもので、2・4号窯跡から少量出土しているだけである。Ⅲd類は2号窯跡からほぼ完形のもの3点が出土し、瓦の平面形は台形で、一枚の大きさが長さ41.5～46.0cm、広端幅34.2cm、狭端幅27.0～29.5cmを測る。Ⅲe類はほとんど破片のものであり、大きさなどは不明である。

Ⅲf類　凸面が縄叩き目後ナデ調整による横方向のスリ消しが行なわれているもので、比較的多くの破片が各遺構から出土している。5号窯跡出土のGb－180（第27図1）が大きさの明らかなもので長さ41.4cm、中央部幅30.0cmを測る。

Ⅲｇ類　凸面が縄叩き目であるが小破片のため分類できないものである。

平瓦Ⅳ類

粘土板桶巻き作りの平瓦で、凸面に叩き目が行なわれたものかどうか不明のものである。完形に近いものがないため、他の分類のものも含んでいる。調整により３類に細分される。ａ類：全面がヘラケズリされるもの、ｂ類：全面がナデ調整のもの、ｃ類：ハケメ状（？）のもの、である。この類は平瓦の13.9％を占める641点が出土し、１号灰原と１号溝跡から75.2％にあたる482点が出土している。

凹面もナデ・ヘラケズリが行なわれているものが多く、部分的に糸切り痕、布目痕、模骨痕などが観察されるだけで、まれに粘土板合わせ目痕や布綴じ痕がある。

平瓦Ｖ類

小破片のものや凸面が剝離しているため不明な平瓦をこの類とした。

軒丸瓦

５号窯跡、１号灰原、１号溝跡から総数23点が出土しており、すべて単弁八葉蓮華文軒丸瓦１種類である。１号灰原出土の軒丸瓦には、瓦当面が完形のものが４点あるが、窯壁が溶け出して完全に接着しており、同様の軒丸瓦と考えられる。

軒丸瓦Ｉ類

単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、瓦当文様の明らかなもの11点が出土している。文様は同類であるが瓦当面の直径や細部の鋭さから２類に細分される。

Ｉａ類　１号灰原や１号溝跡より単弁八葉蓮華文軒丸瓦10点が出土している。すべて瓦当部分の破片であり、軒丸瓦の全容については不明である。瓦当部の直径は16.5～17cmを測り、内区と周縁の間には１条の凸圏線が巡る。内区は直径約11cmで花弁と間弁と中房からなり、花弁はやや平坦で子葉は細い棒状となり、間弁は花弁を取り囲み、その端部は盛り上がりイチョウ形を呈する。中房は直径3.8cmの円形で、蓮子は中央に１個、周辺に６個の計７個がある。丸瓦との接合方法は軒丸瓦の裏側に丸瓦にあうように凹みを彫って接合する印籠つぎであり、Ｆａ－５のように裏側に刻み状のものをつけているものもある（写真30－１）。

Ｉｂ類　瓦当文様はＩａ類と同じ単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、５号窯跡燃焼部床面直上よりＦａ－１（第24図１）１点が出土している。瓦当部の直径が推定18.6cmを測り、Ｉａ類より大形の軒丸瓦である。Ｉａ類より花弁や子葉が大きく、凸圏線や間弁は明瞭で端部の盛り上がりも大きく鋭い。この軒丸瓦は范への押し付けが強く、Ｉａ類のものがどちらかと言えば不明瞭であるのと対照的である。

軒丸瓦II類

周縁部及び凸圏線の破片、あるいは丸瓦部の破片であるため、軒丸瓦の瓦当文様が不明なものが12点出土している。凸圏線はＩａ類と類似するものであり、同類の単弁八葉蓮華文軒丸瓦と考えられる。

軒平瓦

軒平瓦は総数298点が出土し、そのうち、93.6%を占める279点が５号窯跡と１号灰原、１号溝跡から出土している。この軒平瓦は、すべて粘土板桶巻き作りのロクロ挽き重弧文軒平瓦で、顎部の形態は段顎と無段顎の２種類あり、その形態や凸面の叩き目などによって３類に分けられる。

軒平瓦Ｉ類

ロクロ挽き重弧文軒平瓦で、顎部は平瓦部凸面の広端部に粘土板を重ねて作り出した段顎のものである。凹面には布目痕、横方向の糸切り痕、模骨痕などがあり、断面形が円弧形を呈する粘土板桶巻き４枚作りの軒平瓦と考えられる。

平瓦部凸面の叩き目によってさらに３類に細分される。ａ類：凸面が正格子叩き目のもの、ｂ類：凸面が平行叩き目のもの、ｃ類：顎部が破片で不明のもの、である。Ｉ類は165点が出土しており、Ｉａ類107点、Ｉｂ類９点、Ｉｃ類49点である。

Ｉａ類　平瓦部凸面が正格子叩き目される段顎のもので、完形品はなくすべて破片である。顎部は平瓦部より粘土を接合した部分から剝離しているものがほとんどである。瓦当面の大きさは厚さが４～4.5cmを測り、唯一幅の明らかなＧａ－26（第32図７）は下弦幅28cmを測る。この類の顎部は幅約５～６cm、厚さは約２cmで平瓦部に接合されており、その文様はすべて無文で横方向のナデおよびヘラケズリ調整が行なわれている。

軒平瓦の平瓦部には平瓦ＩＡａ類・ＩＡｂ類が用いられ、そのまま顎部を接合させているようである。顎部接合には、平瓦凸面あるいは顎部面などに刻みを入れるのが一般的であるが、この類のものは平瓦部凸面の叩き目にそのまま顎部を接合しているため、その部分から剝離し、平瓦凸面部に施された格子叩き目が顎部内面に陰刻の圧跡として残っているものが多い。

平瓦部凸面の調整は、ほぼ全面にナデ・ヘラケズリ調整によってスリ消しされ、部分的に格子叩き目が残っているＧａ－25（第32図５）とほとんどスリ消しされ顎部剝離面の平瓦に格子叩き目がみられるだけのＧａ－36（第43図６）とＧａ－58（第33図１）とがある。

Ｉｂ類　平瓦部凸面が平行叩き目される段顎のもので、平瓦部は平瓦IIａ類とIIｂ類が用いられているが、破片のため全体は不明である。顎部の文様は無文で横方向のナデ調整である。出土量は少なく、５号窯跡前庭部出土のＧａ－６（第24図３）は、平瓦部には平瓦IIａ類が用

いられ、残存する長さは15cm、残存幅15cm、瓦当面の厚さは4cmを測る。

Ⅰc類　段顎のもので、顎部のみの破片であるため叩き目が不明な軒平瓦である。顎部の文様は無文で横方向のナデ調整されている。

軒平瓦II類

ロクロ挽き重弧文軒平瓦で、平瓦部凸面の広端部に粘土を重ねて厚くしているが、顎部は平瓦部分との段が見られない無段顎の軒平瓦である。広端部凸面に粘土板を重ね、瓦当側が厚く中央に向かって薄くなる断面三角形状を呈するものである。平瓦部の凹面は布目痕、横方向の糸切り痕、粘土板の合わせ目痕、模骨痕、布綴じ痕などがあり、断面形が円弧形を呈する粘土板桶巻き4枚作りの軒平瓦と考えられる。

平瓦部凸面は平行叩き目の有無によってさらに2類に細分される。a類：凸面が平行叩き目のもの、b類：凸面がナデ調整のもの、である。II類は129点が出土し、IIa類35点、IIb類94点である。

顎部は無段顎であり、平瓦部凸面の叩き目の有無を除けばIIa類とIIb類の区別がつかないもので、Ⅰ類と同様に接合した顎部が剝離しているものが多い。剝離した平瓦凸面には平行叩き目、顎部内側にはその圧痕や部分的に布目痕の一部が観察される。顎部の文様は無文で、縦方向のナデ・ヘラケズリ調整が粗く行なわれ、平瓦部の凸面も同様である。

平瓦部は平瓦IIc類が用いられ、完形のものはないが1号灰原出土のGa－32（第33図7）が最も残りが良く、残存長30cm、幅32cmを測り、断面形は円弧形を呈する。この類のものは焼成不良で赤褐色を呈するものが多い。

軒平瓦III類

顎部が欠損する平瓦部の小破片であるため、Ⅰ類及びII類に分類できないロクロ挽き重弧文軒平瓦で、7点が出土している。

熨斗瓦

5号窯跡と1号灰原よりそれぞれ1点ずつが出土している。平瓦ⅠA類と同じもので、凸面の叩き目は長方形格子叩き目と正格子叩き目Cのものがある。Gd－1（第24図4）は5号窯跡前庭部1層出土のもので、最大幅約15cm、残存長18cmを測る。凸面は長方形格子叩き目後ナデ調整による横方向のスリ消しが行なわれている。凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕が認められる。側面は片方がヘラケズリされ、もう一方は分割した破面のままである。

1号灰原1層出土のものは、最大幅15.5cmを測り、凸面が正格子叩き目C後縦方向のヘラケズリがほぼ全面に行なわれているものである。凹面は糸切り痕、布目痕、模骨痕があり、一部縦方向のヘラケズリが行なわれている。

隅切り瓦

隅切り瓦は5号窯跡と1号灰原より11点が出土し、いずれも平瓦の隅を大きく切り落としたものである（第40図2、第41図1・2）。これに用いられる平瓦にはⅠA類・Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類のものがある。そのうち全体がある程度明らかなもの3点が1号灰原より出土しており、ⅠAb類・Ⅱc類・Ⅳ類が1点ずつある。隅切りの方向は凹面を上にして広端面を手前に置いた場合、狭端部から側面にかけて左側が切り落とされている。その他破片のもので左側が切り落とされるものが5点、右側が切り落とされるものが3点ある。

平瓦のⅠB類やⅡa・Ⅱe類の中には、広端部あるいは狭端部に小さく隅切りするものが13点出土しているが、これは隅切り瓦とは明瞭に区別されるものである。

塼

1号灰原と1号溝跡より4点が出土し、いずれも破片であるため不明瞭である。1号灰原出土の2点は比較的良く残っているもので、H－1（第41図3）は平面形が方形又は長方形のもので、残存長12cm、幅15cm、厚さ5.8～6.1cmを測る。H－2（第41図4）は隅切りされた方形又は長方形のもので、残存長9cm、幅13.5cm、厚さ4.0～4.3cmを測る。表裏とも平行叩き目され、その後ナデ調整されているが磨滅しているため不明瞭である。その他小破片が2点あり、1点はH－1・2と同じ種類のもの、もう1点は1号溝跡出土の全面に平行叩き目されるものである。

(3) 瓦の出土傾向（9・10・11表）

ここでは、窯跡や灰原などの遺構ごとの出土量や組み合わせについてみてみたい。

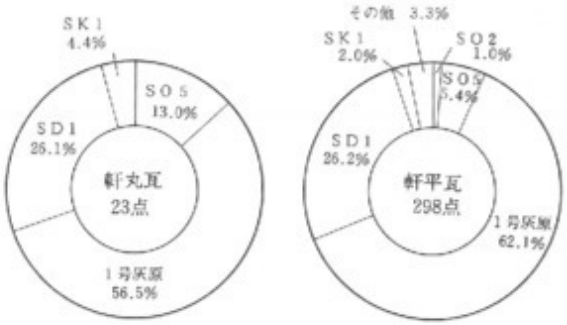
2号窯跡　出土瓦のほとんどは縄叩きの平瓦Ⅲ類が主体を占め、焼成部から前庭部13層にかけてほぼ一面に出土している。焼成部床面の施設瓦には平瓦Ⅲ類と丸瓦Ⅲ・Ⅳ類のほか、ロクロ挽き重弧文軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類、平瓦Ⅰ類がある。さらに前庭部排水施設の丸瓦にはⅡ類とⅢ類が併用されており、前庭部床面出土には平瓦Ⅱa類の完形品がある。

4号窯跡　丸瓦と平瓦の二種類だけで、平瓦と丸瓦は縄叩きのⅢ類が主体を占める。2号窯跡の平瓦は同じⅢ類のⅢa・Ⅲb・Ⅲf類が多いのに対し、4号窯跡はⅢa・Ⅲc類が多く、瓦の分割枚数も相違している。丸瓦は2・4号窯跡ともⅢ類とⅣ類が出土している。

5号窯跡　丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦があるが、そのほとんどは平瓦である。軒丸瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦Ⅰb類とⅡ類、軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦Ⅰ類・Ⅱ類がある。丸瓦はⅠ～Ⅴ類が出土しており、2・4号窯跡ではⅢ類が多いのに対し、5号窯跡ではⅢ類は28.6％と減少し、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類がほぼ同じ割合でみられる。平瓦はⅢ類が多いが、2・4

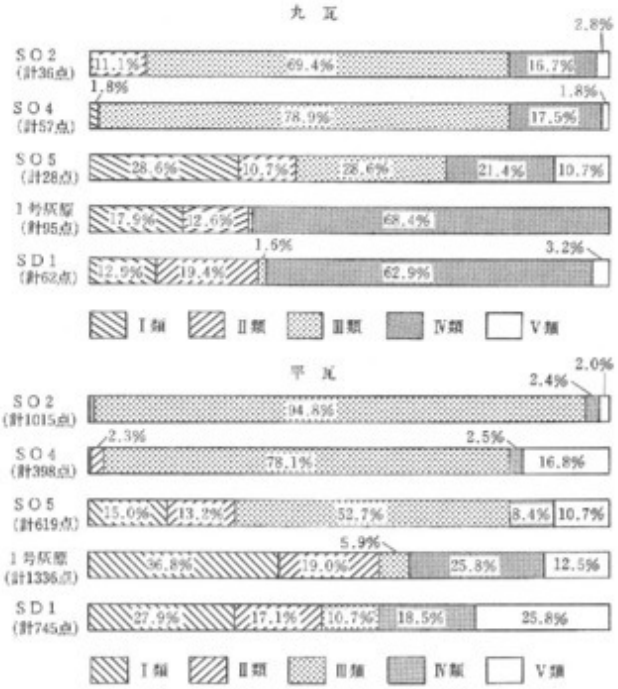
号と比べⅠ・Ⅱ類の出土量も多く、全体の約3割を占める。瓦は燃焼部から前庭部にかけて多く出土しており、焼成部床面では平瓦・丸瓦の破片もあるが、須恵器坏・蓋が多く出土している。焼成部出土の瓦は小破片であり、焼台として使用されているものと考えられる。

第9表　遺構別軒丸瓦・軒平瓦構成比率



1号灰原　各遺構の中で最も多く1,642点が出土しており、全種類がある。そのほとんどは平瓦で、81.3%を占めている。軒丸瓦は今回の調査で最も多い13点が出土し、瓦当文様の不明なⅡ類を除けば、単弁八葉蓮華文軒丸瓦Ⅰa類である。軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦Ⅰ～Ⅲ類で、ほかの遺構の中で最も多い185点が出土している。平瓦と丸瓦はⅢ類が極端に減少し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類が多い。これは2・4号窯跡の平瓦と丸瓦がⅢ類主体であるのとは対照的である。

第10表　遺構別丸瓦・平瓦構成比率



1号溝跡　1号灰原出土の瓦と多くの接合関係があり、両者に遺構の切り合いもなく灰原の形成過程で同時に埋まっており、出土する瓦も1号灰原と同じ傾向といえる。

以上のように、2・4号窯跡と1号灰原・1号溝跡から出土する瓦類の内容にはその種類や分類された瓦類、叩き目などに相違点が存在し、異なった傾向性を示している。5号窯跡はその双方に類似する出土傾向を示しているが、5号窯跡の軒丸瓦や軒平瓦は2・4号窯跡からはほとんどみられず、1号灰原・1号溝跡の出土の軒丸瓦と軒平瓦と同類である。このことから5号窯跡は1号灰原・1号溝跡に近いものであり、大きく2つの瓦群に大別される。

〔A群の瓦〕　5号窯跡とその灰原出土の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類、平瓦Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類

第11表　瓦塼類遺構別集計表

分類／遺構名	平瓦 IA類 a	b	c	d	e	f	g	IB類 a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	II類 a	b	c	d	e	f	III類 a	b	c	d	e	f	g	IV類 a	b	c	V類	計
2号窯跡		1	1							1		1							4						888	33	1	13	1	26		20	5		20	1015
3号窯跡																									2					1						3
4号窯跡						1													5	2	2				266	3	20	5	5	8	4	8	2		67	398
5号窯跡	4	13	30	12	4	8	20								2				42	28	9		3		140	2	4	2		90	86	8	42	2	66	619
1号灰原	16	218	86	33	45	14	55	1	2	4		2	1		8	2	4	1	10	78	84	27	36	29	41		3			18	17	70	244	30	167	1336
1号溝跡	9	57	40	36	18	12	26	1	1						4		1		3	46	64	5	7	4	59				1	11	9	20	112	6	192	745
2号溝跡																									3							2				5
1号土坑	1			3						1	1			1													1									8
2号土坑																							1													1
ピット1				1																																1
ピット2																																			1	1
2窯撹乱		3	2	1	1		2			1					1				5						67	1			1	7		2	6		3	103
4窯撹乱		3	6	2	2		5												1		1				92		4		1	3	1		9		29	159
5窯撹乱																			4	6	1				22					6	2	8	4		1	54
1号土坑撹乱	3	3	1		6		3												1	7	3				8			1		4			11		26	76
不明		1	5	3	2			1							1				4	1					18					1	3	3	26	1	14	84
小計	32	299	171	94	76	35	111	3	3	7	1	3	1	1	16	2	5	1	79	168	164	30	37	33	1606	39	33	21	9	175	124	141	461	39	586	4608
計	839							43											511						3007							641				

分類／遺構名	丸瓦 I類 a	b	c	d	e	II類 a	b	III類	IV類	V類 a	b	小計	軒丸瓦 I類 a	b	II類	小計	軒平瓦 I類 a	b	c	II類 a	b	III類	小計	熨斗瓦 IA類 c	f	小計	隅切り瓦 IA類 b	c	d	f	II類 b	c	IV類	V類	小計	塼	計
2号窯跡						4		25	6	1		36							1		2		3														39
3号窯跡																																					0
4号窯跡		1						45	10		1	57																									57
5号窯跡	7			1		3		8	6	2	1	28		1	2	3	5	1	2	1	4	3	16		1	1					1			1	2		50
1号灰原	10	1		4	2	5	7	1	65			95	7		6	13	64	7	30	23	57	4	165	1		1	3	1	1	1		2	1		9	3	306
1号溝跡		4	1	2	1	3	9	1	39	2		62	3		3	6	29	1	12	10	26		78													1	147
2号溝跡																																					0
1号土坑						1		1	1			3			1	1	3		2	1			6														10
2号土坑																					1		1														1
ピット1																																					0
ピット2																																					0
2窯撹乱						3		2				5																									5
4窯撹乱								5	1		1	7									1		1														8
5窯撹乱	1								6			7																									7
1号土坑撹乱							1	1	2			4					3		2		2		7														11
不明																					1		1														1
小計	18	6	1	7	3	19	17	89	136	5	3		10	1	12		104	9	49	35	94	7		1	1		3	1	1	1	1	2	1	1		4	
計	35					36		89	136	8			11		12		162			129		7		2			6				3		1	1		4	642
累計	304												23				298							2			11									4	

瓦塼類総数5250点

〔B群の瓦〕　2・4号窯跡出土の丸瓦III・IV類、平瓦III・IV類

(4) 瓦の年代

A群は単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、格子叩き目の平瓦Ⅰ類と丸瓦Ⅰ類、平行叩き目の平瓦II類と丸瓦II類、全面がヘラケズリ、ナデ調整される平瓦IV類と丸瓦IV類の一群である。

軒丸瓦は周縁と内区との間に凸圏線が巡り、花弁がやや平坦で子葉が棒状となる単弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、これと組み合う軒平瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦である。

この軒丸瓦や軒平瓦と類似するものとしては、宮城県古川市名生館遺跡(註9)・伏見廃寺跡(註10)や福島県郡山市麓山窯跡(註11)から出土している「山田寺系」(註12)の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組合わせがある。これらの3遺跡の軒丸瓦と本窯跡A群の軒丸瓦は、瓦当面の直径や中房の蓮子の数が相違するが、周縁と内区との間に凸圏線が巡ることや花弁が平坦で棒状の子葉をもつ特徴に類似性が認められる。ロクロ挽き重弧文軒平瓦については、粘土板桶巻き作りで、名生館遺跡・伏見廃寺跡が三重弧文軒平瓦(註13)（段顎）、本窯跡A群が重弧文軒平瓦（段顎、無段顎）、麓山窯跡が重弧文軒平瓦（段顎）である。平瓦部凸面は名生館遺跡・伏見廃寺跡がロクロナデ、花文状叩き目であり、本窯跡が正格子叩き目と平行叩き目、麓山窯跡が斜格子叩き目である。

以上のように、本群の軒丸瓦と軒平瓦のセットは、細部において若干の違いはあるものの、全体的な特徴が名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡と類似する単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦が組み合う点で強い類似性が認められる。名生館遺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と軒平瓦は7世紀末葉から8世紀初頭の年代と考えられていることから、本窯跡出土の軒丸瓦や軒平瓦も同じ時期と考えても大過ないであろう。

次にA群の平瓦と丸瓦については、粘土板桶巻き作りの平瓦と粘土板巻き作りの無段丸瓦で

名生館遺跡（註9より転載）　大蓮寺窯跡（A群瓦）　麓山窯跡（註11より転載）

第51図　単弁蓮華文軒丸瓦（縮尺1/5）

あり、５号窯跡の灰原で軒丸瓦・軒平瓦と共伴していることから、この平瓦と丸瓦の年代も軒丸瓦・軒平瓦と同時期と考えられる。また平瓦Ⅰ類と丸瓦Ⅰ類、平瓦Ⅱ類と丸瓦Ⅱ類の凸面の叩き目は前者が格子叩き目で、後者が平行叩き目であり、この同じ叩き目がロクロ挽き重弧文軒平瓦のⅠａ類とⅠｂ類にみられることからも同様のことが理解される。

Ｂ群の縄叩き目後スリ消しの平瓦Ⅲ類と丸瓦Ⅲ類は、粘土板桶巻き作りの平瓦と粘土板巻き作りの無段丸瓦であり、年代を知り得る共伴資料がないため詳細は不明である。多賀城跡では、粘土板桶巻き作りの平瓦は創建期かそれ以前とみられており、Ⅱ期以降からは一貫して一枚作りになると言われている。また、丸瓦については多賀城創建瓦を焼成した日の出山瓦窯跡や木戸瓦窯跡などから出土のものは粘土紐巻き有段丸瓦（多賀城編年の丸瓦ⅡＢ類）である。(註14) 本窯跡Ｂ群の丸瓦Ⅲ類は多賀城創建瓦の丸瓦ⅡＢ類とは異なるものであり、仙台市郡山遺跡から出土する縄叩き目後スリ消しの粘土板巻き作り無段丸瓦に近い特徴である。(註15) したがって、Ｂ群の下限については、多賀城創建期のころと考えられる。

Ｂ群の上限については、２号窯跡の前庭部の排水施設に使用された丸瓦はⅡａ類とⅢ類が交互に並べられていること、焼成部床面の施設瓦の中にロクロ挽き重弧文軒平瓦が使用されていること、さらに前庭部床面の平瓦Ⅱａ類の平行叩き目がロクロ挽き重弧文軒平瓦Ⅰｂ類の叩き目と同じものであることから、ロクロ挽き重弧文軒平瓦と同じ時期かそれに後続する時期と考えられる

以上のことより、Ｂ群の平瓦と丸瓦の年代は、おおむね７世紀末葉から８世紀前葉のころと考えられる。

２．須　恵　器

須恵器は総数526点が出土しており、５号窯跡や５号窯跡の灰原である１号灰原・１号溝跡などより出土している。器形には蓋・坏・高台付坏・高坏・甕・壺・鉢などがあり、その大部分は甕の破片である。そのうち、灰原と５号窯跡焼成部出土の須恵器とはそれぞれ異なった特徴がみられることから、ここではＡ・Ｂ群土器に分けてその特徴について述べてみたい。

Ａ群土器（第52図）

５号窯跡補修壁、１号灰原、１号溝跡などから出土しており、蓋・坏・高台付坏・高坏などがある。１号土坑確認面からも同様な特徴の坏・蓋が出土している。灰原出土の遺物については灰原という性格上、時間幅のあるものも含んでいるものと考えられるが、一応ここではＡ群土器として扱った。

蓋

Ⅰ類　天井部は丸味をおびてそのまま口縁部にいたり、内面にかえりのある蓋である。つまみは欠損しているため不明であるが、天井部は回転ヘラケズリされている。かえりは比較的明瞭にあるもの(1・4)とかえりが退化してわずかにあるもの(2・3)とがある。

Ⅱ類　天井部は低くて水平に近い大形の蓋で、内面にかえりのないもの(5)である。口縁部は短く丸みをもってそのまま端部にいたる。つまみは不明で、天井部は手持ちヘラケズリ調整が行なわれている。

坏

Ⅰ類　体部外面に段があるもので、口径の大きさで2つに細分される。a類：口径の大きいもの(6・7)、b類：口径の小さいもの(9)である。

Ⅰa類は5号窯跡西側補修壁の中から出土しているもので、底部は丸底のものと考えられる。体部は丸味をもち、体部中央付近の外面にわずかに段が形成されるものである。Ⅰb類は1号土坑確認面出土の小形のもので、体部外面にわずかに段が形成され、体部がやや直立気味のものである。1号灰原、1号溝跡からも同様の段のある小破片が出土している。

Ⅱ類　体部外面に沈線がある大形のもの(8)で、平底のものと考えられる。体部は直線上に外傾し、体部外面の上下2段に4本の沈線があるものである。体部下端は回転ヘラケズリ調整され、体部と底部の境は不明瞭である。

Ⅲ類　小形のもの(10)で、底部は平底で体部下端に回転ヘラケズリ調整されるものである。

高台付坏

Ⅰ類　体部は直線上に外傾し、口縁部がわずかに外反するもの(11・12)で、短い高台が付いている。体部と底部の境は明瞭である。

高坏

Ⅰ類　体部中央の外面に明瞭な段、内面に屈曲がある大形のもの(12)で、口縁部は外傾し、口縁端部は水平となる。底部と体部との境は不明瞭で、体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリ調整が行なわれている。脚部は底部中央部に付けられているが欠損している。

鉢

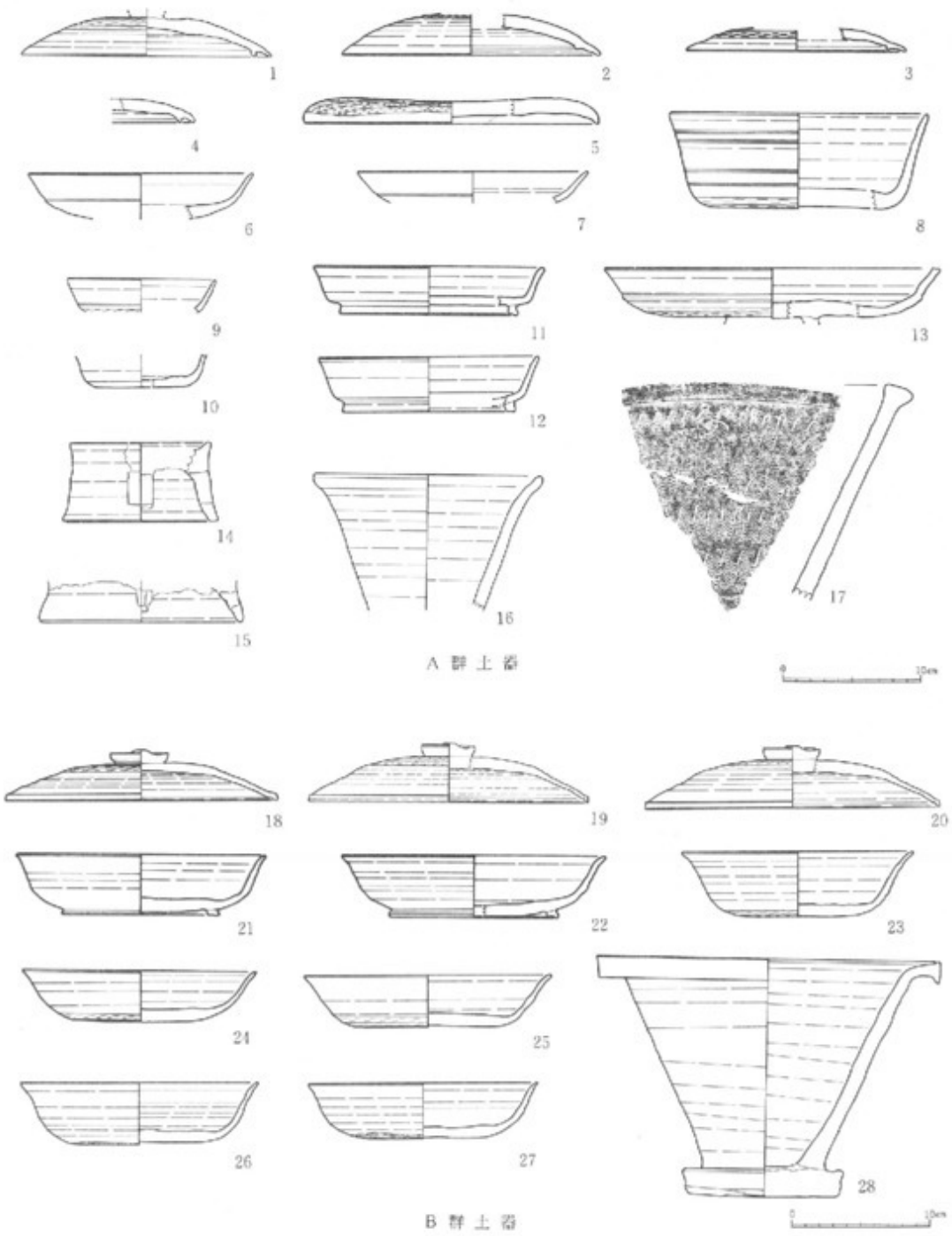
Ⅰ類　体部が直線上に外傾し、口縁部はやや外反するもの(16)で、口縁端部は丸く仕上げられている。

Ⅱ類　体部が直線上に外傾してそのまま口縁部にいたり、口縁部は上から押しつぶされて内外面が厚くなり、口縁端部は外傾する。体部外面には4条の波状沈線文が施されている(17)。

円面硯

硯部から脚部のもの(14)と脚部のもの(15)がある。共に破片であり、脚部に方形の透かしがある

もので、脚部は外方へ開きそのまま端部にいたり、丸く仕上げられている。



第52図　A・B群土器集成図（縮尺1/5）

B群土器（第52図）

5号窯跡焼成部の床面上および床面に近い層より一括出土したもので、蓋・坏・すり鉢などがある。

蓋

I類　内面のかえりはなく、天井部が丸味をもってそのまま口縁部にいたる大形の蓋で、口径18.5～22.2cmを測る。つまみは扁平な宝珠形のもので、つまみ周辺の天井部は約1/3ほど回転ヘラケズリされるものがある。口縁部の形状はやや外方へ短く折り曲げられるもの(18)と下方に短く折り曲げられるもの(19・20)とがあり、口縁部の外面はつまみ出されて凸線や稜となり、内面は沈線状に凹んでいるものもある。

坏

I類　坏の底部は丸底に近い平底のもので、体部はやや丸味をもって立ち上がり口縁部が外反し、口縁端部は鋭く仕上げられている。底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、底部と体部の境が不明瞭なものである。すべて再調整が加えられ、再調整の種類によってさらに3類に細分される。a類：体部下端から底部全面にわたり回転ヘラケズリ調整されるもの(23)、b類：底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、体部下端から底部周縁部にかけて回転ヘラケズリされるもの(24・25)、c類：体部下端から底部全面にわたり手持ちヘラケズリされるもの(26・27)であり、Ia類が2点、Ib類が5点、Ic類が2点出土している。口径は16.0～18.0cm、底径8.2～9.8cm、器高3.8～4.8cmを測る。胎土は砂粒を多く混入しており、焼成はあまり良くないもので、色調は赤褐色ないし茶褐色を呈する。

高台付坏

I類　底部は丸底で、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部が外反する。高台は短く付けられ、高台と底部がほぼ同じ位置にあるものもある。2点が出土しており、底部が回転ヘラケズリ調整のもの(21)と底部の切り離しが回転ヘラ切りのもの(22)がある。

すり鉢

I類　底部は厚い円板状のもので、体部は直線上に外傾して口縁部が大きく外反し、その端部は上下にややつまみ出して口縁帯となしている(28)。完形品1点と底部片1点があり、底部の側面から底面にかけては手持ちヘラケズリ調整が行なわれている。

このように、A群土器とB群土器に分類された。そこでA群・B群土器の年代について考えてみたい。

A群土器の特徴としては、内面にかえりのある蓋I類と内面にかえりのない蓋II類、さらに体部外面に段や沈線のある坏I類やII類、高坏I類、高台付坏I類などにその特徴が見い出さ

れる。

陶邑古窯跡群では、内面にかえりのある蓋はIII期からみられ、かえりのあるものとないものが共存するのはＴＫ48型式、かえりが消滅するのはＭＴ21型式であり、ＴＫ48型式は７世紀後葉の時期、ＭＴ21型式は奈良時代の初期のものとされている。(註16)

Ａ群土器の蓋Ⅰ類・II類に類似するものとしては、仙台市郡山遺跡のＳＩ390住居跡や福島市小倉寺高畑窯跡出土のものがある。郡山遺跡ＳＩ390住居跡はII期官衙の第４段階で、７世紀末葉から８世紀初頭に位置づけられている。(註17)高畑窯跡２・３号窯跡では、やや丸底風の坏と平底の坏、蓋の内面にかえりがあるものとないものとが共伴して出土しており、８世紀初頭と考えられている。(註18)Ａ群土器の蓋のかえりは退化形態のもので、かえりがあるものとないものが出土しており、ほぼ７世紀末葉から８世紀初頭と考えられる。

体部に段がある坏Ⅰａ類は土師器を模倣したかのような器形であり、坏Ⅰｂ類は段のある小形の坏である。このような体部に段をもつ坏などは郡山遺跡のＳＩ143住居跡(註19)や蔵王町塩沢北遺跡１号住居跡(註20)、蘭山窯跡Ｂ窯跡(註21)などに類例が求められ、７世紀末葉から８世紀初頭と考えられている。

これらのことから、Ａ群土器の年代については７世紀末葉から８世紀初頭の年代幅の中に位置づけられるものと考えられる。この年代観は単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦のＡ群瓦の年代とおおむね一致する。

Ｂ群土器の坏Ⅰ類は丸底に近い平底のもので、体部はやや丸味をもちながら外傾し、口縁部が外反するものである。底部の切り離しは回転ヘラ切りされ、すべて再調整が加えられている。再調整には回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリがあり、体部下端から底部全面のものと体部下端から底部周縁にかけて行なわれているものとがある。高台付坏は底部が丸底で、体部が丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもので、坏Ⅰ類と同様の器形である。高台は短く付けられている。蓋は扁平な宝珠形のつまみで、まだ宝珠形の面影を残している。内面のかえりはなく天井部が高い大形のもので、口縁部は短く下方あるいはやや外方に折り曲げられている。

以上がＢ群土器の特徴であるが、このような土器群に類似するものとしては、高畑窯跡、福島県相馬市善光寺窯跡群９号窯跡、涌谷町長根窯跡群、色麻町日の出山窯跡群、大和町鳥屋窯跡群などがある。

８世紀初頭と考えられている高畑窯跡では、蓋の内面にかえりのあるものとないもの、坏はやや丸底風のものと平底のものとが共存して出土している。(註22)Ｂ群の坏Ⅰ類は丸底に近い平底のものであり、高畑窯跡の丸底風の坏に類似しているが、蓋の内面にかえりがないことより高畑窯跡に後続するものと考えられる。また、ほぼ同じころに位置づけられている長根窯跡群Ａ地点１号窯跡では、丸底の坏と大形の蓋、高台付坏などが出土しており(註23)、蓋の形状やつまみ、口

縁端部の形状などはA群土器蓋Ⅰ類に類似するものと考えられる。

8世紀前葉と考えられている鳥屋三角田南窯跡[註24]や善光寺窯跡群9号窯跡出土の坏は[註25]、ほとんど平底のもので、底部と体部の境が明瞭で体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が加えられている。善光寺窯跡群9号窯跡では、底部の切り離しは回転ヘラ切りと静止糸切りがあり、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が加えられている。また、ほぼ同じ頃の日の出山窯跡群では、丸底の坏も出土しているが、主体は静止糸切りの平底の坏で、手持ちヘラケズリの再調整が加えられている[註26]。

B群土器坏Ⅰ類については、善光寺窯跡群9号窯跡第1次床面出土の坏に類似性がみられるが、静止糸切りの坏は1点も出土しておらず、器形的にも丸底に近い坏であることから善光寺窯跡群9号窯跡の坏よりも先行するものとみられる。

これらのことから、B群土器の年代については、長根窯跡群A地点1号窯跡と善光寺窯跡群9号窯跡の中間に位置づけられるものであり、8世紀初頭から8世紀前葉の時期と考えられる。

その他に、A・B群土器に含まれない坏2点と甕1点が2号窯跡崩壊土最上層から出土している。坏はいずれも底部の切り離しが回転ヘラ切り無調整のものである。

Ⅵ. 遺構について

調査によって発見された遺構には、窯跡5基、灰原1カ所、溝跡6条、土坑2基、通路状遺構、ピットなどが検出されているが、ここでは窯跡を中心に考えてみたい。

1．窯跡の構造と操業期間

調査区A・B区より5基の窯跡が検出され、地山をトンネル状に刳り抜いた地下式窖窯と窯の形に掘り窪めて構築した半地下式窖窯の二種に大別される。地下式窖窯は3基（2・4・5号窯跡）があり、半地下式窖窯は2基（1・3号窯跡）がある。これらの窯跡は、窯の構築場所が傾斜面の上下2カ所の位置に分布し、上の斜面の窯跡は、4・5号で標高約30～31.5m以上に構築されている。下の斜面の窯跡は1・2・3号で標高26～30mに構築されている。

地下式窖窯には焼成部の床面が無段の地下式無段窖窯と床面が階段状となる有段の地下式有段窖窯があり、前者が5号窯跡、後者が2・4号窯跡である。

地下式無段窖窯　5号窯跡は窯体の下半部が検出され、焼成部の一部や煙道部と窯体上部は削平のため壊されている。窯の規模は残存長約7m、焼成部中央幅約2.2m、燃焼部幅約1m、前庭部幅約3.7mを測る。

焼成部床面は無段で、その傾斜角度は18°と2号窯跡の焼成部床面の角度に比べ緩やかであ

る。両壁下に幅5～10cmの排水溝が検出され、焼成部と燃焼部の境で曲がっている。その焼成部と燃焼部の境付近の西壁はスサ入り粘土で補修されており、東壁も同様であったと考えられるが崩壊しているため不明である。燃焼部の平面形は長方形状を呈し、床面の傾斜角度は6°とほぼ平坦となる。前庭部は方形を呈し、床面は2号窯跡のように平坦ではないがほぼ類似する形状である。

1号灰原と1号溝跡は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦をはじめとするA群の瓦と少量のA群の須恵器や円面硯の出土状況やその傾向性などにより、5号窯跡の灰原とみて間違いないものと考えられる。

地下式有段窖窯　2・4号窯跡があり、ともに焼成部が階段状の床面である。比較的遺存状況が良好な2号窯跡は、残存長7.5m、焼成部最大幅1.4m、前庭部幅3.3mを測る。

焼成部床面は奥行20～30cm、高さ20～30cmの階段状で11段が検出されている。4号窯跡のものは6段あるが2号窯跡のような整然としたものではなく、やや不規則な床面で奥行10～30cm、高さ5～10cmであり、高さが低い点やや異なっている。焼成部床面の階段上には、その平坦面に合わせて丸瓦や平瓦を分割し、数段に重ねて平坦面を作って焼台としている。また、焼成部幅は1.1mと1.4mで無段のものより狭く、床面の傾斜は2号窯跡が約33°と急であり、4号窯跡は5号窯跡と同じ18°とやや緩やかである。このように2号窯跡と4号窯跡では、床面の階段や傾斜角度などやや様相を異にしている。

燃焼部の平面形は長方形状を呈し、床面の傾斜角度は6°とほぼ水平となる。2号窯跡の前庭部は、床面が燃焼部から連続して平面形が方形のものであるのに対して、4号窯跡の前庭部は燃焼部をそのまま延長した部分とその両側に一段高い床面からなる方形のものと考えられ、2号窯跡の前庭部とは相違する部分もある。

半地下式無段窖窯　1・3号窯跡があるが1号窯跡は大部分壊されて焼成部の一部が検出されたに過ぎず、3号窯跡が比較的遺存状況が良い。3号は残存長4.5m、幅1.2mで焼成部から奥壁にかけて検出され、燃焼部、煙道部はすでに壊されている。あまり焼けた状態ではなく、軟らかな床面で、その傾斜角度は26～30°である。この2基の窯跡は焼成部床面に段などの施設されていない無段窖窯である。

以上のように地下式無段・有段窖窯、半地下式無段窖窯の3つのタイプの構造の窯跡が検出された。次に、各々の窯跡の操業の期間について考えてみたい。

1号・3号窯跡は遺物がほとんど出土していないため、窯跡の年代については不明である。台ノ原・小田原古窯跡群では、陸奥国分寺創建期以降の瓦窯跡が多く発見され、半地下式無段窖窯が主流を占めているようである。さらに内藤政恒氏の「歴史考古13」[21][27]の報文では大蓮寺窯跡（報文では小田原案内の瓦窯址）から採集された歯車文軒丸瓦（？）と大蓮寺所蔵の重弁蓮華

文軒丸瓦が紹介されており、それぞれ奈良時代後半と平安時代の瓦と考えられる。1・3号窯跡はそれらの遺物を焼成した可能性も考えられる。

2号窯跡は、前庭部床面と焼成部床面から前庭部第14層上面にかけて一面に検出される面があり、前庭部には床面が2枚あったことが考えられた。前庭部床面では、A群の瓦である平瓦IIa類のほぼ完形のものが出土し、さらに、焼成部から前庭部14層上面では、B群の瓦である平瓦IIIa・b類、丸瓦III類が出土している。A群の瓦は7世紀末葉から8世紀初頭、B群の瓦はおおむね7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。この窯跡は瓦を専用に焼成した窯跡で、操業期間は7世紀末葉から8世紀前葉である。

4号窯跡はB群の平瓦IIIa・IIIc類、丸瓦III類・IV類が主体的に出土し、2号窯跡の第2次操業の時期とほぼ同じと考えられ、平瓦と丸瓦を専用に焼成した瓦専用の窯跡と考えられる。

5号窯跡は、灰原出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦のA群の瓦より7世紀末葉から8世紀初頭、さらに最終段階に焼成した須恵器のB群土器より8世紀初頭から8世紀前葉の年代と考えられる。この窯跡は瓦・須恵器を焼成した窯跡で、操業期間は7世紀末葉から8世紀前葉である。

3基の地下式窖窯は、おおむね7世紀末葉から8世紀前葉の中に位置づけられたが、この3基の窯跡が同時に操業していたかどうかについては不明である。仮に時間差があったとしてもそれほど差があるものとは考えられず、比較的短い時間差の中の変遷と考えられる。また2号・4号窯跡ではB群の瓦の平瓦III類が出土し、細部では多少相違している点もあるが、窯単位の焼成する瓦の相違としてみておきたい。

今回の調査は限られた範囲の中で前述した窯跡が検出された。大蓮寺窯跡では1975年の調査において5世紀代の須恵器窯跡と工房跡と考えられるテラス状遺構が検出されている。(註28) この地点は、第2・3次調査区より北東に約50m離れた場所で、テラス状遺構からA群の瓦と同類のロクロ挽き重弧文軒平瓦や平瓦が出土している。この瓦は今回調査した5号窯跡と同じ製品か、あるいは同一の瓦工人集団で焼成されたものと考えられる。このような状況から、今回の調査区以外、特に東側に同様の窯跡が存在する可能性が考えられる。

さて、8世紀前後の窯跡としては、宮城県内では多賀城創建瓦を焼成した日の出山窯跡群や木戸瓦窯跡などの瓦窯跡、(註29) 須恵器を焼成した長根窯跡群、(註30) 鳥屋窯跡群、(註31) などの須恵器窯跡があり、また福島県内でも高畑窯跡、(註32) 善光寺窯跡群、(註33) 麓山窯跡(註34)などがある。麓山窯跡を除きほとんど地下式無段窖窯であり、この時期の一般的な形態として捉えることができる。

2号窯跡に類似するような地下式有段窖窯の窯跡としては、宮城・福島県内では知られておらず、8世紀前葉とみられる京都府丹波周山窯址1号窯跡(註35)や7世紀第4四半期～8世紀第2四半期と考えられている東京都多摩ニュータウン遺跡No.513遺跡1・3号窯跡(註36)などが比較的類似す

るものである。№513遺跡は地下式有階有段窖窯で、有階と無階の違いはあるが2号窯跡の前庭部の形状は№513遺跡1・3号窯跡に類似している。

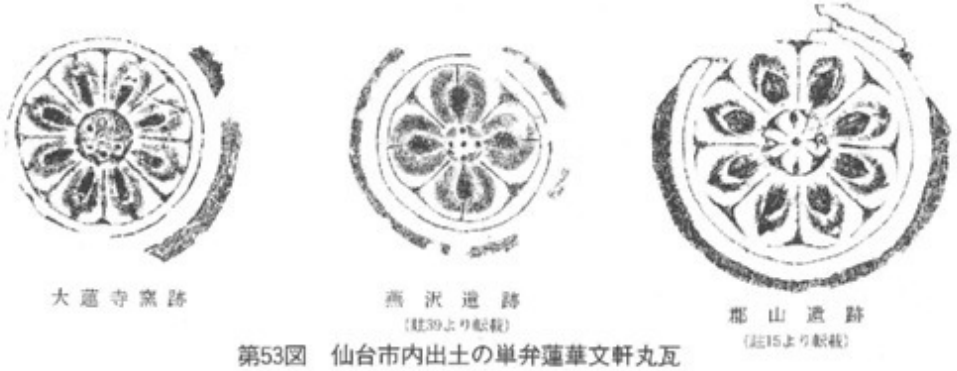
2．瓦の供給

大蓮寺窯跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、格子・平行叩き目の丸瓦と平瓦の一群は7世紀末葉から8世紀初頭と考えられた。ここでは、これらの瓦の供給先について考えてみたい。

本窯跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、これまでのところ内藤政恒氏が報告した[註37]例以外は出土しておらず、供給された遺跡については不明である。しかし、このような瓦は官衙や寺院などに供給されたものであり、この時期の官衙や寺院跡は仙台市郡山遺跡と以前から官衙あるいは寺院ではないかと考えられている燕沢遺跡が知られている。

本窯跡の南約7kmのところには、多賀城創建以前の官衙跡と寺院跡が発見されている郡山遺跡が位置しており、7世紀末葉から8世紀初頭にかけてのII期官衙跡と寺院跡から単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土している[註38]。しかし郡山遺跡の軒丸瓦と本窯跡出土の軒丸瓦を比較してみれば、郡山のものは花弁がやや尖り気味で中房の蓮子など相違しており、平瓦や丸瓦の叩き目も違っているなど本窯跡出土のA群の瓦とは異なった特徴を示している。

次に燕沢遺跡出土の遺物と比較してみると、周縁と内区の間に圏線が巡る単弁四葉蓮華文軒丸瓦が表採されており、すでに指摘されているように7世紀末葉から8世紀初頭と考えられている[註39]。この軒丸瓦の凸面部には平行叩き目が施され、凹面には糸切り痕、布綴じ痕、凸型台圧痕が観察される粘土板巻き作りの無段丸瓦である。丸瓦凸面部の叩き目は、本群の丸瓦IIa類の平行叩き目Aと同類の叩き目であり、また凸型台圧痕もみられることから丸瓦IIa類と共通していると考えられる。このような丸瓦は、燕沢遺跡第1次～第4次調査で一定量が出土している。また第1次～第3次調査では、ロクロ挽き重弧文軒平瓦のほか、本群の瓦と製作技法が



大蓮寺窯跡　　燕沢遺跡（註39より転載）　　郡山遺跡（註15より転載）

第53図　仙台市内出土の単弁蓮華文軒丸瓦

対応する凸面に格子・平行叩き目のある平瓦が一定量出土している。すでに燕沢の報文でも指摘されているように本窯跡の製品とみられ、かつ比較した結果も同様のことが言える。(註40)

以上のことから、本窯跡より出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦の一群は、これまでのところ燕沢遺跡に供給された可能性が最も高いものと考えられる。燕沢遺跡ではこの時期の遺構についてはほとんど不明であるが、以前より寺院や官衙の存在が考えられてきた遺跡であり、7世紀末葉から8世紀初頭の遺構や遺物の発見については、今後の調査に期待するところが大きい。

さらに調査で出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と同じ技法をもつ同一系統の工人グループのものと考えられ、郡山遺跡や多賀城跡の国府系の軒丸瓦とは別の系統と考えられる。このような異なる軒丸瓦がほぼ同じ頃に仙台市内に発見されたことは、仙台平野における多賀城創建以前の官衙・寺院跡を考える上で貴重な発見であった。

Ⅶ. ま と め

大蓮寺窯跡第2・3次調査によって得られた調査成果は次のとおりである。

1. 大蓮寺窯跡は台ノ原・小田原古窯跡群の東端にある窯跡群であり、これまでの調査で5世紀代の須恵器窯跡1基、7世紀末葉～8世紀前葉の瓦窯跡3基と工房跡1基、奈良・平安時代(?)の瓦窯跡2基が発見された遺跡であることが明らかとなった。
2. 今回の調査で発見された遺構は、7世紀末葉～8世紀前葉の地下式無段窖窯1基、同時期の地下式有段窖窯2基、奈良・平安時代(?)の半地下式窖窯2基、時期不明の土坑2基(?)、通路状遺構やピットなどである。
3. 今回の調査で、窯跡などから単弁八葉蓮華文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦（熨斗瓦、隅切り瓦)、埦などの多量の瓦埦類と須恵器が出土している。
4. 単弁八葉蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦のセットは、5号窯跡及びその灰原と考えられる1号灰原と1号溝跡より出土しており、名生館遺跡・伏見廃寺跡や麓山窯跡出土の軒丸瓦と同じ系統のもので、7世紀末葉～8世紀初頭の年代に位置づけられた。
5. 単弁八葉蓮華文軒丸瓦やロクロ挽き重弧文軒平瓦、同時期の丸瓦・平瓦は、本遺跡の北東約1.5km離れた燕沢遺跡に供給された可能性が高いことが指摘された。

最後に、A群の瓦以外の遺物については十分検討できなかった。さらに軒平瓦の顎部が有段と無段があり、軒平瓦の凸面の格子叩き目と平行叩き目、平瓦・丸瓦の凸面の格子叩き目と平

行叩き目などに違いがみられ、それが同じ時期の種類の違いか、あるいは時間差と考えられるかについての検討は、今後の問題としておきたい。

註

(1) 渡辺泰伸・結城慎一　1976：「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国宮窯跡群』

(2) 内藤政恒　1939：「宮城県利府村春日瓦窯焼場大沢瓦窯址研究調査報告」東北帝国大学法学部奥羽史料調査部研究報告第1

内藤政恒　1963：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(一)」『歴史考古』9・10合併号

内藤政恒　1964：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(二)」『歴史考古』11号

内藤政恒　1964：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(III)」『歴史考古』12号

内藤政恒　1965：「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(IV)」『歴史考古』13号

(3) 伊東信雄　1950：「燕沢古瓦出土地」『仙台市史3』

(4) 渡部弘美　1982：「燕沢遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第39集

渡部弘美・佐藤　裕　1984：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集

結城慎一・中富　洋他　1988：「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集

田中則和・工藤信一郎　1992：「燕沢遺跡第4・5・6次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第154集

(5) 伊東信雄・氏家和典　1968：「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書」仙台市文化財調査報告書第3集

(6) 佐原　真　1972：「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号では、「粘土板合せ目面」の重ね方には、二種類あり、これを桶の上からみた形状によって、S・Zと区別しているので、ここでもこれに従った。

(7) 『第17回古代城柵官衙遺跡検討会』の資料では、「凸型台圧痕（木目状）」としているが、宮城県多賀城跡調査研究所の進藤秋輝、高野芳宏の両氏の御教示により、木目状圧痕ではなく、何らかの凸型台圧痕であるとのことから、ここでは凸型台の圧痕と考えられるスジ状の圧痕とした。

(8) （註6）と同じ。

(9) 進藤秋輝　1978：「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要V』宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県多賀城跡調査研究所　1981：「名生館遺跡Ⅰ－玉造柵跡推定地－」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6冊

(10) 佐々木茂槙　1971：「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻第3号

(11) 梅宮　茂　1960：「郡山市麓山窯跡調査報告書」福島県文化財調査報告書第8集

高松俊雄　1984：「郡山市麓山瓦窯跡出土の瓦について」『福島考古』第25号記念号

(12) 福島県立博物館　1988：「陸奥の古瓦――瓦が語る福島の古代史――」

辻　秀人　1992：「陸奥古瓦の系譜」『福島県立博物館研究紀要』第6号

1992年の研究紀要では、郡山市麓山窯跡、古川市伏見廃寺、古川市名生館遺跡、仙台市大蓮寺窯跡の「単弁八弁蓮華文軒丸瓦」は、広い意味で山田寺の流れにあるとしたうえで、広義の「山田寺式」の範疇にも入らず、直接に大和山田寺の系譜に位置づけるのは困難であるとしている。上記の4遺跡の軒丸瓦の棒状の子葉の形状などの特徴は、上野上植木廃寺、金井廃寺出土瓦、武蔵大谷窯跡、勝呂廃寺出土瓦などに類似を見い

出し、関東の上野あるいは、武蔵にその系譜を求めている。

(13) 『名生館遺跡Ⅰ』では、「四重弧文軒平瓦」と記載されているが、重弧文の弧文は凹線の数を数えることにし、三重弧文軒平瓦と呼称した。

(14) 宮城県多賀城跡調査研究所　1980：「多賀城跡　政庁跡　図録編」
宮城県多賀城跡調査研究所　1982：「多賀城跡　政庁跡　本文編」
進藤秋輝　1976：「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』

(15) 木村浩二他　1987：「郡山遺跡Ⅶ」仙台市文化財調査報告書第96集

(16) 田辺昭三　1966：「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981：「須恵器大成」

(17) 木村浩二他　1984：「郡山遺跡Ⅳ」仙台市文化財調査報告書第64集

(18) 工藤雅樹　1969：「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」『福島市文化財』福島市文化財報告書第７集

(19) 木村浩二他　1982：「郡山遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第38集

(20) 小川淳一　1980：「塩沢北遺跡」『東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

(21) 木本元治　1975：「郡山市鏡山瓦窯跡出土の須恵器」『しのぶ考古５』
木本元治　1990：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」『伊東信雄先生追悼　考古学古代史論攷』

(22) 註(17)と同じ

(23) 佐々木茂松・桑原滋郎　1971：「長根窯跡」
岡田・佐々木・桑原　1972：「長根窯跡群Ⅱ」
桑原滋郎・辻　秀人　1976：「長根窯跡群Ⅲ」

(24) 東北学院大学考古学研究部　1973：「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告書」『温故第９号』

(25) 木本元治・大越道正　1989：「善光寺遺跡（第二次）」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第211集

(26) 岡田・工藤・桑原・佐々木・進藤　1970：「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書第22集

(27) 註(2)と同じ

(28) 註(1)と同じ
なお、仙台育英学園高等学校に収蔵している大蓮寺窯跡テラス状遺構出土の瓦については、渡辺泰伸氏の御好意により実見させていただいた。その結果、ロクロ挽き重弧文軒平瓦や平瓦については、胎土、焼成、叩き目が同じものであった。

(29) 註(26)と同じ
伊東信雄　1981：「宮城県史34（資料篇11）」

(30) 註(23)と同じ

(31) 註(24)と同じ

(32) 註(18)と同じ

(33) 註(25)と同じ
木本元治・福島雅儀他　1988：「善光寺遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第192集

(34) 註(11)と同じ

(35) 京都大学文学部考古学研究室　1982：「丹波周山窯址」

(36) 比田井克仁　1991：「一地方窯成立の史的契機」『研究論集X』東京都埋蔵文化センター

(37) 註(2)と同じ

原田良雄　1974：「東北古瓦図録」

(38) 註(3)、(9)と同じ

木村浩二他　1985：「郡山遺跡V」仙台市文化財調査報告書第74集

(39) 渡部弘美　1987：「燕沢遺跡出土の軒丸瓦（資料紹介）」『年報8』仙台市文化財調査報告書第107集

(40) 註(4)と同じ

参考文献

稲垣晋也　1971：「古代の瓦」『日本の美術No.66』

大川　清　1973：「日本の古代瓦窯」

岡田茂弘・桑原滋郎　1974：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要I』

木村浩二他　1981～92：「郡山遺跡I～XII」

工藤雅樹・桑原滋郎他　1974：「大木戸窯跡群第1次調査報告」『国見町の文化財』国見町文化財調査報告書第3集

白鳥良一　1980：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』

白鳥良一　1992：「陸奥国における城柵・官衙の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東』

中村　浩他　1976～78：「陶邑I～III」『大阪府文化財調査報告書第28～30輯』

中村　浩　1981：「和泉陶邑窯の研究」

奈良国立文化財研究所　1978：「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所学報第31冊

奈良国立文化財研究所　1976：「平城宮発掘調査報告VII」奈良国立文化財研究所学報第26冊

奈良国立文化財研究所　1991：「藤原宮と京　展示案内」

福島県教育委員会　1985：「関和久遺跡」福島県文化財調査報告第153集

宮城県教育委員会　1987：「梨沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集

森　郁夫　1992：「都城の土器集成」『古代の土器I』

渡辺泰伸　1990：「瓦生産の諸段階　古代東北地方における瓦生産導入期」『伊東信雄先生追悼　考古学古代史論攷』

渡辺泰伸　1991：「須恵器の編年－9東北－」『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』

写　真　図　版

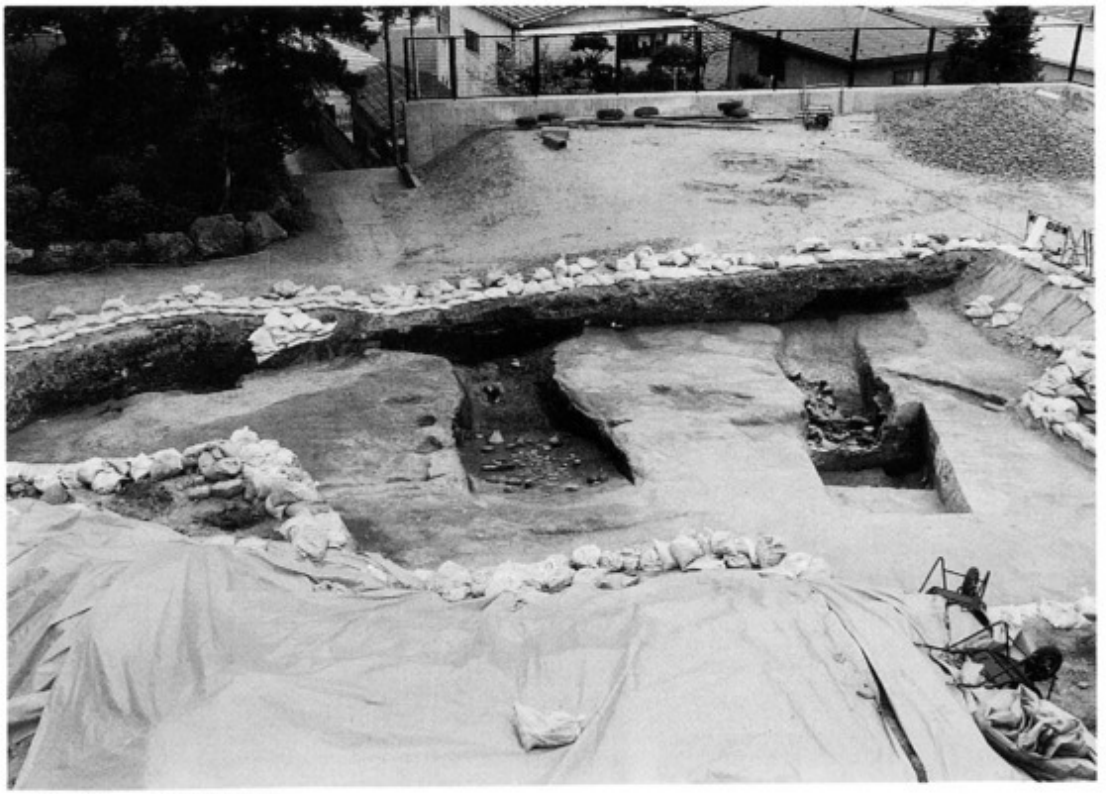


写真１　４・５号窯跡

写真２　１号窯跡

写真３　３号窯跡

写真4　2号窯跡

写真5　2号窯跡

写真7　2号窯跡前庭部遺物出土状況

写真6　2号窯跡遺物出土状況

写真8　2号窯跡▶

写真9　5号窯跡遺物出土状況

写真10　5号窯跡

写真11　5号窯跡
軒丸瓦出土状況

写真12　5号窯跡遺物出土状況

写真13　5号窯跡すり鉢出土状況

写真14　4号窯跡

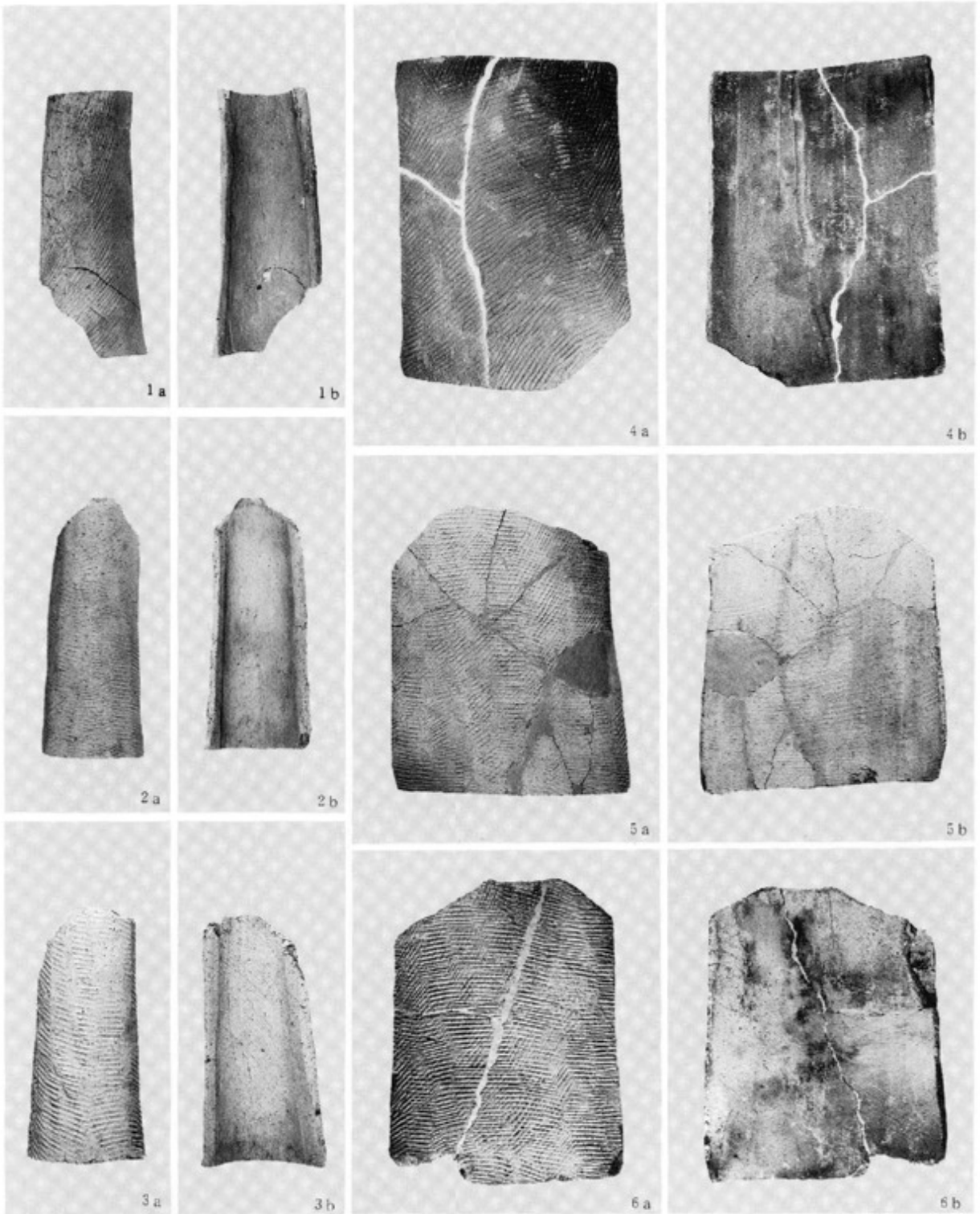
写真15　4号窯跡遺物出土状況

写真17　4号窯跡窯壁

写真16　4号窯跡焼成部施設瓦

写真18　1号灰原

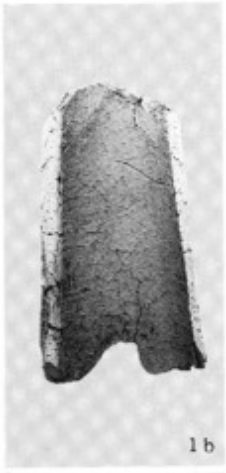
写真19　1号溝跡



1．丸瓦　Fb-1　　2．丸瓦　Fb-2　　3．丸瓦　Fb-3
4．平瓦　Gb-1　　5．平瓦　Gb-2　　6．平瓦　Gb-4

写真20　2号窯跡出土遺物（1）

1a


1b

4a

4b

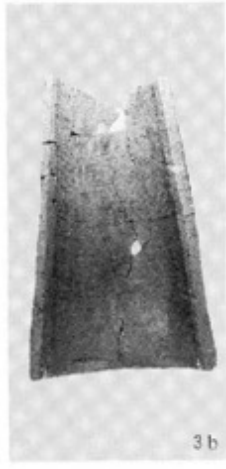
2a

2b

5a

5b

3a

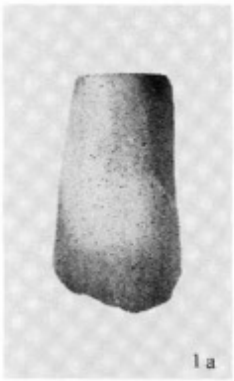

3b

6a

6b

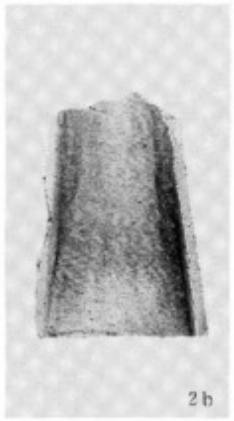
1．丸瓦　Fb-4
2．丸瓦　Fb-5
3．丸瓦　Fb-7
4．平瓦　Gb-10
5．平瓦　Gb-20
6．平瓦　Gb-11

写真21　2号窯跡出土遺物（2）


1a

1b

2a


2b

3a

3b

4a

4b

5a

5b

6a

6b

7a

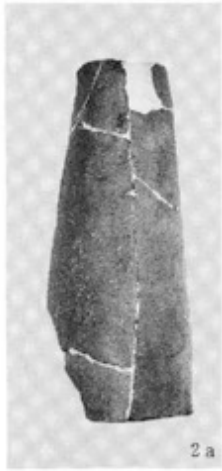
7b

1．丸瓦　Fb-10
2．丸瓦　Fb-11
3．丸瓦　Fb-12
4．丸瓦　Fb-13
5．平瓦　Gb-32
6．平瓦　Gb-26
7．平瓦　Gb-33

写真22　2号窯跡出土遺物（3）

1a

1b


2a

2b

3a

3b

4a

4b

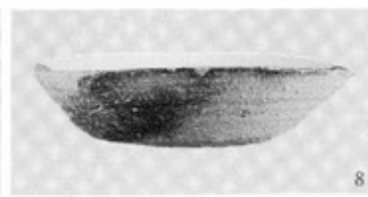
5a

5b

6a

6b

7


8

9

1．丸瓦　Fb-8
2．丸瓦　Fb-9
3．丸瓦　Fb-14
4．丸瓦　Fb-15
5．平瓦　Gb-21
6．平瓦　Gb-12
7．須恵器坏　E-1
8．須恵器坏　E-2
9．須恵器甕　E-3

写真23　2号窯跡出土遺物（4）

1a

1b

3a

3b

2a

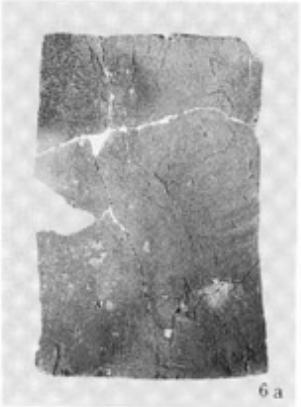
2b

4a

4b

5a

5b


6a

6b

7a

7b

8a

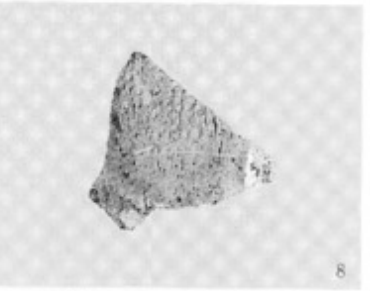
8b

1．丸瓦　Fb-25　2．丸瓦　Fb-27　3．平瓦　Gb-72　4．平瓦　Gb-75
5．平瓦　Gb-73　6．平瓦　Gb-74　7．平瓦　Gb-76　8．平瓦　Gb-77

写真24　4号窯跡出土遺物（1）

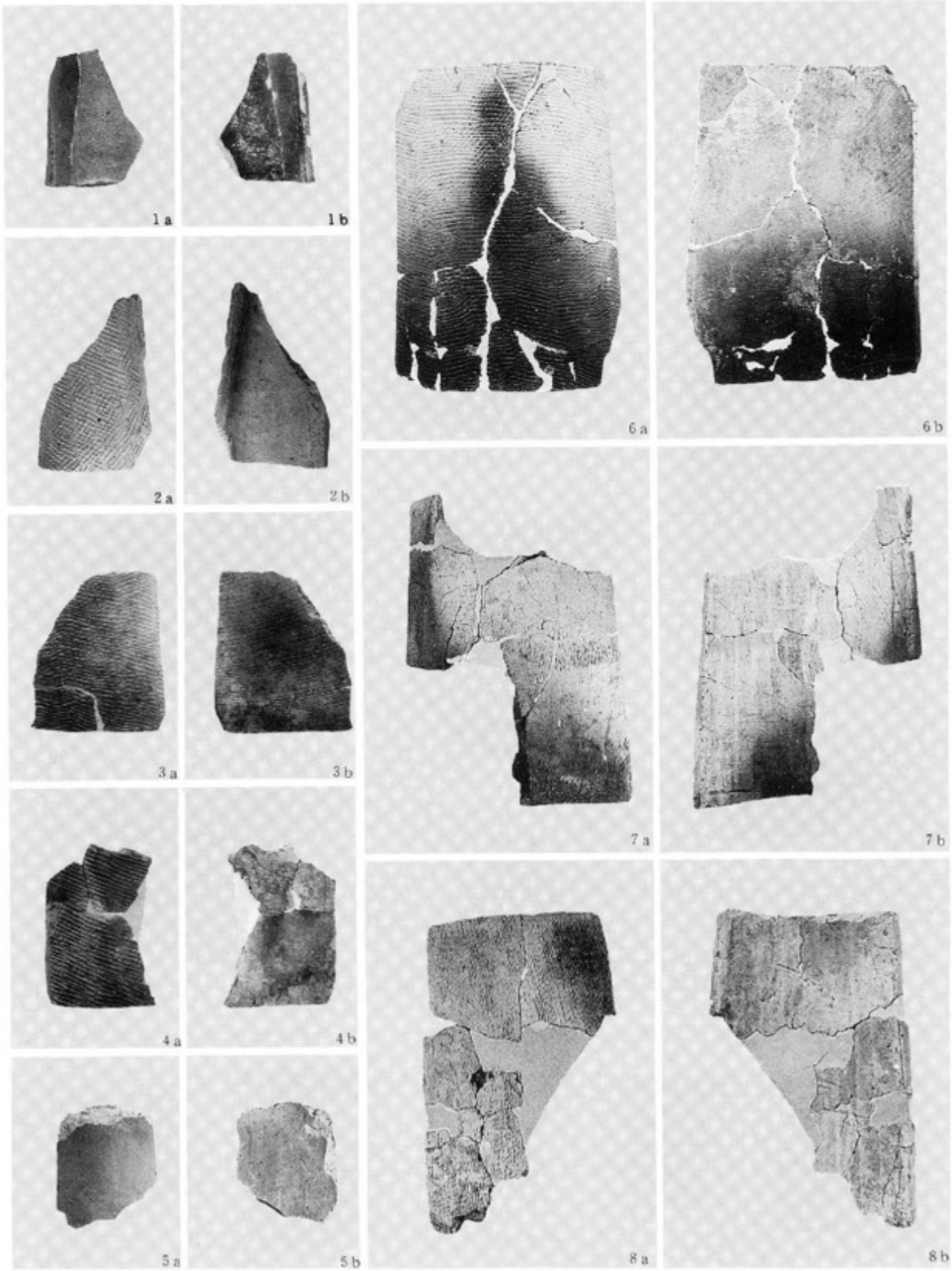
1．平瓦　Gb-82　　2．平瓦　Gb-83　　3．平瓦　Gb-84　　4．平瓦　Gb-85
5．平瓦　Gb-87　　6．平瓦　Gb-86　　7．平瓦　Gb-89　　8．平瓦　Gb-90

写真25　4号窯跡出土遺物（2）



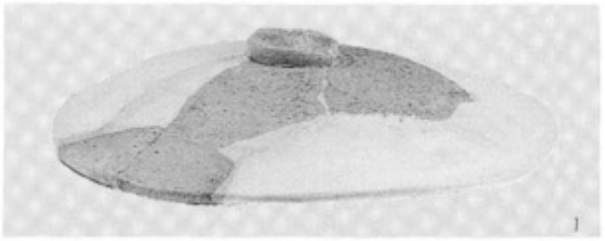
1．軒丸瓦　Fa-1　　2．軒平瓦　Ga-6　　3．軒平丸　Ga-3　　4．平瓦　Gb-125　　5．平瓦　Gb-68
6．平瓦　Gb-124　　7．平瓦　Gb-123　　8．平瓦　Gb-127　　9．平瓦　Gb-139　　10．平瓦　Gb-130
11．平瓦　Gb-129　　12．平瓦　Gb-140　　13．平瓦　Gb-143　　14．平瓦　Gb-142

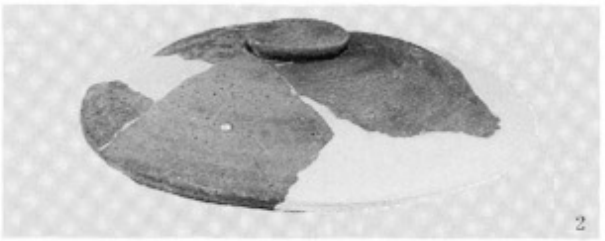
写真26　5号窯跡出土遺物（1）

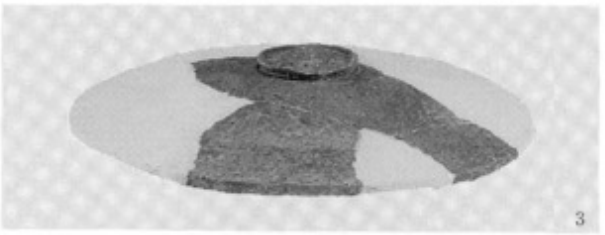


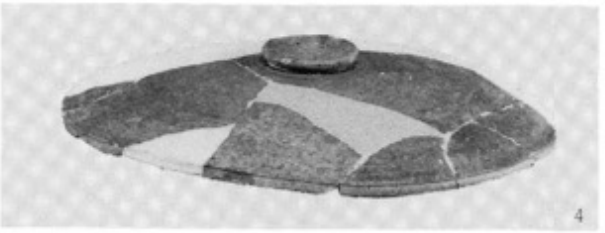
1．丸瓦　Fb-37　　2．丸瓦　Fb-35　　3．平瓦　Gb-148　　4．平瓦　Gb-147
5．熨斗瓦Gd-1　　6．平瓦　Gb-144　　7．平瓦　Gb-180　　8．平瓦　Gb-156

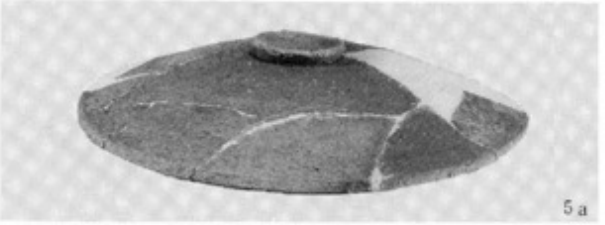
写真27　5号窯跡出土遺物（2）

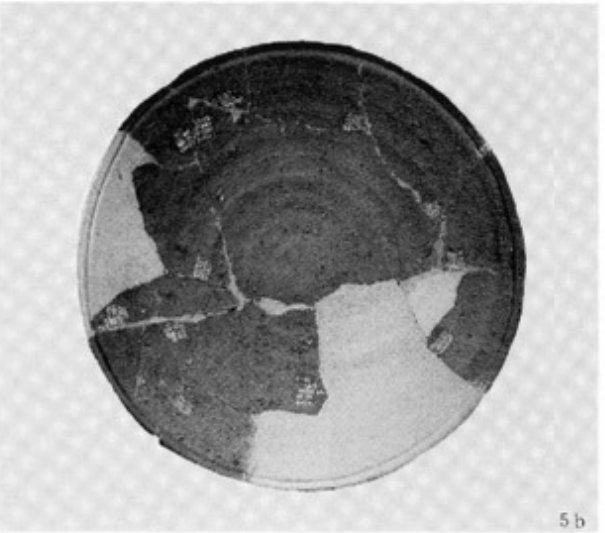


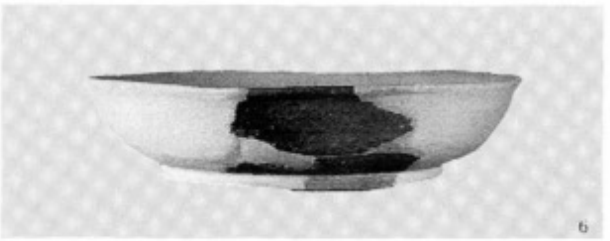


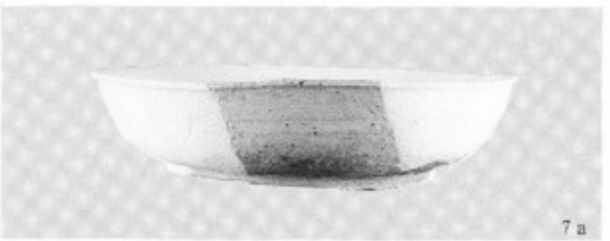


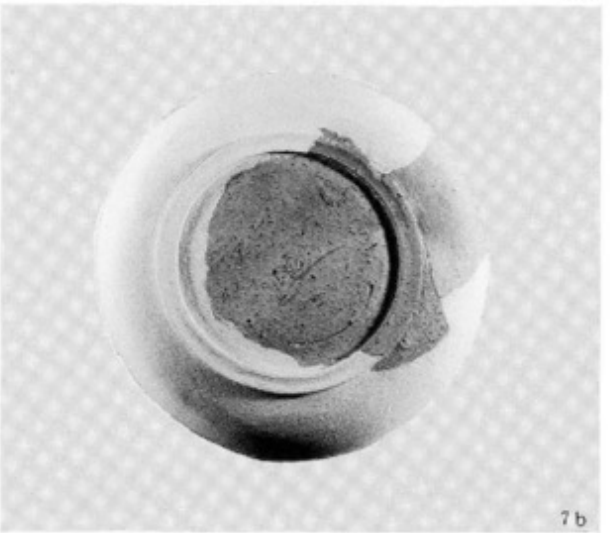


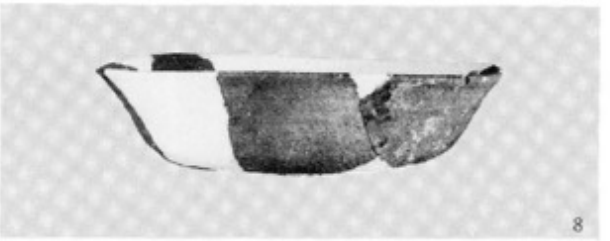






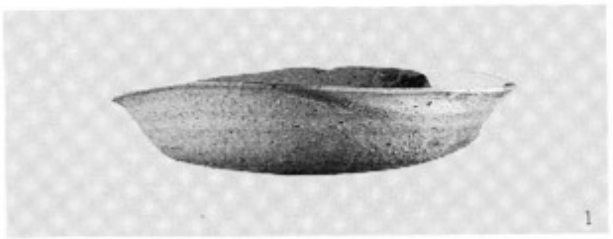


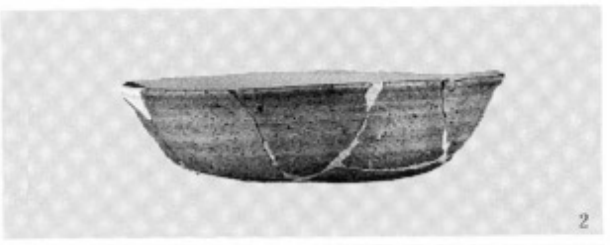


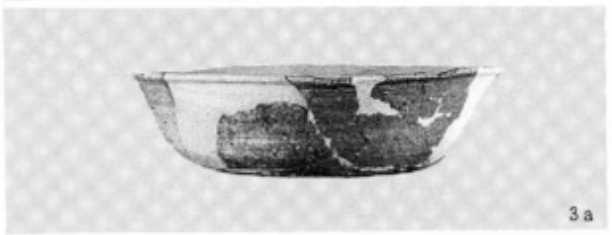


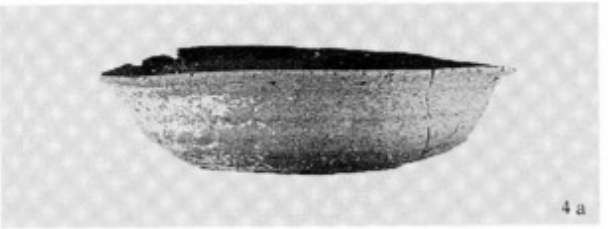
1．須恵器蓋　E-55　　2．須恵器蓋　E-50　　3．須恵器蓋　E-59　　4．須恵器蓋　E-51　　5．須恵器蓋　E-49
6．須恵器坏　E-17　　7．須恵器坏　E-16　　8．須恵器坏　E-11　　9．須恵器坏　E-12　　10．須恵器坏　E-22

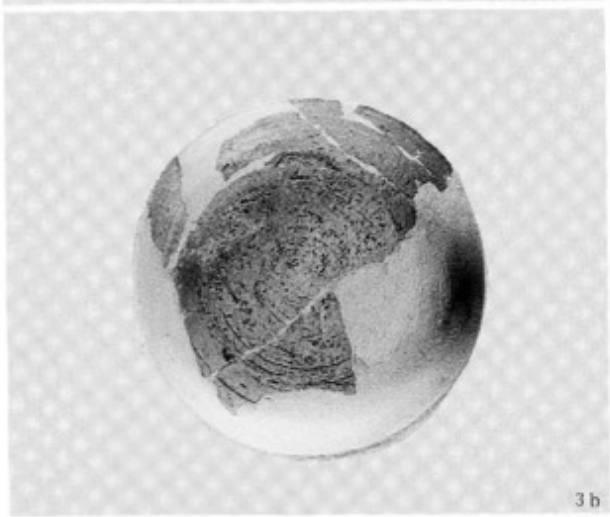
写真28　5号窯跡出土遺物（3）

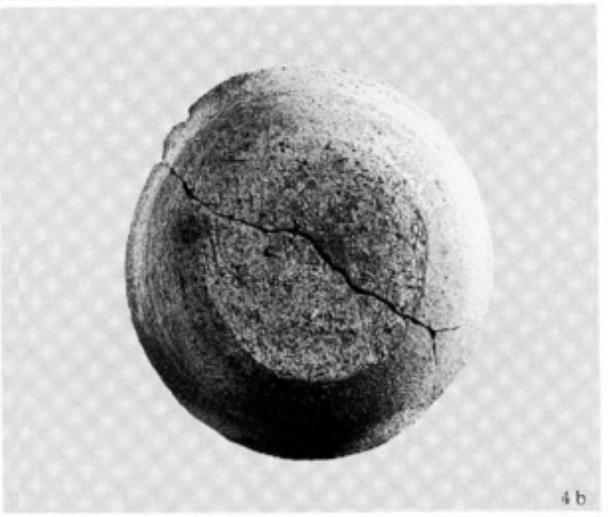


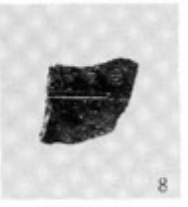


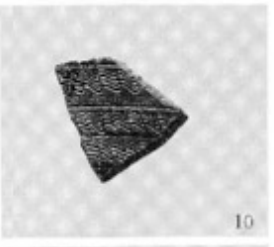








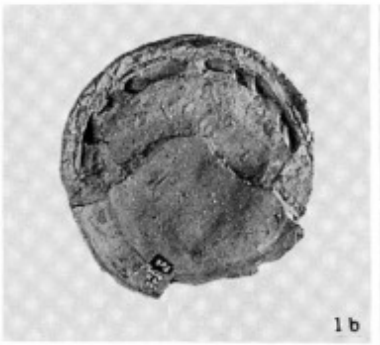




1．須恵器坏　E-13
2．須恵器坏　E-15
3．須恵器坏　E-18
4．須恵器坏　E-14
5．須恵器坏　E-19
6．須恵器坏　E-20
7．須恵器甕　E-99
8．須恵器甕　E-98
9．須恵器すり鉢　E-80
10．須恵器甕　E-97
11．須恵器甕　E-96

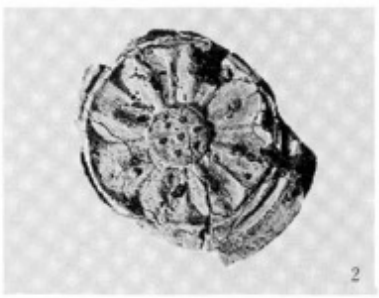
写真29　5号窯跡出土遺物（4）

1a


1b

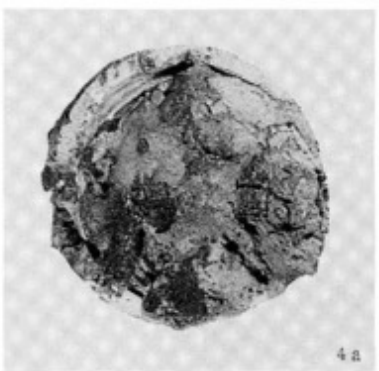
5a

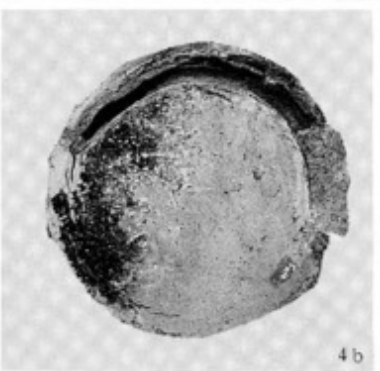
5b

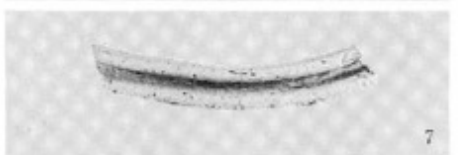

2

3

6


4a


4b


7

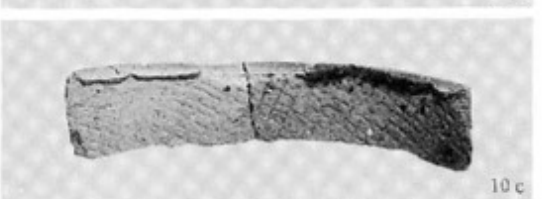
8

9a

9b

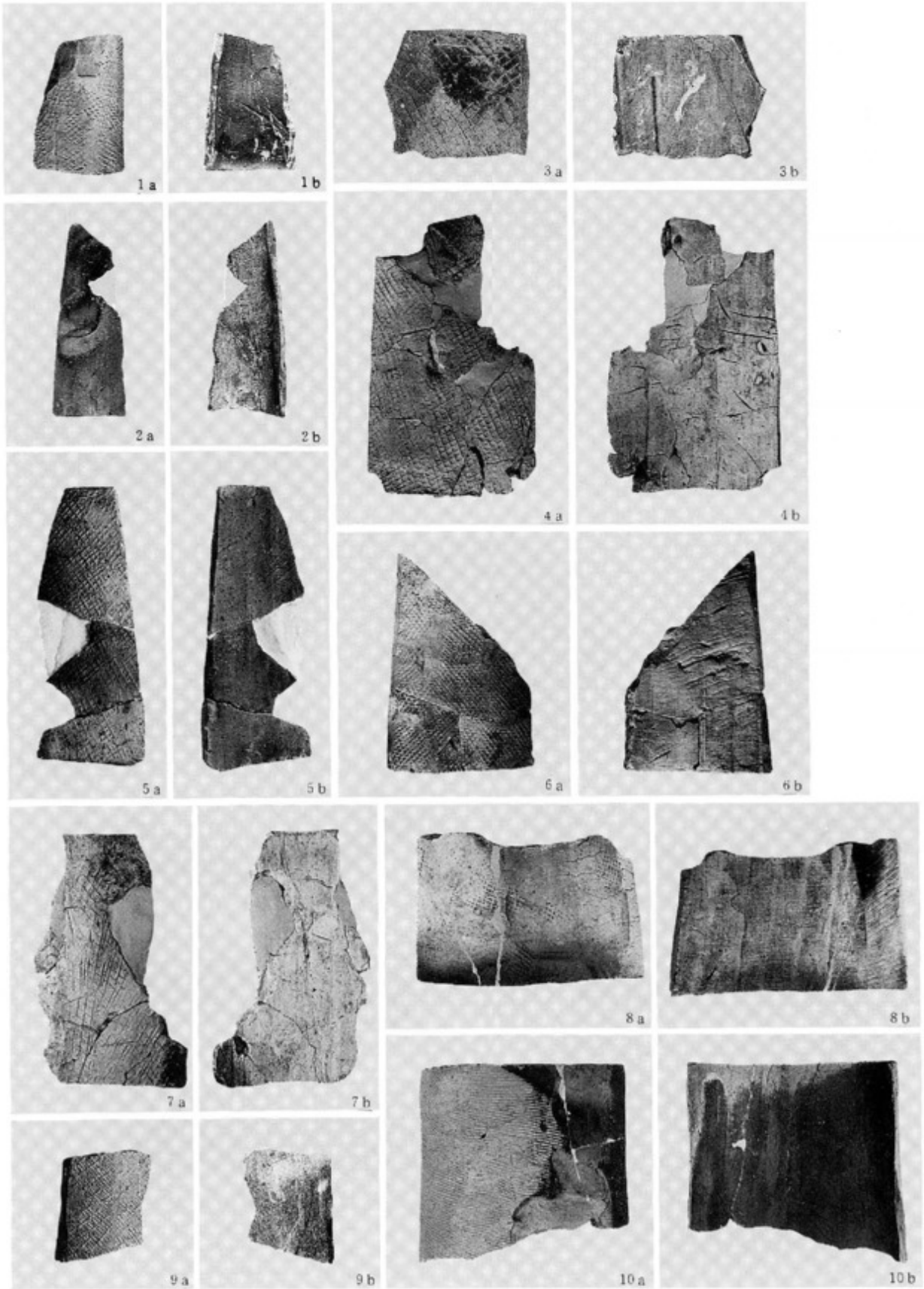
10a

10b


10c

1．軒丸瓦　Fa-5　　2．軒丸瓦　Fa-10
3．軒丸瓦　Fa-13　　4．軒丸瓦　Fa-14
5．軒平瓦　Ga-25　　6．軒平瓦　Ga-43
7．軒平瓦　Ga-44　　8．軒平瓦　Ga-50
9．軒平瓦　Ga-32　　10．軒平瓦　Ga-26

写真30　1号灰原出土遺物（1）



1．丸瓦　Fb-59　　2．丸瓦　Fb-77　　3．平瓦　Gb-184　　4．平瓦　Gb-181　　5．平瓦　Gb-203
6．平瓦　Gb-189　　7．平瓦　Gb-185　　8．平瓦　Gb-240　　9．平瓦　Gb-252　　10．平瓦　Gb-274

写真31　1号灰原出土遺物（2）

1a

1b

2a

2b

3a

3b

4a

4b

5a

5b

6a

6b

7a

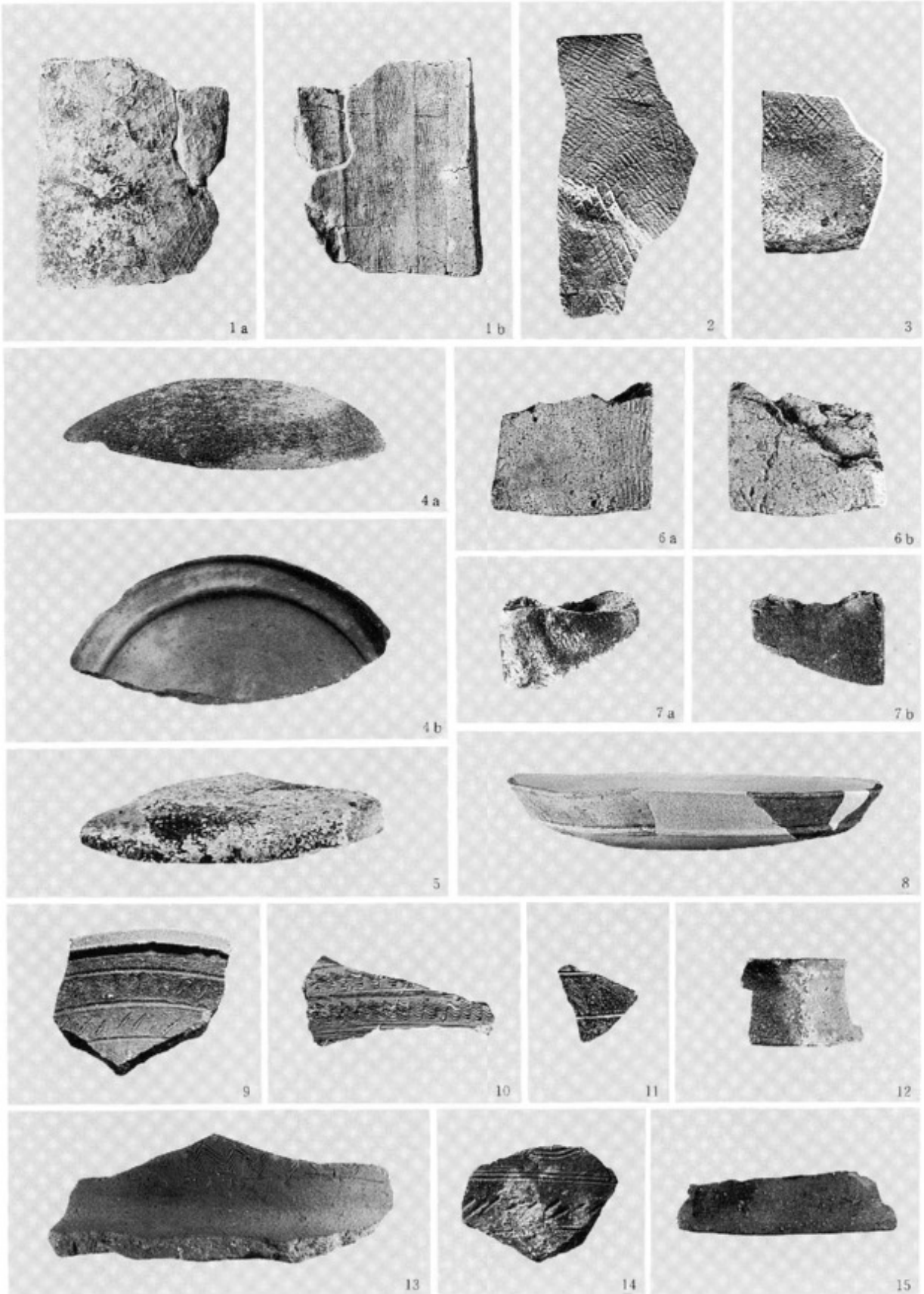
7b

8a

8b

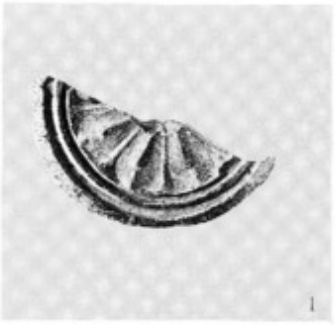
1．平瓦　Gb-239　　2．平瓦　Gb-313　　3．平瓦　Gb-285　　4．平瓦　Gb-321
5．平瓦　Gb-286　　6．隅切り瓦Gc-3　　7．隅切り瓦Gc-6　　8．隅切り瓦Gc-7

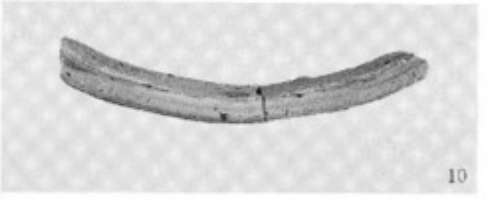
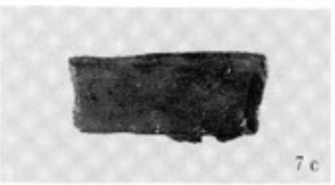
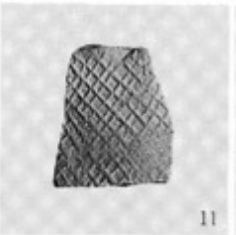
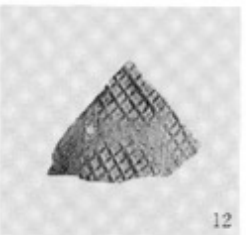
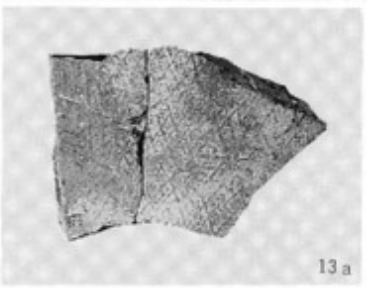
写真32　1号灰原出土遺物（3）

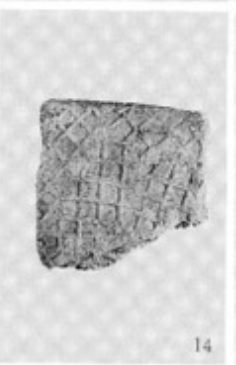


1．平瓦　Gb-205　　2．平瓦　Gb-267　　3．平瓦　Gb-268　　4．須恵器蓋　E-180　　5．須恵器蓋　E-183
6．埦　H-1　　7．埦　H-2　　8．須恵器高坏　E-167　　9．須恵器甕　E-198　　10．須恵器甕　E-205
11．須恵器甕　E-209　　12．円面硯　E-189　　13．須恵器甕　E-203　　14．須恵器甕　E-208　　15．円面硯　E-190

写真33　1号灰原出土遺物（4）



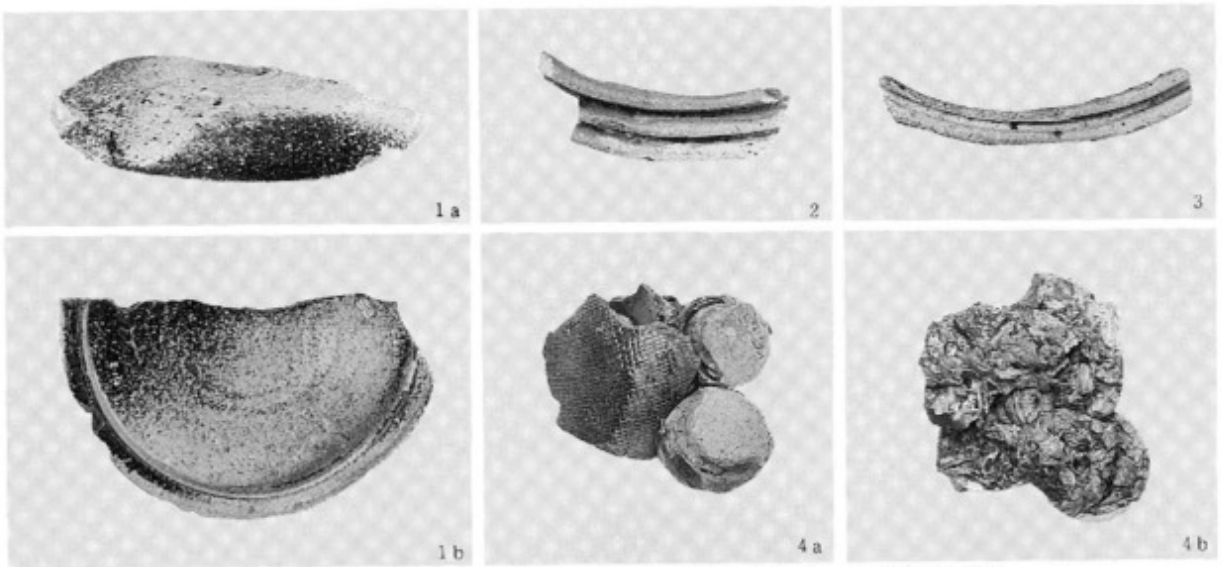








1．軒丸瓦　Fa-17
2．軒丸瓦　Fa-18
3．軒丸瓦　Fa-19
4．軒平瓦　Ga-37
5．軒平瓦　Ga-63
6．軒平瓦　Ga-36

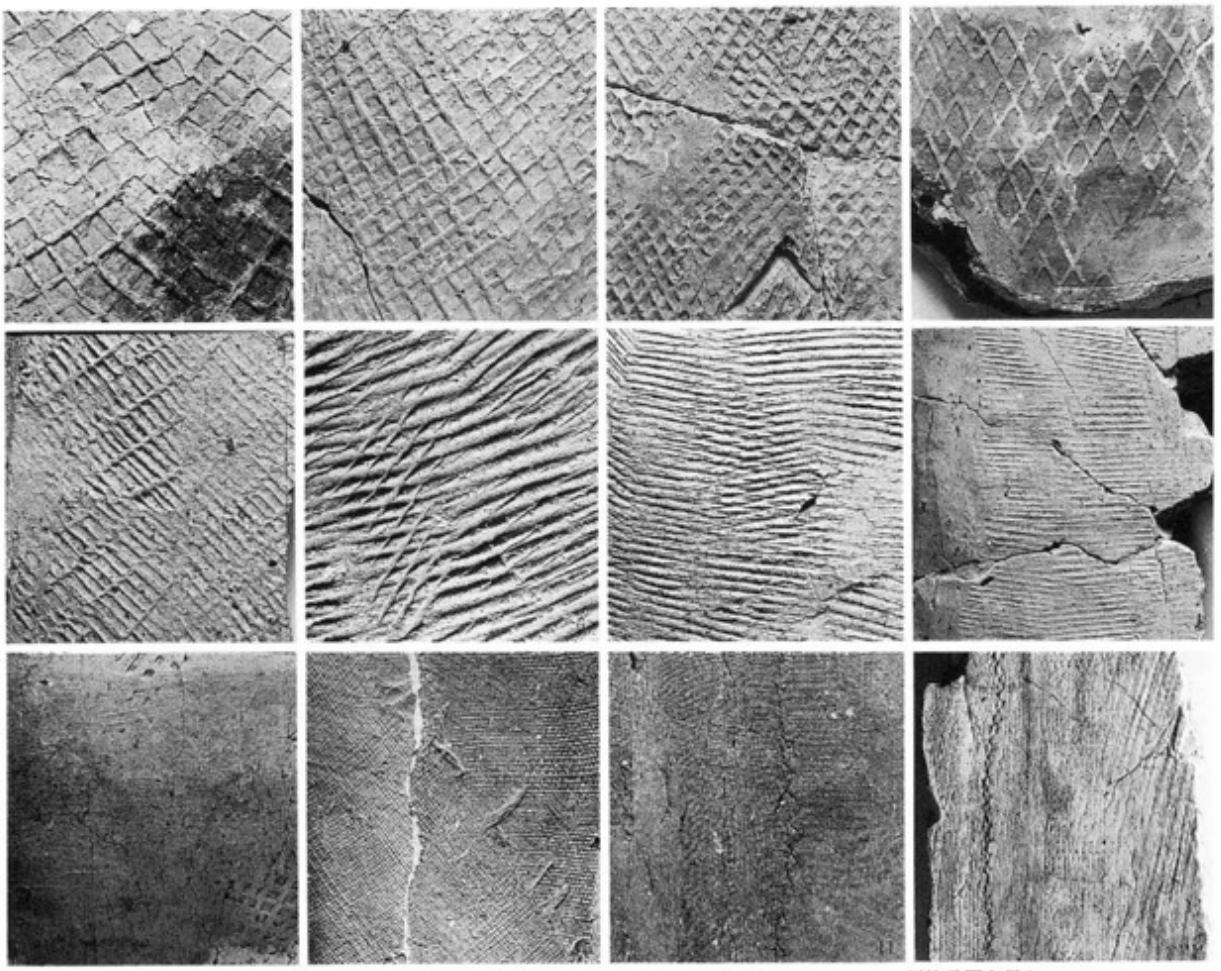
7．軒平瓦　Ga-65
8．軒平瓦　Ga-73
9．軒平瓦　Ga-66
10．軒平瓦　Ga-27
11．平　瓦　Gb-377
12．平　瓦　Gb-376
13．平　瓦　Gb-372
14．平　瓦　Gb-366
15．平　瓦　Gb-367
16．平　瓦　Gb-375
17．平　瓦　Gb-368
18．須恵器鉢　E-225
19．円面硯　E-222

写真34　1号溝跡出土遺物



1．須恵器蓋　E-154　2．軒平瓦　Ga-21　3．軒平瓦　Ga-38　4．軒丸瓦・平瓦

写真35　1号土坑周辺・1号灰原出土遺物



1．正格子叩き目A　2．正格子叩き目B　3．正格子叩き目C　4．斜格子叩き目A
5．長方形叩き目　6．平行叩き目A　7．平行叩き目B　8．平行叩き目C
9．無文叩き目　10．布合わせ目痕　11．布綴じ痕　12．布綴じ痕

写真36　瓦凹凸面の痕跡

文化財課職員録

課長　白鳥良一

管理係		調査第一係		調査第二係	
係長	菅原澄雄	係長	加藤正範	係長	田中則和
主任	村上道子	主任	結城慎一	教諭	太田昭夫
主事	佐藤正幸	教諭	佐藤好一	主事	佐藤甲二
〃	高橋三也	主任	篠原信彦	〃	渡部弘美
〃	庄子　厚	〃	木村浩二	〃	斎野裕彦
〃	佐藤寿江	〃	佐藤　洋	〃	荒井　格
		主事	吉岡恭平	〃	中富　洋
		〃	金森安孝	〃	平間亮輔
		教諭	小川淳一	教諭	五十嵐康洋
		主事	工藤哲司	〃	菅原裕樹
		〃	主浜光朗	主事	渡部　紀
		〃	長島栄一	教諭	熊谷裕行
		〃	工藤信一郎		
		教諭	神成浩志		
		〃	竹田幸司		
		〃	稲葉俊一		
		主事	佐藤　淳		
		教諭	川名秀一		

仙台市文化財調査報告書第168集

大蓮寺窯跡

——第2・3次発掘調査報告書——

1993年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3－7－1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 263－1166